ATLUS公式リプレイ攻略ノベル

# 真・女神転生

## [ファイナル・ストーリー]

井上尚美&メガテン解析隊[著]

EL ELOHIM ELOHO ELOHIM SABAOTH
ELION EIECH ADIER EIECH ADONAI
JAH SADAI TETRAGRAMMATON SADAI
AGIOS O THEOS ISCHIROS ATHANTON
AGLA AMEN

ATLUS公式リプレイ攻略ノベル 真・女神転生 ファイナル・ストーリー 井上尚美 &メガテン解析隊 [双葉社]

9784575231496
1910093012004
ISBN4-575-23149-5
C0093 P1200E

ATLUS公式リプレイ攻略ノベル

# 真・女神転生

## [ファイナル・ストーリー]

井上尚美&メガテン解析隊[著]
AUTHOR: NAOMI INOUE and MEGATEN ANALYZE TEAM

EL ELOHIM ELOHO ELOHIM SABAOTH
ELION EIECH ADIER EIECH ADONAI
JAH SADAI TETRAGRAMMATON SADAI
AGIOS O THEOS ISCHIROS ATHANTON
AGLA AMEN

©… シップス/ATLUS

[双葉社] 定価1,200円(本体1,165円)

# 真・女神転生

## 【ファイナル・ストーリー】

EL ELOHIM ELOHO ELOHIM SABAOTH
ELION EIECH ADIER EIECH ADONAI
JAH SADAI TETRAGRAMMATON SADAI
AGIOS O THEOS ISCHIROS ATHANTON
AGLA AMEN

EL ELOHIM ELOHO ELOHIM SABAOTH
ELION EIECH ADIER EIECH ADONAI
JAH SADAI TETRAGRAMMATON SADAI
AGIOS O THEOS ISCHIROS ATHANTON
AGLA AMEN
A
TE
G
TRA
GRAM
A
Ω
MA
TON
L
A

金子一馬

# 「真・女神転生」画集

【描き下ろし編】

ファイナルバトル

母親、友、時には自分自身さえも… 数えきれぬ程のものを失いながら、自分の道を探し続け、遂には神を倒してしまったショウは、この戦いに終止符をうつべく、混沌の王、アスラにさえ挑む。勝利の果てに待つものは…

# 「アクシデント」

「瞬間移動システム」。夢の発明になるはずだったこの研究が、思わぬ事態を引き起こす事になろうと誰が予想したであろうか!? 最悪のアクシデントによって、まもなく異界の扉が開かれる…

# ゴトウ

悪魔の力を借りて甦った彼は、悪魔を召喚する力を身につけ、自らの思想を実現させる為にクーデターを引き起こす。しかし、自分の存在が大きな流れの中の一部であることに気付かず、流れに逆らうことができなかった

# 金子一馬「真・女神転生」画集

デザイン的に、または容量の問題でカットされたモンスター達は数多い。ここでは、実際には使用されることのなかった悲劇のモンスター達を紹介していこう。

# 【没キャラクター編】

SHIN·DIGITAL DEVIL STORY

## インドラ
INDRA

ゲームのスト[illegible]っていない頃、天魔クラス（アスラ[illegible]ラ）として金子氏がデザインしたもの。[illegible]はそのまま魔神インドラに引き継がれている。

## 女郎ぐも
JYORO-GUMO

[illegible]すべきは、[illegible]フォルムが完成さ[illegible]事であろう。

## フルーレティ
FLUERETTY

金子氏が、かなり[illegible]たモンスター。あまりにも[illegible]すぎることと、容量の問題で、[illegible]の「フルーレティ」の名に[illegible]ついてしい。

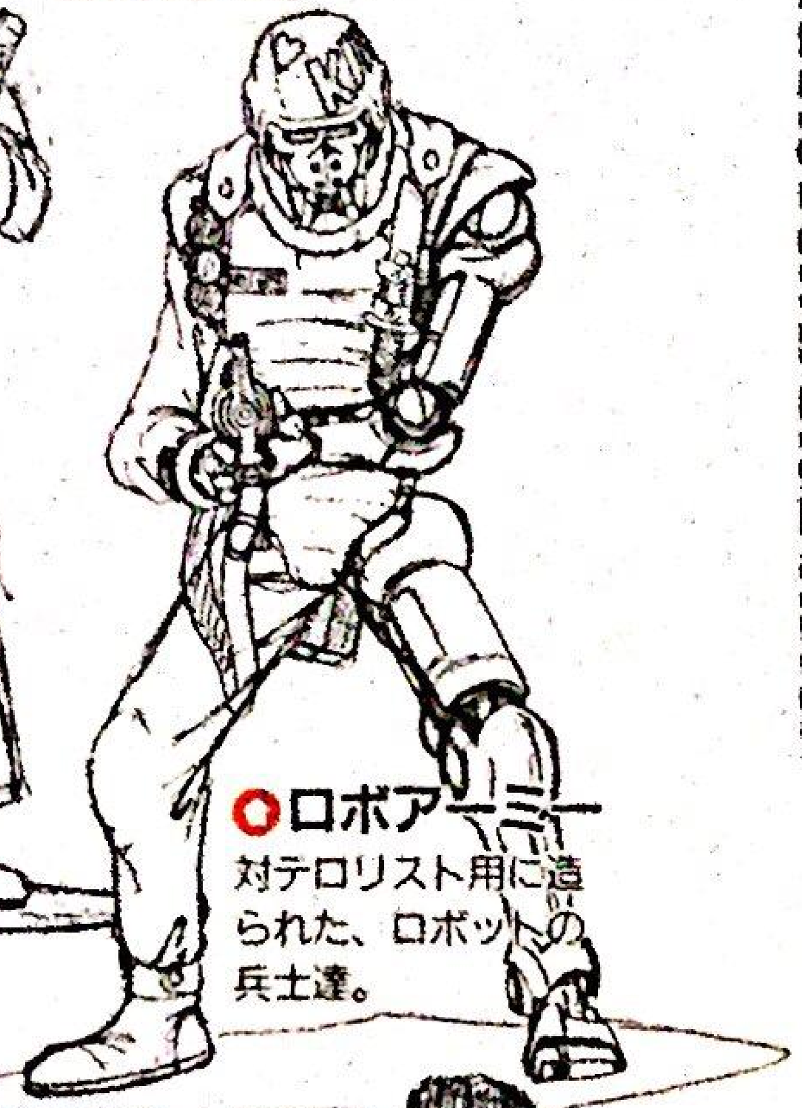
## クルセイダー
CRUSEIDER

ゲーム中に、「デイビッド」、「ペイルライダー」「大僧正」という3体の[illegible]モンスターが存在するが、このクルセイダーも同じ[illegible]のモンスターとしてデザインされた。実際ゲーム中に登場したら、どのような動きをみせてくれたであろうか。

## 【キャラクター・イマジネーション】
CHARACTOR IMAGINATION

ゲーム中、重要な役割を持つキャラクター達は、何点ものイメージイラストが描きおこされた。実際、ゲームに登場しなかったキャラクターも交えつつ紹介していこう。

**伝道師**
メシア教を世に広める為に送り出された人物。



**ロボアーミー**
対テロリスト用に造られた、ロボットの兵士達。

**ネビロス**
死人使いネビロスの前身。骨で作った操り人形を持っている。

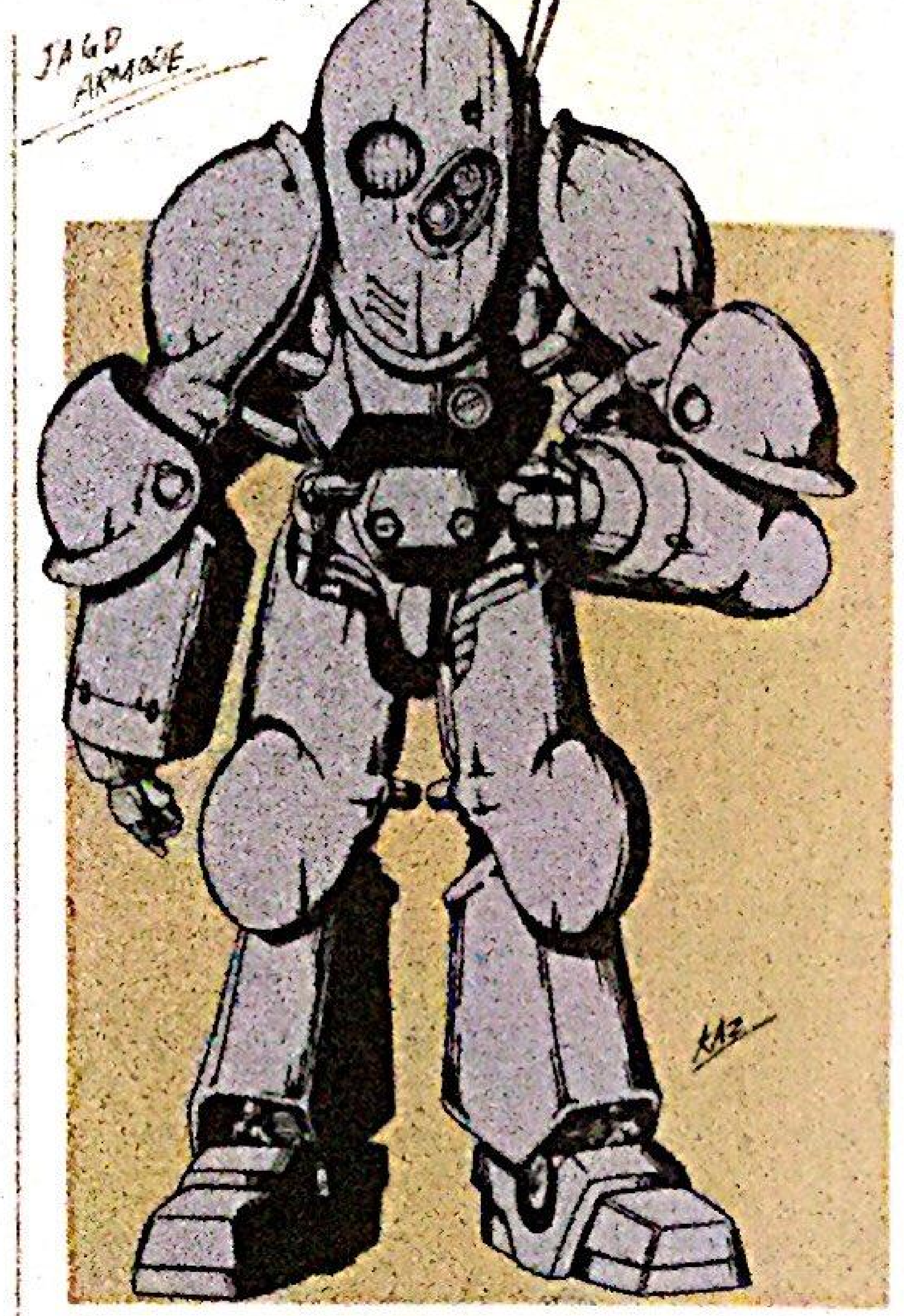
**ゴトウ**
当初、ゴトウは軍服を着ていたが、野望に燃える男[illegible]と裸になった。

**ベリアル(初期)**
赤おじさんことベリアルも当初このような姿だった。

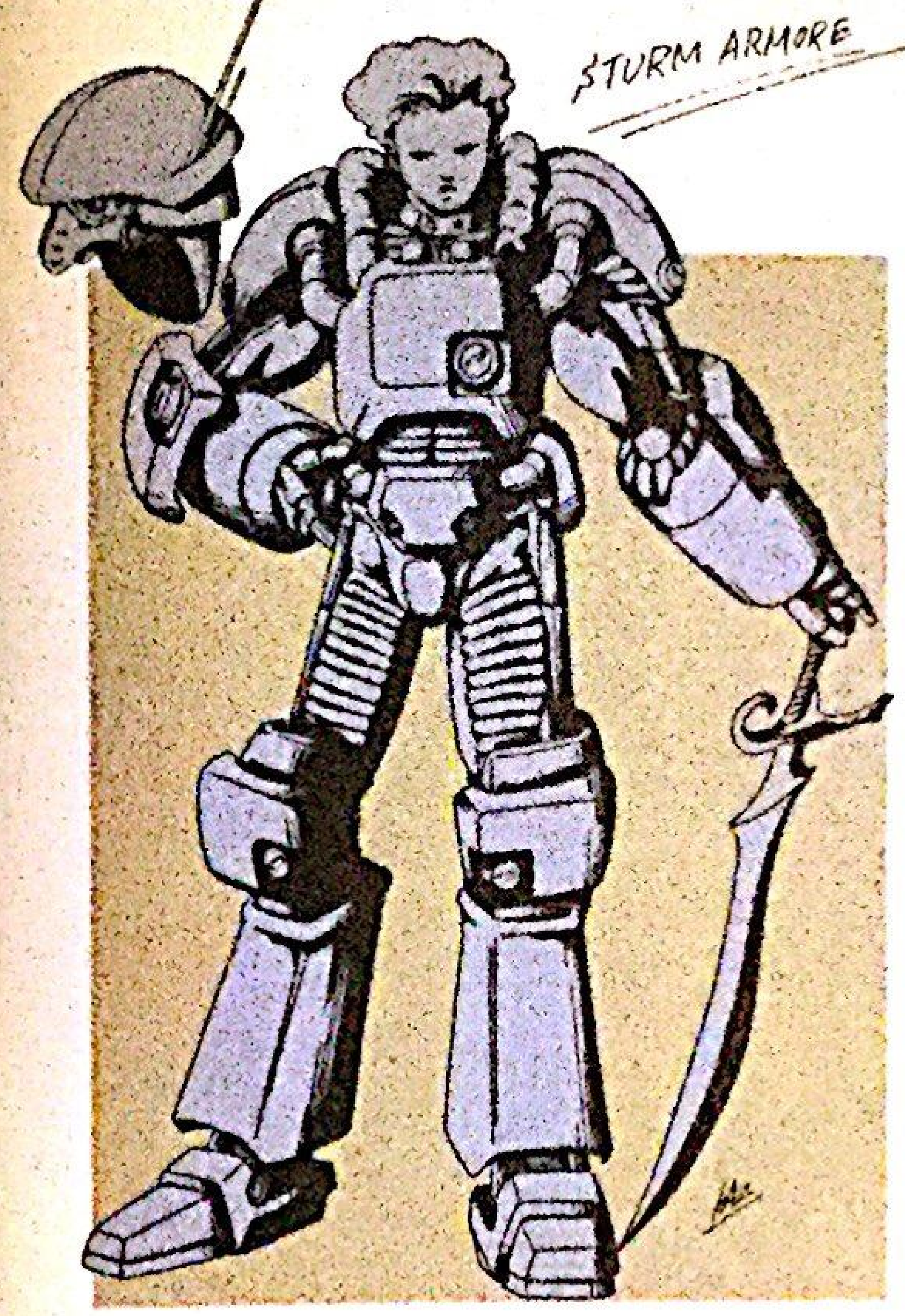


## 【設定イメージ集】
ARMOR IMAGINATION
【アーマー・イマジネーション】

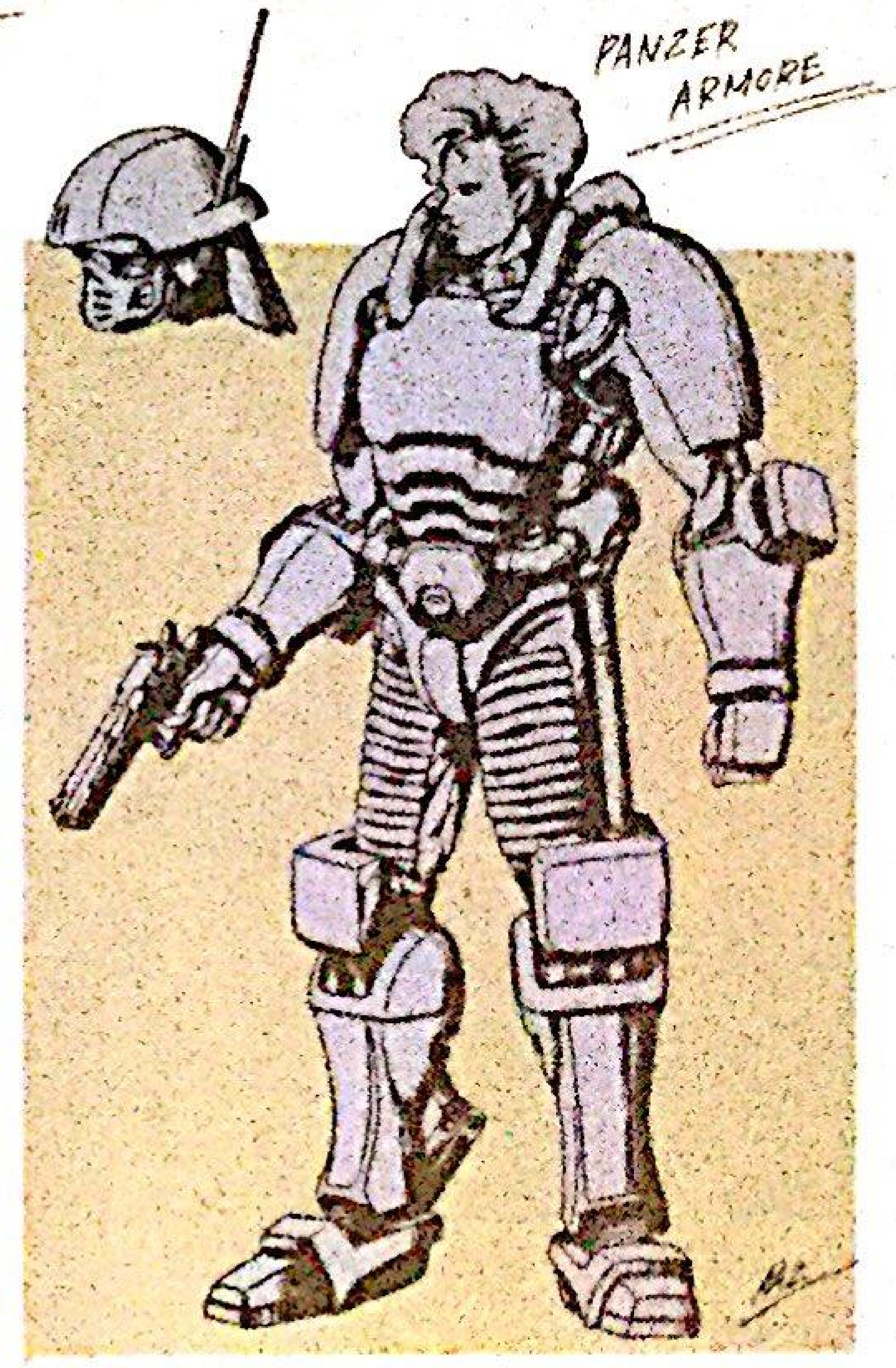
最強の防具だけにとどまらず、ショップで売られている一つ一つにまで、細かいデザインがなされていた。ここでは、強力なアーマー6点のイメージイラストを見ていこう。




[ヤクト・アーマー]
**JAGD ARMORE**
大破壊後の放射能地帯でも行動可能なように体全体をおおったパワードスーツ。その重さゆえ、装備できる者は少ない。

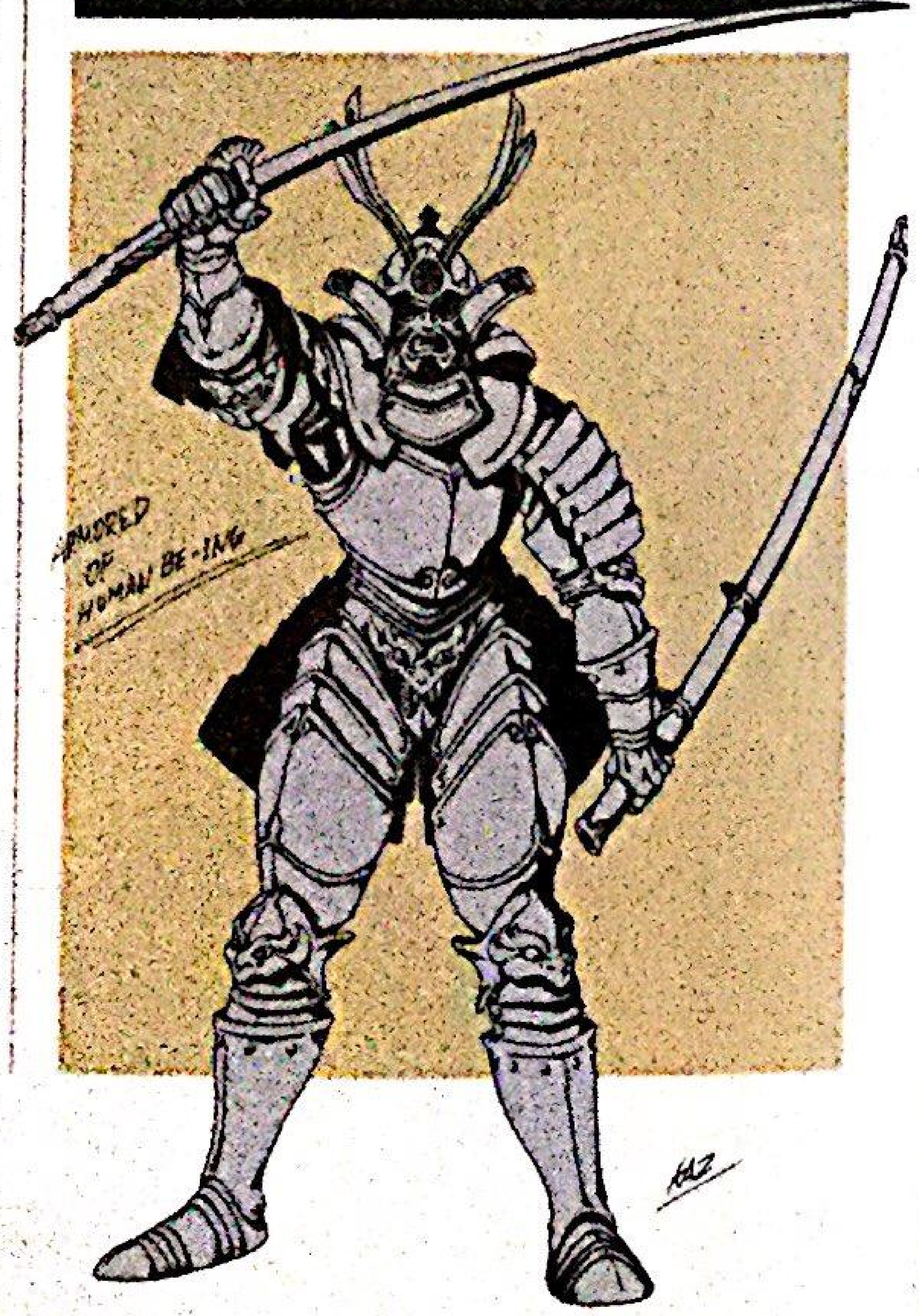



[シュツルム・アーマー]
**STURM ARMORE**
パンツァー・アーマーの改良版。機動性、パワー共に向上している。鎧というよりは、パワードスーツに近い。



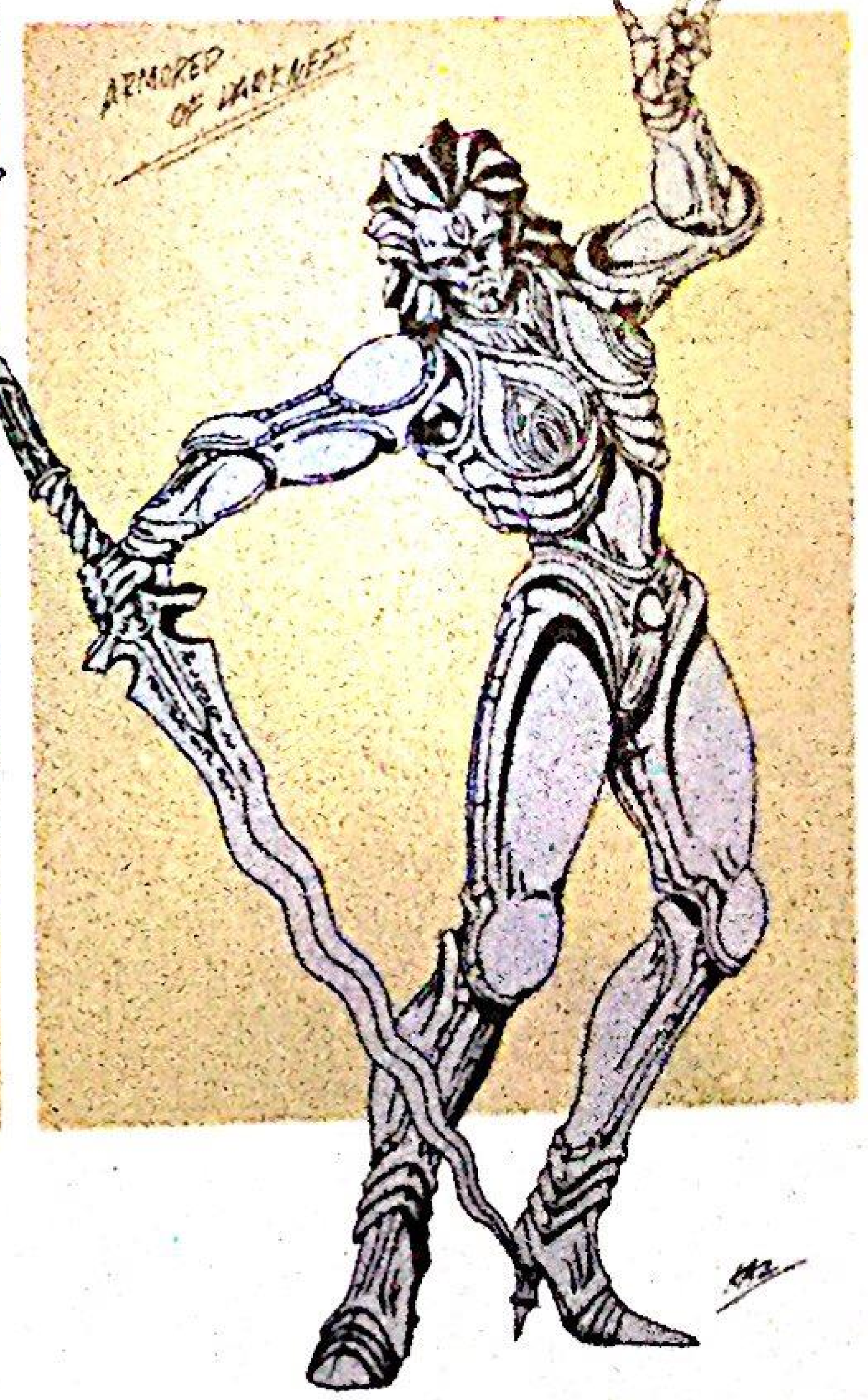

[パンツァー・アーマー]
**PANZER ARMORE**
女性でも装備可能な機動性を重視した装甲。これを装備することで防御力はもとより、腕力も上げることができる。

[アーマー・オブ・ヒューマンビーイング]
**ARMORED OF HUMAN BE-ING**
人類に残された最後の鎧。ゲーム中では、マサカドの、武器、防具として存在する。属性がニュートラルでないと装備できない。



[アーマー・オブ・ライトネス]
**ARMORED OF LIGHTNESS**
メシア教の洗礼を受けた者だけが装備できるロウの戦士の鎧。古の神々が、悪魔と戦う為に作ったもの。

[アーマー・オブ・ダークネス]
**AMORED OF DARKNESS**
ゲーム中では、カオスルートで進んだ時のみ入手できる、カオスの最強の鎧。暗黒の力を増幅させる働きがある。



# 真・女神転生とその彼方に…

## 【プロジェクトメンバー・インタビュー】

数多くの感動と伝説を生み出した「真・女神転生」。その制作に携わった男たちに、その現在と過去と未来を語ってもらった。誰も知らなかった真・女神転生の開発秘話。そして現在進行中の次回作に対する情熱等々、一挙公開。

## STORY

［物語&世界観］

### すごい未来の話とか、逆に太古の神と悪魔の話とか、全9部作にだって膨らむ豊潤な題材がメガテンにはあるんですね。

伊藤（以下Ⓘ）真・女神転生のね、うまくいかなかったっていう部分はロウヒーローのキャラクター設定なんですよ。つい心情的にカオスヒーローの方にかた入れしてしまって、ロウヒーローがきれいごと言いすぎる。やはりもっとプレイヤーが共感できるようにしたかったな、と。

鈴木（以下Ⓢ）僕は合体が気になるね。カオスとロウで差別化をはかったんだけれども、それでバリエーションが薄くなってしまった。あと、ゲームの始まりからエンディングまで一応きちんと考えて新しい仲魔を合体させていけばスムーズにクリアできるよう戦略性を持たせておいたんだけど、難しすぎた。もう少し親切にアドバイス等を入れておけば良かったね。

Ⓘまあ、でもメガテンのきわどい部分はうまく表現できたんで、個性的なものは作れた。これは次につながる大きなステップ。

Ⓢそう。オープニングとかはうまくいった。のっけからいきなり3Dの、しかもわけのわからないような不思議な世界にプレイヤーをひきずり込む。それも自然にね。ゲームにふわっと入れるようになってる。でもまあ、次回作への課題は山積み。とにかくシステム関係をきっちりやりたい！　世界観の方はどちらかというと心配してない。今までのメガテンとはまったく違う世界観を提示できると思いますよ、次回作では。かつ、メガテンの本筋ははずしてない。

Ⓘそう、システムね。アイテムの選び方とかオートバトル、3Dオートマッピング等、とにかく使いやすく！　またそういったシステムを使って、プレイヤーがより楽しめるような内容を目指したい。基本的には前作のシステムをいかに洗錬させるか、これがテーマですね。

Ⓢストーリー的にはいろいろ堀り下げてみたいよね。旧約聖書とかはすごく面白い。こんなところからいくつかモチーフにしたいと思ってる。ハルマゲドンやね、黙示録の神のさばきとか……ひょっとするとストーリー的なテーマもこんなところから出てくるかも……。まあ、こういったところからアイディアを膨らませていくといっぱい出てくるんですよ。すごい未来や逆にすごい過去の神と悪魔のからみとか、地球を追放された民の話とか。これを全部やろうと思ったら、スター・ウォーズの最初の構想のように全9部作にもなってしまう(笑)。

Ⓘ次回作を考えるとき、僕はいつもプレイヤーに真剣にとりくんでもらえるようなものを、と考えてます。真剣にとりくんでもらえば、それなりのものが返ってくるようなものを、こっちも真剣に作ります、と。

Ⓢ注意深くプレイしてもらった人は、より多くのことを受けとめられるようなイベント展開ということですね。プレイヤーの行動がきちんとゲーム展開にはねかえるというのがメガテン・シリーズの伝統です。納得がいくようにスタッフもがんばってるんで、次回作にも多いに期待して下さい！　ちなみに、あっと驚くようなシステム上の裏ルートなんかも作ってみたいと思ってるんで、こちらの方も乞、御期待！

■ INTERVIEWS

【伊藤竜太郎】

企画、シナリオを主に担当する。その他、コマンドの設計やシステム等も彼のジャンル。金子、鈴木と共に全ての世界観を作り出した。

【鈴木一也】

企画と悪魔の監修を主に担当する。また、合体のシステムや会話のフロー等も制作。ゲーム全体をひきしめる、スタッフのスパイス役。

# MUSIC
［音楽］

## とにかく女神転生シリーズは自分の世界をそのまま表現しています。次作ではラップのようなBGMもやってみたいね！

真・女神転生は、ある意味ですべてが実験で終わってしまったというのが素直な感想です。スーパーファミコン用のBGMを作るというのが初めてだったもんで、スペックなども良くわからなかったりね。それを確かめながら作っていったんですよ。あと、容量の制約もあったし……。

でも次回は、任天堂からもっとうまい容量の使い方なんかも教えてもらったんで、もっといろんな表現が自由にできそうです。音色も増やせるし、エコーなどの効果もふんだんに使える。それと、スケジュールをたっぷりとってもらった。これがじつは一番大きい（笑）。

トライしてみたいのはボコーダー（肉声をデジタル信号にして音色を変化させるイフェクター）のような音を出す。あと、ラップをやりたい。できるかどうかわかんないけど、リズムに声のような感じの音をかぶせていって……。イメージはあるんですよ。

それから、全体的に曲は長くなると思いますね。今回のはちょっと短かすぎたかな、と反省してます。音色が自由に使えるんですが、あまりそれにたよらないで、楽曲として完成度を高めていきたいですね。

もともと、僕はクイーンやイエス、ツェッペリンのファンでして、女神転生の世界観はそんな趣味性をストレートに出せるんで楽しいですよ。わりと暗めのヘンな曲を書いても合ってしまう。まあ、3作やってきてサウンド的には自分のカラーで染めたかなというところもありますけど。ただし、シリーズといっても毎回世界の設定も変わるんで、いつもすべて新しく作曲していきます。そういう意味では毎回が実験。そこが楽しい！

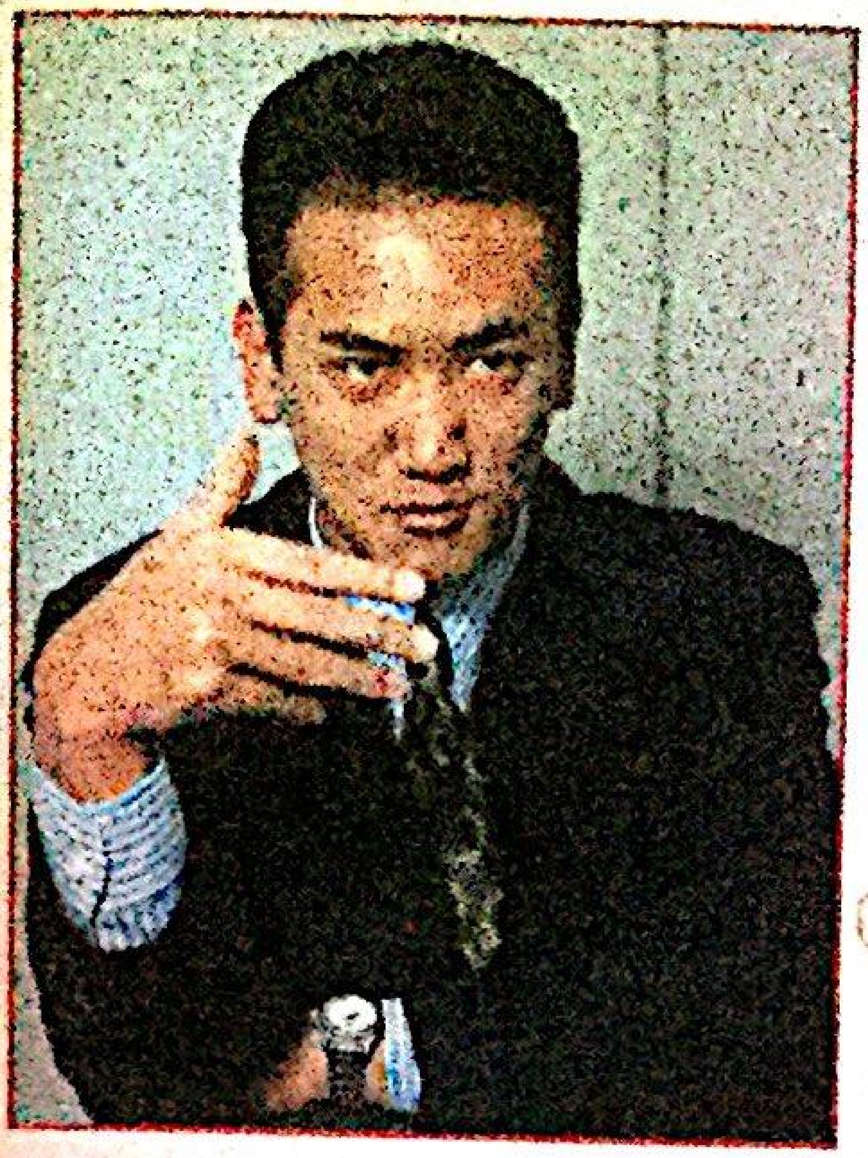
■ INTERVIEWS

【増子　司】

BGMSE等のサウンドを担当。女神転生シリーズ以外にも、スターウォーズやマイティ・ボンジャック等、代表作にはことかかない。

# VISUAL
［美術］

## 次回作のために京都三十三間堂を訪れ、無数の仏像に出会った。そこで神、仏、そんな精神的世界の存在感に圧倒された。



【金子一馬】

メガテンシリーズのキャラクター及びグラフィックデザインを担当。その特異なタッチでゲーム世界を神秘色に染めていく、悪魔絵師。

真・女神転生ですか？　けっして満足してないですよ。3Dで容量くっちゃって、色替えでいくつもダンジョンを表現しなければならなかったりね。2Dのマップ面とか、もっとこだわりたかった。独特のコンピュータライズされた平面世界を描きたかったんでね。最初は2Dのマップをワイヤーフレームでやろうとしてたくらいなんです。でも結局線画のほうが容量くいすぎるということで、ボツ。

キャラクターに関しては、定番通りにおさめちゃったな、と。次回作ではもっともっとデザイン的に遊んでみたい。例えばね、聖書の「エゼキエルの書」とかをひも解いてみると、天使とかもとんでもない姿なんですよ。足が何本あって、頭がいくつくっついていて……ほとんど月着陸船（笑）。化物みたいに天使を描いてるわけです。だから、僕ももっともっとぶっとんでもかまわないだろうと……。

まだまだ東南アジアとかケルトとか、女神転生シリーズで未開拓の神と悪魔はいくらでもいるんで、そのあたりもつっこんでみたいですね。そんな題材を選んで、絵として表現したいテーマとしては、やはり怖さです。といっても、ただ牙がはえているとか血が出ているとかいうのではなく、もっと内面的な恐怖。例えば悪魔というものが何で存在しているのか、そこに込められた悲しさや怒り、そういったものが描けて、始めて本当の怖さを表わすことができると思ってます。

先日、京都の三十三間堂に仏像を見にいってきたんですよ。すごく多くの仏像があって、それぞれが違う表情を持っていて……。デザインがどうこうというレベルを超えて、神の、仏の領域に踏み込んだ感動があったんです。そんな強い存在感、出してみたいですね！

**真・女神転生とその彼方に…**

# PROGRUM
［プログラム］

## ある意味で極めちゃった部分があるんで、真・女神転生の続編ではどうやってそれを超えるか!? 七転八倒してますよ。

# 【岡田耕始】

メガテンシリーズのメインプログラムを担当する。また、全体のディレクションもかねる。開発のキーマンなのだ。

もうすでに真・女神転生の続編にとりかかっています。今回は前作に比べてかなり容量をアップする予定です。このプラスの容量でどう〝質〟の向上をはかるかがポイントですね。マップを拡大していくとか、ストーリーをどんどん長くしていくとかといった量の部分にこだわるのではなくて、あくまでも質の部分です。

例えば合体。4神合体とかを考えてるわけではありません。複雑化に向かうんじゃなくて、真・女神転生の剣の合体のように、何か意外性のあるアイテムどうしの合体なんか面白そうですね。あとは、イベントのグラフィック演出の充実。そしてひとつひとつのイベントの会話のバリエーションを、もっと増やして豊かにしていきたい。

これは前作の反省点から生まれたことなんですけど、アイテムが種類が多いわりにあまり使えなかった。どう効果があるのか明確に伝わらなかったと思うんですね。ですから次作では、アイテムの〝鑑定〟という要素を入れるつもりです。あと店のシステムも同時に何個でも売り買いできるようにしたいですね。

まあ、こんなアイディアはいろいろありますが、一番たいへんなのは、やはり前作を超えなきゃならないというプレッシャーとの戦いですね。ある意味で極めちゃった部分があるんで……。

大きくこのシリーズを見ていくと、僕がもっとも大切にしていきたい部分というのは展開の自由さということ。きめられたレールの上でのゲーム進行じゃない。絵本的なゲームじゃない。とにかくこちらからなるべく豊かな問いかけをして、プレイヤーが物語を自分で作れるようなゲームを完成させたいですね。

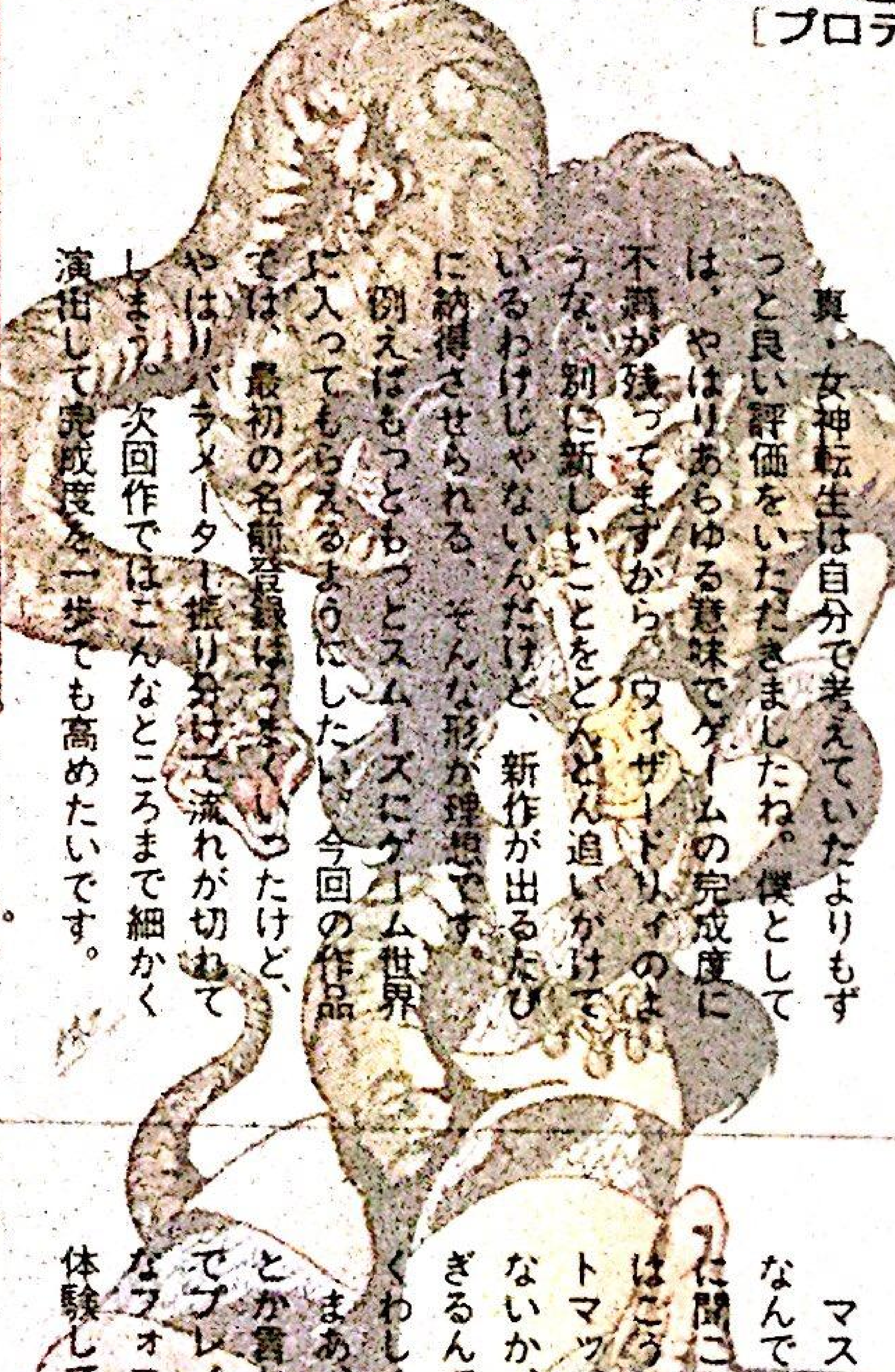
真・女神転生とその彼方に…

# PRODECE
［プロデュース］

## もっとパーフェクトな完成度、これが次回作の大きなテーマ。

# 【新野洋右】

個性的なスタッフをまとめあげる制作の要。ゲーム性や商品としてのバランスをクールに見つめる。現場の総監督がこの人だ！



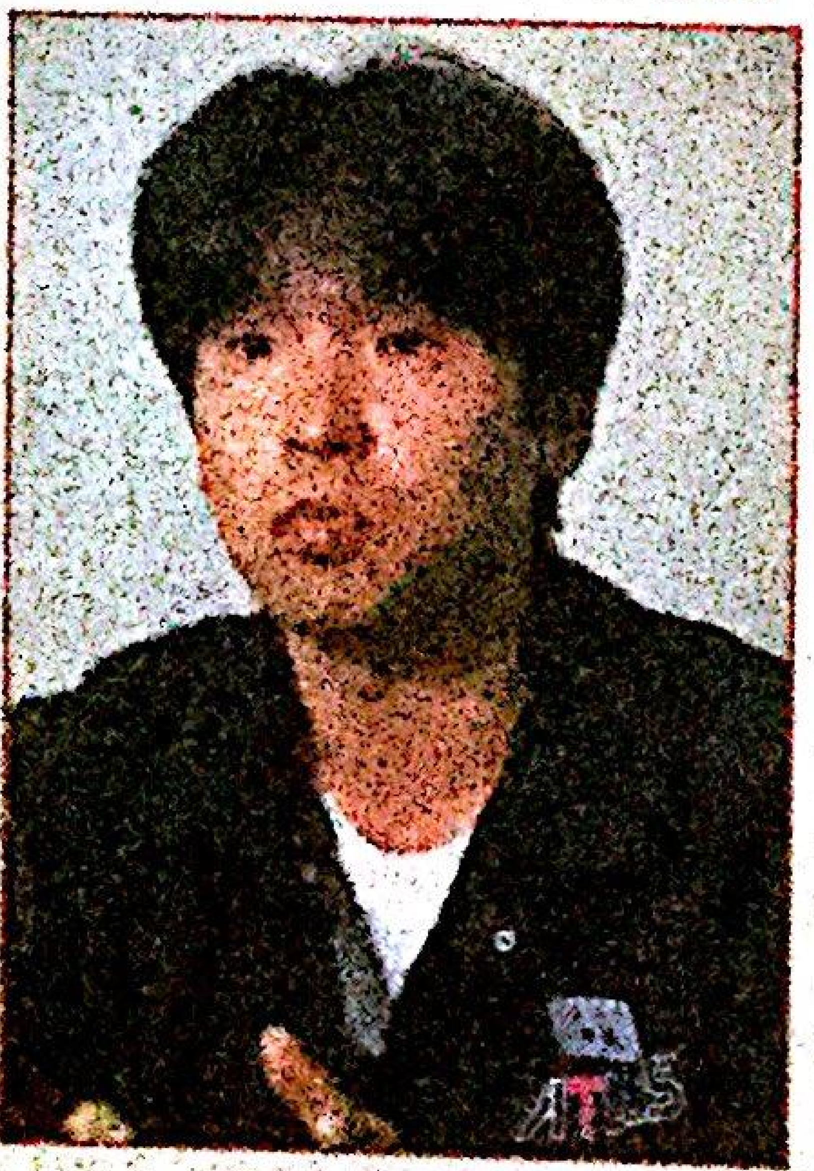
真・女神転生は自分で考えていたよりもずっと良い評価をいただきましたね。僕としては、やはりあらゆる意味でゲームの完成度に不満が残ってますから。ウィザードリィのような、別に新しいことをどんどん追いかけているわけじゃないんだけど、新作が出るたびに納得させられる。そんな形が理想です。

例えばもっともっとスムーズにゲーム世界に入ってもらえるようにしたい。今回の作品では、最初の名前登録はうまくいったけど、やはりパラメーター振り分けで流れが切れてしまう。次回作ではこんなところまで細かく演出して完成度を一歩でも高めたいです。

■ INTERVIEWS

# 【相原誠吾】

自ら悪魔宣伝師と名乗る、御存知「[illegible]野郎」。ユーザー、マスコミに対するアトラスサイドの顔として、女神シリーズを演出。



## 3通りのエンディングを見て、自分の真実を見つけて欲しい。

マスコミとユーザーとの窓口のような仕事なんで、とにかくプレイの反響がストレートに聞こえてくる。そんなところからも次回作はこうしたいという意見はありますね。オートマッピングが一発で開けた方がいいんじゃないか、とか、自由度が高すぎて少し迷いすぎるんで、もう少しだけメッセージの指示をくわしくしようとか……。

まあ、作品自体がカルト的とかマニアックとか言われてますけど、そういう先入観なしでプレイしてもらいたい。そのためにも細かなフォローが重要。すべてのエンディングを体験して、自分の道を見つけて欲しいですね。

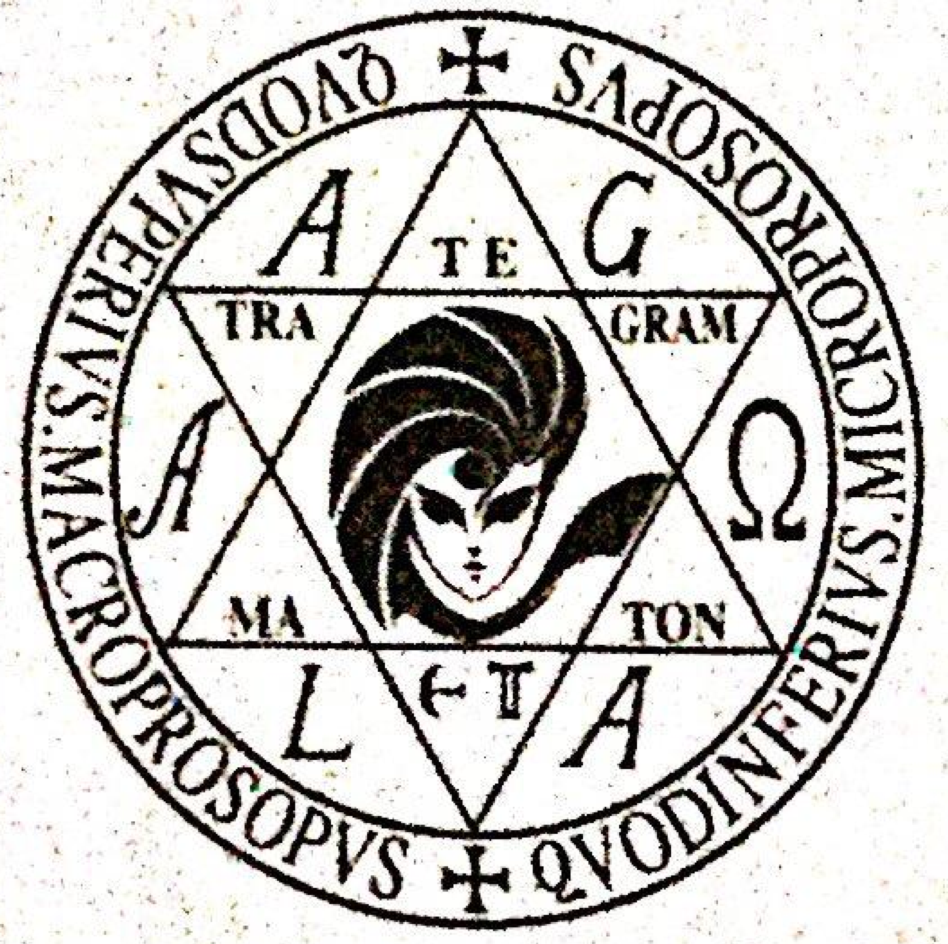
# PUBLICITY
［宣伝］

ATLUS公式リプレイ攻略ノベル

# 真・女神転生

## 【ファイナル・ストーリー】

EL ELOHIM ELOHO ELOHIM SABAOTH
ELION EIECH ADIER EIECH ADONAI
JAH SADAI TETRAGRAMMATON SADAI
AGIOS O THEOS ISCHIROS ATHANTON
AGLA AMEN

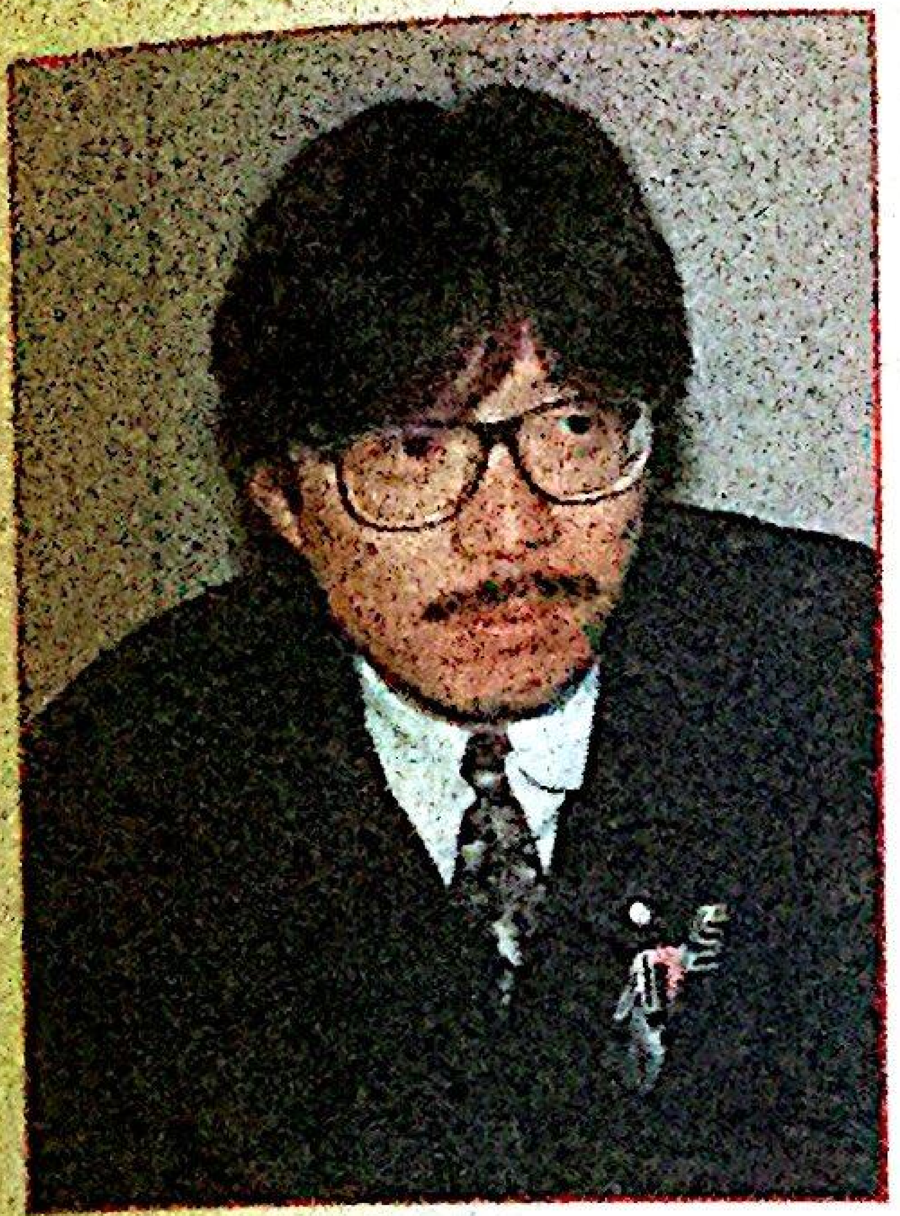



井上尚美&メガテン解析隊［著］

# DIRECTION

「ディレクション」

## これから1999年に向けてどんどん価値感が変わっていくこの世界にあって、世紀末ソフトとして人気を独占したい！



【横山秀幸】

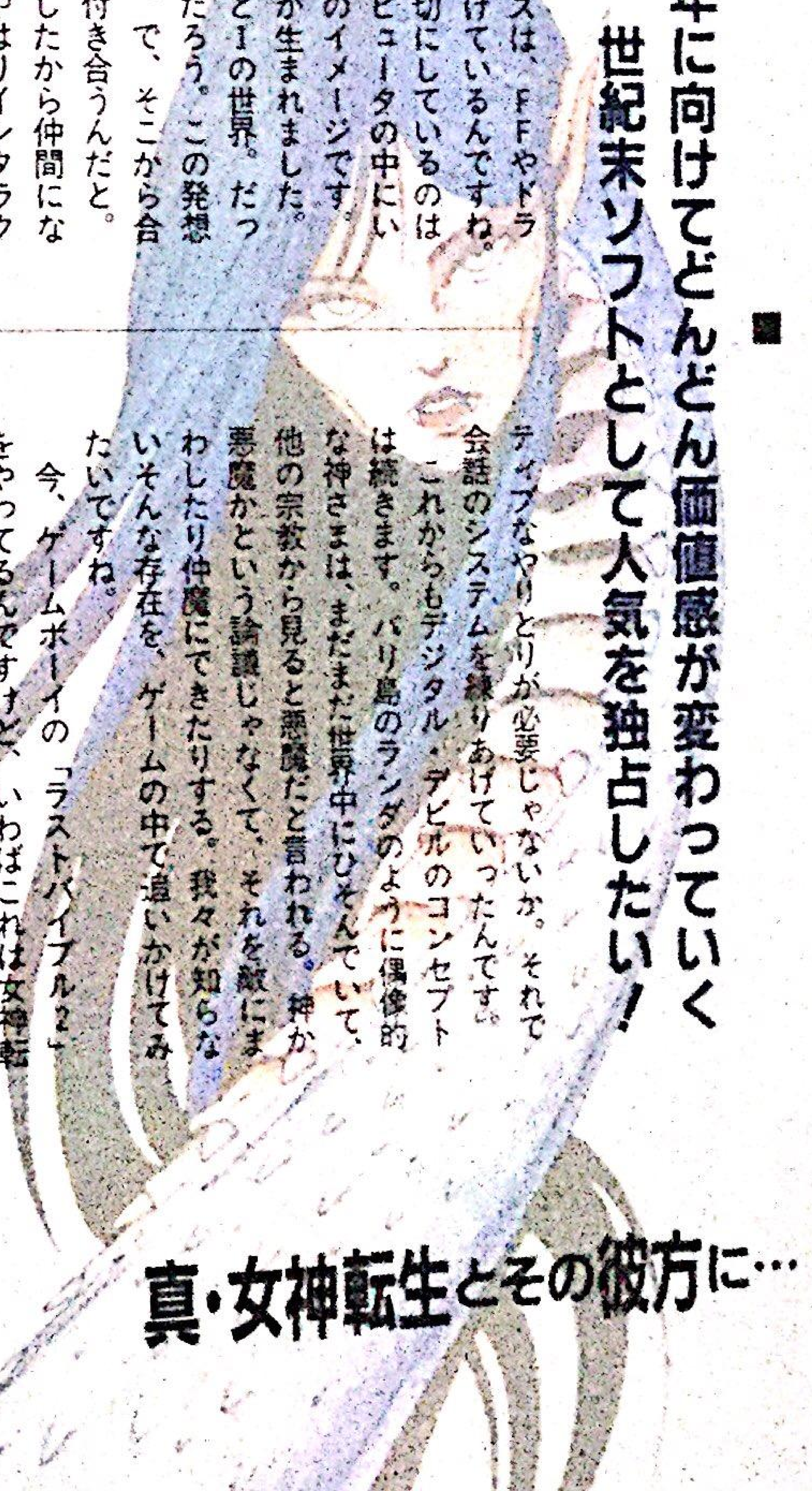
女神転生シリーズのプロジェクトを大きな観点からリードする、アトラスの重鎮。これからのあらゆるハードに心をめぐらせている。

もともと女神転生シリーズは、FFやドラクエを意識しないで作り続けているんですね。唯一、コンセプトとして大切にしているのは〝デジタル・デビル〟コンピュータの中にいるデジタライズされた悪魔のイメージです。ここから現在に至るすべてが生まれました。たとえばデジタルとは0と1の世界。だったら悪魔だって合成できるだろう。この発想から合体システムが出来た。で、そこから合体した悪魔とはどうやって付き合うんだと。単にやっつけたから、合成したから仲間になったというんじゃなくて、やはりインタラクティブなやりとりが必要じゃないか。それで会話のシステムを練りあげていったんです。

これからもデジタル・デビルのコンセプトは続きます。バリ島のランダのように偶像的な神さまは、まだまだ世界中にひそんでいて、他の宗教から見ると悪魔だと言われる。神か悪魔かという論議じゃなくて、それを敵にまわしたり仲魔にできたりする。我々が知らないそんな存在を、ゲームの中で追いかけてみたいですね。

今、ゲームボーイの「ラストバイブル2」をやってるんですけど、いわばこれは女神転生の創世紀の物語です。いつかこのシリーズをスーパーファミコンでやって、女神転生でやれなかったことを盛り込んでいきたい。たとえば、なぜルシファーは翼をおとされたのか、とかね。また、女神転生の会話とか合体といった創造的な部分だけを独立させたゲームなんかも考えています。

真・女神転生以降、その続編やここから生まれてきた様々なゲームすべてをひっくるめて、ゲーム業界唯一の世紀末ソフトとして人気を独占していきたいと考えています。



真・女神転生とその彼方に…

# 目次


金子一馬「真・女神転生」画集 …… 1

真・女神転生プロジェクトメンバーインタビュー …… 10

**真・女神転生【ファイナル・ストーリー】**

第1章　吉祥寺【攻略手順】 20 …… 30

第2章　トシキ【攻略手順】 31 …… 37

第3章　永遠に覚めない夢【攻略手順】 38 …… 44

第4章　脱出【攻略手順】 45 …… 54

第5章　新宿【攻略手順】 55 …… 59

第6章　レジスタンス【攻略手順】 60 …… 69

第7章　公開処刑場【攻略手順】 70 …… 75

第8章　悪魔と神の対立【攻略手順】 76 …… 89

第9章　金剛神界【攻略手順】 90 …… 102

第10章　大破壊後の新宿【攻略手順】 103 …… 108

第11章　カオスヒーローテツオ【攻略手順】 109 …… 120


## 【リプレイ攻略ノベルの読み方】

【リプレイノベル】

このノベルは、ゲーム「真・女神転生」の実際のプレイをベースに書かれています。ここでのプレイは、ゲームで設定されている3種のエンディングのうち、ニュートラルによるクリアを目指しました。なぜなら、ニュートラルエンデングこそが、ゲーム制作スタッフたちの意図した本ゲームのテーマであるからです。

基本的にはゲームスタートからニュートラルエンディングに至るまでのイベント展開を、なるべく忠実に活字によって再現しています。ですが、一部より本ゲームのテーマ性を際立たせるために、若干の変更を加えてあります。まずはより深く「真・女神転生」を理解するために、本編を楽しみながら読んで下さい。

第12章　転生【攻略手順】……121〜124
第13章　精神世界【攻略手順】……125〜132
第14章　アオイ【攻略手順】……133〜140
第15章　死人の街【攻略手順】……141〜151
第16章　銀座【攻略手順】……152〜159
第17章　メシア大聖堂【攻略手順】……160〜164
第18章　スガモプリズン【攻略手順】……165〜174
第19章　ガイア教総本山【攻略手順】……175〜181
第20章　ディスティニーランド【攻略手順】……182〜190
第21章　ハニエル【攻略手順】……191〜196
第22章　進むべき道【攻略手順】……197〜200
第23章　カテドラル【攻略手順】……201〜204
第24章　東京守りし者【攻略手順】……205〜207
第25章　大洪水【攻略手順】……208〜218
第26章　悪魔【攻略手順】……219〜232
第27章　神々【攻略手順】……233〜244


【戦闘データ】
ノベルを読み進んでいくと、途中ボスキャラ等に遭遇したときには戦闘データを掲載してあります。敵キャラのステータス、戦闘に勝つために必要なパーティのメンバーの最低レベル、装備、連れておきたい仲魔とその合体法、攻略アドバイス等です。実際のプレイの参考にして下さい。

【攻略手順】
各章の最後に、実際のプレイでニュートラルエンディングを目指すための最短攻略手順と解説を掲載してあります。これさえ読めば、全てのユーザーが必ずニュートラルでゲームをクリアできるようになっています。本編中の下段の捕捉データと合わせて参考にして下さい。


メガテン解析隊／滝本洋章・芝田和弘
口絵・本文イラスト／金子一馬
編集／レッカ社
装丁・デザイン／広井一夫・鈴木光鵬
[Design Studio WIDE]

# 【第1章】吉祥寺

だれもそれとは気づかなかったが、たしかにいくつかの徴候はあったのだ。

ぼくたちはテレビでよその国の戦争をながめていた。ロケット弾の炸裂に、思わずきれいだと声をあげた。飢えて死んでいく人たちに、食卓の前にいながら同情をよせた。

平和で豊かなぼくたちの世界。たぶん、見せかけのものだったのだ。

いつのころからか、街にはふたつの奇妙な宗教が生まれていた。混沌のエネルギーを求めるカオス教。神による救いを信じて救世主を待ち望むメシア教。いずれも世界をつくりかえるべきだと叫んでいた。ほとんどのものが聞きながしていたが、乾いた砂地に降りる夜露のように、わずかずつ、しかし確実に、ぼくたちの心のなかにしみこんでいた。

結局、異界の扉をひらいたのはなんだったか。自然に起きたのか、あるいは何者かの意志がはたらいたのか。もう今となっては問う意味はない。

あるとき見えない壁に裂け目が生じた。人知れず、向こう側のものがこちら側に流れだした。裂け目はじりじりとひろがっていたが、だれも気づいてはいなかった。現実世界の歪んだ日常に慣れきっていたからだ。やがて、いっきに堰が切れるときがきた。なにが起きたのかはっきりと見届けるまもない勢いで、向こう側のものがどっとこちらに流れこんだ。

もしかすると、それはぼくたちみんなが心の奥底で望んでいたことなのかもしれない。気がつくと、世界は

別のものになっていた。

ぼくの場合はこんなふうにはじまった――。

夢を見た。たいていの夢がそうであるように、目覚めると急速に色あせ、かすんでしまうようなものではなかった。ぼくはそれをいつまでもはっきりとおぼえていた。

大きな扉の前に立っていた。

「ショウ※1よ……」

名を呼ばれた。声はどこからともなく聞こえてくる。

「扉をくぐりし汝を待ち受けるは　光のもとに選ばれし民の法と秩序か　力に頼るものどもがあい争う混沌か　汝の天秤にふたつを載せ　こぼれ落さぬように歩むがよい」

扉がひらいた。

どこといって特徴のない建物の内部。無機的なかんじの通路が続いている。朦朧としたあいまいさのなか、ぼくはおびえるでもなく驚くでもなく導かれるままに進み、やがて出あったものの唐突さを、あたかもはじめから知っていたかのように受け入れた。

大きな十字架があらわれた。だれか磔になっている。

「これは神に捧げられし魂」

かたわらで神の使いがそう言った。

---

※1・ショウ
この物語の主人公。ごく普通の少年だった彼のもとに悪魔召喚プログラムが送られてきたときから彼の運命は大きくかわっていく。

「トシキ……」[※2]

と、ぼくはつぶやいた。なぜその名が浮かんできたのかわからない。

「ここはどこだろう」十字架から解放された〝トシキ〟が言った。「ぼくはなにかをなしとげるはずだった……。きみが助けてくれたのですね？　きみといれば答えが見つかるかもしれない。いっしょに連れていってください」

次に悪魔があらわれた。その下であえいでいるものがいる。

「これは力を求める乾いた魂」

悪魔は言った。

「テツオ……」[※3]

やはりぼくは知らない名をつぶやいた。

「なぜおれを起こした？」〝テツオ〟は悪魔から解放されるとうそぶいた。「せっかくいい夢を見ていたのに。くそっ、とにかくここから連れだしてもらうぜ」

ぼくたち三人は通路をさまよい、やがてある部屋に入った。ぼくははじめてぎくりとした。泉のほとりに立っていた。

水浴びしている女がいた。

「だれ、そこにいるのは？」女がふりむいた。言葉とは裏腹に、少しも驚いたようすがない。「あら……あなたショウね？　わたしの名はユリコ[※4]。あなたのことをずっと待っていたのよ……永遠のパートナーとしてね……」

微笑みながら、女は挑んでいた。目に謎めいた輝きを宿している。それがほ

くを捉えて放さない。ぼくは金縛りにあったように立ちすくんでいた。
なにか言おうとしたときだった。
「ショウ！　いつまで寝ているの？　早く起きてらっしゃい」
母の声によって目が覚めた。
いや、このときほんとうに目覚めたのだろうか？　あとになって、ぼくはなんどか思った——まだあのときの夢から覚めていないのではないか。奇怪な夢の世界から抜け出せないまま、えんえんとさまよい続けているのではないか、と。
とにかく、その夢以来、ぼくの世界は変わってしまったのだ。十月のある休みの日のことだった。
ぼくはのろのろと起きあがった。ふと見ると、パソコンにメールが送られてきていた。
『……このネットに接続しているすべての人へ　現在われわれ人間に深刻な危機が迫っている　伝説の悪魔たちが闇から目覚めたのだ　すぐにも悪魔が襲ってくるだろう　悪魔と戦うために悪魔の力を利用することだ　このプログラムがあればできるだろう　勇気あるものが受け取ってくれることを祈る…………悪魔と戦い人々を救うために…………』
悪魔召喚プログラム！※5　これがどんな意味を持つものなのか、ぼくはそのとき考えてもいなかった。ネット仲間のだれかがつくったゲームかなにかだと

---

※2・トシキ
ロウヒーロー。法と秩序を重んじる。主人公の少年との出会いに触発されて大いなる力に目覚めていく。

※3・テツオ
カオスヒーロー。混沌、混乱、力を重んじる。オザワ、主人公との出会いをきっかけにしてさらに大きな力を求めていく。

※4・ユリコ
カオス側のヒロインとして、主人公をカオスに引き込もうとしていく。

※5・悪魔召喚プログラム
悪魔と会話し、さらに仲間にできるプログラム。スティーブン博士が開発した。

思い、ほとんど習慣的にダウンロードしておいたのだ。

夢のことが頭を離れなかったが母に買物をたのまれたこともあって家を出た。

アーケードをぶらついていると、いろんな話が耳に入ってきた。公園で殺人事件があったこと、どこかでナイフを持った男が暴れているらしいこと、駅前の病院がなにか妙なことになっているらしいこと、など。

そんなことを聞いてもたいして興味をひかれなかった。ぼく自身にはほとんどかかわり合いのないところで起きている出来事にしか思えなかったからだ。しかし、それらはすべて〝異変〟の断片だったのだ。表面にあらわれたごくごく一部でしかなかったので、この時点では互いのつながりを見いだすことなどとうていできなかった。だが事態は確実に進行していた。慣れ親しんだ日常は消え去りかけていた。異界の扉はひらき、異形の生命とエネルギーとがこの世界の日常にとって代わりつつあったのだ。

断片のいくつかは実際にぼくの身にふりかかってきた。

『また会ったわね、ショウ』

アーケードの人ごみのなかで〝ユリコ〟に声をかけられた。

『こんなところで会えるなんて夢みたい……』

それだけ言うと、〝ユリコ〟はうふふ……と笑って雑踏にまぎれた。謎めいて魅惑的な微笑みはまちがいなく不吉なものを含んでいて、夢のときと同じように、ぼくはひどく不安になった。

そしてドラッグストアの裏手を通りかかったとき――。ゴミ箱の脇になにかぶつぶつぶやいている男がうずくまっていた。避けるようにすり抜けようとしたが、男はいきなりナイフをふりあげて襲いかかってきた。ぼくがわっと叫んで身をかわすと、男[※6]は奇妙な声をあげて逃げだした。あっけにとられてその後ろ姿に目をやったとき、ぼくはまだ夢を見ているのだと思った。背をかがめて角をまがった男の姿は、思いもよらない異

# 「井の頭公園の殺人事件」

平和な街に突如おこった殺人事件……それは大いなる異変の小さな兆しだった。まだ誰もこれから訪れる人類の運命について知る者はない。そしてそれはまず、ショウ自身の身にふりかかるのだ!?

形のものに変わりつつあったのだ。
ぼくはひどく気分が悪くなった。何がどうなっているのかよく考える余裕もなく、家にもどって横になった。
そしてふたたび夢を見た。これは朝の夢の続きなのだ……と、ぼくはそのなかで考えていた。やはり細部のぼやけた長い通路をさまよっていた。〝トシキ〟と〝テツオ〟がいっしょだった。
どこからともなく〝ユリコ〟があらわれ、こうささやいてぼくたちを見送った——『また会えてうれしいわ、ショウ。わたしはずっとあなたのそばにいるのよ。忘れないでね……』
ある部屋に入った。魔方陣、篝火、祭壇、異様な服装の仮面の人物。
『なんだ？　この気味悪い儀式は？』
興味深そうにテツオが言った。
『悪魔を呼びだそうとしているのです』
そう答えたトシキの声はこわばっていた。
『深きに眠るわが暗黒の王よ……』仮面の司祭が呪文を唱える。怪しい篝火に囲まれた祭壇の上には裸身の少女。『この若き魂を受けとりたまえ』
司祭の腕が少女のほうに伸びたとき、ぼくははっとして叫んだ——。
『アオイ！』※7
司祭がふりむく。仮面の上からでも怒りの凄まじさが見てとれる。ぼくは思

※6・男
この男との戦闘の後でナイフが手に入る。主人公が最初に手に入れる武器。

※7・アオイ
ヒロイン。主人公を待ちうける数々の試練へと導いていく。

わず身がまえた。だが予想に反し、司祭の姿は水面に映った影のようにゆらめきながら消えていった。

少女はゆっくりと半身を起こし、ぼくを見つめた。

『ありがとう、ショウ。もう少しで生贄にされるところでした。そうなっていたら恐ろしい魔王が呼び出されていたでしょう』そして深く息をつきながら目を閉じた。『ああ…わたしの失われた力が戻ってきました…』

少女はふたたび目をあげた。遠くを見るような深いまなざしにぼくは激しくうたれた。

『あなたに会えるのはまだ先のこと。そして一度は別れる定め……いつかわたしに会いにきて……』

なぜだかわからない。だがぼくはそれをたしかに予感した。

目覚めてから気がついた。アオイというのは隣に住んでいる幼なじみの名前だった。夢のなかの少女は幼なじみのアオイとはまったく別人で、似てさえいなかったのに、ぼくはなぜかそう呼んだ。このことは彼女、つまり隣の家の娘にとってまったく不幸な偶然だった……。

ふたつの夢（じつはひと続きだったのだが）は、むしろ強烈なビジョンだった。けれどもこのときにはまだジグソーパズルのたった一片にすぎず、そこにどんな意味のある形をも見いだすことができなかった。そしてわけがわからないままに、〝異変〟はきわめて現実的な災いとしてぼくの身にふりかかってきた。

二度目の夢から覚めたあと、落ち着かない気分でふたたび外へ出かけた。どこへ行こうというつもりもなかったが、気がつくと公園にやってきていた。

入り口のところに浮浪者じみた年寄りが座っていた。

「おまえがショウか」

老人はうつむいたままつぶやいた。決してぼくのほうを見なかった。にもかかわらず、ぼくは心のなかまでじっと見据えられているような気がした。続いて老人が口にしたことは、そのときには少しも理解できなかっ

たと思う。言葉はずっと後になってよみがえり、きわめて重要な意味をともなってぼくを導いた。
「光と闇、法と混沌。世界のバランスが崩れようとしておる。いずれに傾こうと結果は同じじゃ。おまえならどうする？　いずれにせよもう引き返すことはできぬ…」
しゃがれた声が終るか終らないかのうちに、ぼくは別の空間にいた。
ある建物のなかだ。トシキとテツオもそこにいた。あまり正確な言いかたではないが、前の夢にくらべてはるかに現実味を帯びていた。このビジョンのなかのぼくは、自分たちがどこにいて、なにをしようとしているのか知っていた。秘密はその建物の最上階の部屋にあった。ぼくたちはそこへ乗り込もうとしていた。
ぼくは未来の一端を垣間見ていたのだ。
目的の場所に近づくと、母の声が聞こえた。
『だめよ、ショウ！　先へ行ってはだめ……』
あるいはこのときそう願えば引き返すことができたのだろうか？　やがて母の無惨な死を知ったとき、ぼくは気が狂いそうなほどの後悔の念に襲われた。もう引き返すことはできぬ、と老人が言ったことはわずかながら救いになった。すべて宿命だったと信じるしかないのだ。
ぼくたちは最上階の部屋に飛びこんだ。そこにはなにか奇妙な装置があり、技術者のような格好をした男がわめいていた。
『わが同胞よ！　いまこそ魔界よりよみがえり……』
男はぼくたちに気づくと真の姿をあらわした――。※8
そこではっとわれに返った。
ぼくはひとり公園の入り口に立っていた。老人の姿はない。ぼくはまるでばかのようにあたりを見まわした。

ふと、公園のなかにそれまで見たこともない建物[※9]があることに気がついた。いつからあんなものが……？

公園。通り。町並み。空。いつもの見なれた光景が一瞬ゆらめいた。だまし絵のように、そこかしこの隙間から思いもよらない形が浮かびあがってくるような気がした。

ぼくは混乱し、逃げるように（いったいなにから逃げようとしていたのか自分でもわからなかったが）家のほうへ足を向けた。

だがもうはじまっていたのだ。

自宅の前で警官に呼び止められた。名前を聞かれたので答えると、なんの理由も告げられず、いきなり腕をつかまれた。そんなとき、だれだってパニックに見舞われるはずだ。ぼくは思わず振り切って逃げだそうとした。警官たちはなにかをぼくにつきつけた——。

※8・そこで
ゲームではここで司祭（ドウマン）と戦闘になる。途中で夢から覚め、老人に力がたりないとさとされる。

※9・見たこともない建物
吉祥寺駅の南、井の頭公園の中の建物。HPなどを回復する回復道場。宝箱。悪魔同士の2身合体、3身合体を行う邪教の館がある。

NEUTRAL DATA FILE: 1▶KICHIJYOUJI

# 吉祥寺

## 攻略手順

［悪魔召喚プログラムをダウンロードする］➡［母親からおこずかいをもらう］➡［吉祥寺アーケードのカフェでコーヒーを買う］➡［カフェで話をする］➡［ドラッグストア裏でガキと戦闘］➡［自宅に帰る。夢の中でヒロインと出会う］➡［オートマッピングプログラムをダウンロードする］➡［井の頭公園入口で謎の老人と出会う。夢を見る。公園入口の封鎖解ける］➡［自宅前の道で警官に捕まる。病院に監禁される］

属性（ロウ、ニュートラル、カオスの3つがある）に関係してくるイベントはここまでではない。重要なのは各登場人物のパラメーターの振り分けかた。主人公は魔力の数値を上げずに強さ、体力、速さを中心にポイントを振り分けていくのがベスト。ロウヒーローは魔力を重点において平均的に振り分けよう。カオスヒーローもロウヒーローと同様にポイントを配分しよう。

# 【第2章】――トシキ

何時間？　それとも何日？

そんなことを詮索するのは意味がないかもしれない。いつかどこかで、それまでの世界を支配していた日常の時は失われたのだ。

ほのかな薬品臭。白い壁。ああ、病院なのだ…と、ぼんやりした頭で考えた。ゆっくりと思いだす…警官にやられたのだ、そして気を失った。ケガはしていないようだ…そっと体を動かして確かめた。あれはスタンガンだったのだろう。しかし逃げだしたというだけでどうしてこんな目に…？

しだいに頭がはっきりしてくるにつれ、状況はただならないものだということがわかった。

壁は全面ラバー張りだった。扉には鉄格子がはめこまれている。高い天井にある照明は苦痛をもよおすほどの明るさ。

そのとき感じたのは恐怖というより当惑だった。いつか映画で見た精神病院の拘禁室を思い浮かべていた。

なぜ――？　またパニックに陥りそうになるのをどうにかこらえ、そろそろと体を起こした。

「気がつきましたか？」

その部屋にいたのはぼくひとりではなかった。

「ショウ君ですね？」ぼくの顔にあらわれたものを読み取ったのだろう、相手はなだめるようになんどもうなずいた。「ええ、ぼくはトシキです。ぼくたちは同じ夢を見たのです。でもこれは夢じゃない…」

ぼくは凍りついたようにじっと相手を見つめた。考えてみると、夢のなかのトシキの顔をおぼえてはいなかった。いまにして思えば、くもりガラスの向こうにゆらめく影のような存在だった。だがぼくは彼を知っていた。彼の言うことは事実なのだ――ぼくは霊感的なひらめきでもってそれを確信した。

相手もまたそうだった。そのときかわしたみじかい二言か三言のうちに、たがいに不思議なつながりを感じとった。

だがいったいなぜこんな巡りあいをしたのか――ぼくたちはまだ宿命を知らなかった。

「ともかく」と、トシキは眉をひそめた。「なにかとんでもないことが起きているようです」

彼は自分の恋人が何者かに連れ去られたのだと言った。驚いたことに、トシキの言う彼女は隣の家の娘、つまりぼくの幼なじみのアオイらしかった。二度目の夢がまざまざとよみがえったが、いったいどういう偶然のからみあいなのか見当もつかない。アオイという名。ぼくがそう呼んだ不思議な夢の少女。隣家の同名の娘。その失踪。

トシキは言った。彼女を探していると化け物みたいなやつに襲われ、ここに連れてこられた、と。

「ここは例の病院なんです」

「…例の？」

「しばらく前から妙なうわさがたっていたのを聞きませんでしたか？　院長が人間の改造手術をやっているらしいという…」

にわかに信じられることではなかったが、ぼくはドラッグストアの裏で遭遇した奇怪な男のことを思い出していた。

そんなことを話しあってみても、ジグソーパズルの一、二片をてんでにひねくりまわしているのと同じで、

事態の脈絡はいっこうに見えてこなかった。
とにかくそこから逃げ出すのが先決だった。
チャンスはすぐにやってきた。廊下に足音が響いた。ぼくは扉を叩いて大声でわめいた。白い上着の男が近づいてきた。ぼくはいっそう騒いで注意をひきつけた。男が扉をあけて入ってきたところへ、脇からトシキが飛びかかった。なにをどうしたのかわからないが、一撃で相手を床に転がした。トシキはどう見ても屈強なタイプではなかったので、ぼくは目を疑った。トシキ自身、驚いているようだった。あとになって言った――このときはじめて不思議な力[※1]に目覚めたのだ、と。
通路は静まりかえっていた。人気がないというより、なにかじっと鳴りをひそめているようなうす気味悪さがあった。両側にぼくたちが閉じ込められていたのと同じ鉄格子のはまった扉が並んでいて、そのうちのいくつかには人がいた。ぼくたち同様、わけもなく連れてこられた人たちのはずだ。ドアのロックははずしようがない。トシキがそっと声をかけた。だが彼らはもう〝手遅れ〟だった。ぼくたちのほうを見ようともしないでぶつぶつつぶやいているか、いきなり鉄格子にしがみついて喚きだすか。
騒ぎを聞きつけられたくなかった。
「とにかくここから出よう」
ぼくはトシキをうながした。そのとき、ぎしぎしという耳障りな音に気がつ

※1・不思議な力
魔法を使ったわけだ。トシキは衝撃系の攻撃魔法を中心にして覚えながらレベルアップしていく。

いた。通路は行く手でT字になっており、音は左手のほうから近づいていた。ぼくたちは少しずつ後ずさりしながら身がまえた。

それはいささか突拍子もないものだった。ぼくたちの目の前にあらわれたのは車椅子。痩せて、白髪まじりの髪をぼさぼさに伸ばした男が乗っていた。

男は車椅子を操る手を止め、すじばった首を曲げてこちらを眺めた。敵意とか驚きといった表情はなく、むしろ物憂げで、たまたまそこで出会った者にふと目を止めた…そんなしぐさに見えた。

男は唐突に口をひらいた。

「きみは私がつくったプログラムを持っているな？」

ぼくはその意味を理解するのにしばらくかかった。男はこちらが聞いていようといまいと関係ない、といった口ぶりでこう続けた。

「かつて私は瞬間移動装置…ターミナルシステムの開発をしていた。もちろん実験は成功した。思いもよらないおまけがついたが。いま何が起きているか知っているかね？　この世ならぬ異形のものどもが出現しはじめた。古来、人が魔物とか悪魔とか呼んでいるもののことだがね。やがて世界は太古の混沌に立ちかえってしまうだろう。そう…」男はくっくっと笑った。「わたしは異界の扉を開いてしまったのだよ」

ぼくはここがどこか思い出した。

「狂ってる…？」

「この人はたしか…」トシキがつぶやいた。「異端の天才科学者と言われたスティーブン博士[※2]ですよ。少し前に行方不明になった…」

「つまり」と、車椅子の男はひとりうなずきながら喋り続けた。「いまや秘儀に長けた魔術師ならずとも悪魔

を呼び出すことができるようになったのだ。たとえばゴトウという男…。悪魔の力を借りて自分の野望を遂げようとしている。力を望むものには手っとり早い方法だ。だが私は自分の招いた結果に手をこまねいていたわけではないぞ！　目には目を、と言うだろう？　悪魔と戦うには悪魔を使うのだ。私は多くの人に悪魔召喚プログラムを送った。だが使いこなすのは難しいようだな。悪魔を操るか悪魔に操られるか…」

男は不意にぼくたちから目をそらし、車椅子のアームのところにあるスイッチを押した。車椅子が目の前を横切って右手の角の向こうに消えるのを、ぼくたちはあっけにとられて見送った。はっとして後を追おうとしたときには、もう通路のどこにも姿はなかった。

この男の言ったことは事実だった（もちろんそのときすべてを理解したわけではないが）。けれども表面的な事実であって、唯一の真相ではないかもしれない。彼のターミナルシステムが異界の扉をひらく直接のきっかけにはなったのかもしれないが、それがすべてだろうか？　異変の真相を次々に見せつけられていくにつれ、ぼくは思いはじめた。見せかけの平和と飽食。裏側の残虐と悲惨。いびつな現実。そんな世界への懐疑と不安が人々のあいだに深く深く蔓延していたからこそ、それが起きたのではないか？　さもなければ人間は救われない。

だがそんなことを今さら蒸し返してもはじまらない――。

※2・スティーブン博士
ここで博士はデビルアナライズプログラム（戦ったモンスターのデータを主人公が持っているハンドヘルドコンピュータに36体まで記憶することが可能になる）を主人公たちに託す。

ともあれ、ぼくたちは病院を脱出する前に、車椅子の男が言ったことを実際にこの目で確かめることになった。つまり、悪魔がこの世界に侵入してきているという事実……。

建物の出入口は完全にロックされていた。解除の方法を求めて病院内を探りまわっていると、異形のものたちが立ちふさがった。

だがぼくたちはまったく無力というわけではなかったのだ。トシキは不思議な力をコントロールすることができた。そしてぼくは——この病院はいわば夢と現実のはざまだった。ぼくはここから別世界へと踏み込んだ。なぜ？　と、問うまもなく、目前に起こる出来事によって、否応なく引きずりこまれた。車椅子の男の真の正体は今も知らない。だが彼はぼくの意外な能力を教えてくれた。悪魔と話し、場合によっては味方に引き入れることができるのだ。そして悪魔召喚プログラムにより、必要なときにその悪魔を呼び出せる。ぼくはつまり

——悪魔使いだった。

# トシキ

NEUTRAL DATA FILE: 2▶TOSHIKI

## 攻略手順

[病院内でロウヒーローが仲間になる] ⬇ [病院1Fでスティーブン博士と出会う。デビルアナライズプログラム入手]

属性イベントはない。対オリアス戦に備えて、病院内でレベルアップしておこう。目標はLV8以上!!

# 【第3章】——永遠に覚めない夢

「人間を従順な道具にするにはちょっとした改造で充分なのだ。警官、兵士、チンピラ…もう大勢送りこんでやった…」

無影燈の下で、院長の姿はみるまに異形のものに変わっていった。

## 堕天使オリアス出現！

LV10・HP120・MP55・使用魔法プリンパ／パピルマ／ドルミナー

**【パーティー】**

●ショウ　LV8・装備　むめいのかたな／サバイバーベスト／ヘッドギア／レザーグラブ／レザーブーツ

●トシキ　LV8・装備　初期装備

**【仲魔】**

必要ナシ

**【攻略法】**
ショウ／剣での攻撃・トシキ／攻撃魔法ザンまたは魔法ディア
**【ワンポイントアドバイス】**
LV8以上あるならば余裕で勝てる。トシキの攻撃魔法をメインにして戦おう！

異形の姿に向いあったときの恐怖とか驚きを越えて、その存在から発散される見えない波にぼくはたちまち呑まれてしまった。
眠気に似ただるさ。あらがう意志さえ忘れさせられてしまう。
トシキがなにか叫んでいた。彼のほうからもなにか力が発散されているのを感じた。ぼくは信じられないほどの努力を払って手にふれたナイフのようなものをつかみ、めちゃくちゃにふりまわした。
邪悪な力がゆるんだ。
トシキが言っていることがようやく理解できた。ぼくはこのときはじめて悪魔召喚プログラムを使った――。

「やはりたいへんなことになっているようです。なんとかしなければ」
病院を脱出したあとトシキは言った。本気でそう思っているようだった。もちろんあれだけのことをまのあたりにすれば、ぼくだって傍観できるわけがない。だが身にふりかかった混乱のほうが先に立つ。そのときは

ひたすら家へ戻りたいとだけ思った。もちろんトシキにも心配があった。恋人のことだ。隣家のアオイ。

とりあえず足はぼくの家のほうへ向いていた。このとき夢のなかのもうひとりの人物――テツオに巡りあった。

アーケード街を抜けているとケンカ騒ぎに出くわした。

「なにが悪魔だぁ？　寝言こきやがって！　てめえらもっと痛めつけてやれ」

そんなことを喚いているのはこのあたりを仕切っているオザワ※1というチンピラだった。その仲間数人が取り囲んでいるのは一人。もうさんざんやられたあとらしく、転がって蹴られるままになっていた。

トシキの憤然としたようすにまさか動じたとは思えなかったが、ぼくたちが近づいていくとオザワたちはせせら笑いながら立ち去った。

そのときはじめてやられていたやつの顔が見えた。ぼくとトシキは同時に悟った。

「テツオ！」

「ちきしょう…おぼえてろ…いつか絶対に…」

うめきながらそんなことを口走っていた相手は、はっとして顔をあげた。痛みも忘れたにちがいない。

「…やっぱりあれはただの夢じゃなかったんだな」

ぼくたち三人はしばらく見つめあったままだった。それだけで、ぼくとトシ

---

※1・オザワ
チーマー風の男。新宿のゴトウの手下。彼はゴトウ亡き後新宿を自分の支配下に置く人物へと成長していく。

キが出会ったときと同じ霊感的な理解が伝わった。

「オレの頭がどうかしたのかと思ってたが…」と、テツオは自分の身にふりかかった混乱を説明した。「いったいどうなっちまったんだ？　あちこちに化け物どもがうろついているというのに、ほかのやつらはどうしたんだ？　気がつかないのか？　気がつかないふりをしているのか？　それともうみんな化け物なのか？　人間のふりをしているだけなのか？」

トシキは病院での出来事を語った。そして確信に満ちてこう言った――「ぼくたちには秘められた力があるのです。何事もなければ気づくことはなかった特別な力が。こんなことになってそれが目覚めた…」

その口ぶりにぼくはなぜか少したじろいだのを憶えている。

「力…オレにも力が？」

しばらくしてテツオがつぶやいたとき、夢のなかの悪魔の言葉がよみがえった――『これは力を求める乾いた魂』

三人が出会ったことで、ついに大きな歯車がまわりはじめた。意味も目的もわからないまま長い宿命的な戦いにのみこまれ、いくつかの大きなものを失った。だがすべてが終ってふりかえったとき、こう思った――三人ではじめて遭遇した出来事ほどぼくを打ちのめしたものはなかった、と。

それはぼくの家で待っていた。

「おかえりなさい、ショウ」

玄関をあけると、いつものように母が台所の奥から顔を出した。いつものように！

「なにをしていたの？　心配していたわ」

いつもの光景、あたり前のやりとり。あまりにも母が平然としていたので、ぼくは少なくとも一昼夜は家をあけていたはずだということを忘れかけた。
「…変だと思いませんか？」
なぜトシキが緊張するのかわからなかったほどだ。そのままだまされたかもしれない。
「妙な匂いがするぜ」テツオが顔をしかめた。「オレはあの夢以来――」
「どうしたの？　さあ、早くこっちへいらっしゃい」
母が近づいてきた。
「待て――」
テツオがぼくを押しのけて前に飛び出した。母とテツオのあいだの空気が震えた。
「ちっ、勘がいいじゃないか」と、母が言った。だが声はもう母のものではなかった。「この女はいただいた。なあに、悲しむことはない。すぐにいっしょにしてやろう」
母の姿が溶けていた。ずるずると溶けて崩れ、その下から別のものがあらわれた。

**邪鬼アマノサクガミ出現！**

LV12・HP132・MP48・使用魔法タルンダ／マカジャマ／ラクカジャ
【パーティー】

●ショウ　LV10・装備　むめいのかたな／サバイバーベスト／ヘッドギア／レザーグラブ／レザーブーツ
●トシキ　LV10・装備　初期装備
●テツオ　LV10・装備　初期装備
【仲魔】
必要ナシ
【攻略法】
ショウ／剣での攻撃・トシキ／攻撃魔法ザンまたは魔法ディア・テツオ／銃での攻撃または攻撃魔法アギ
【ワンポイントアドバイス】
攻撃魔法が一番有効。無理をしないでこまめに回復してやることも大切。

ぼくは一歩も動けなかった。目をあけていながらなにも見ていなかった。テツオとトシキがそいつを——母を喰った魔物を倒した。だがぼくはどんな感情も失って、ただそこに突っ立っていた。
トシキの声が遠くに聞こえた。
「こんなときなに言ってもなぐさめにはならないと思うけど——」
「そっとしといてやれよ」
テツオが言っていた。

悪い夢だ、夢なら覚めてくれ、と願いはしなかった。わかっていたのだ。それまでの日常世界は消えてしまった。なかば信じられないまま引き込まれ、ここにきて完全に決別してしまったことを宣告されたのだ。それならばこう思おう、これは永遠に覚めない夢なのだ、と。

NEUTRAL DATA FILE: 3▼ETERNAL DREAM

# 永遠に覚めない夢

## 攻略手順

【院長（オリアス）と戦闘。オートロックを解除する】⇩【アーケードでカオスヒーローが仲間になる】⇩【自宅でアマノサクガミと戦闘。IDカード入手。パスカル（邪教の館で、悪魔と合体可能。ケルベロスになる）を連れていく】

愛犬パスカルを悪魔合体でケルベロスにしておくと、それ以降の戦闘を有利に進められる。HPが高いのでいちばん先頭に配置しよう。

## 【第4章】脱出

魔族の侵入はもはや歴然としていた。どこがどう狂ったのか、人々はあたり前のようにこの異変を受け入れていた。あるものは餌食になり（ぼくの母のように！）、あるものは例の病院長が明かしたような〝道具〟となり、またあるものは力を求めてついには同化しながら…。

かつてあらゆるものに精霊が宿り、いたるところ魔族が跋扈し、亡霊や悪霊がうろついていた時があった。やがて人間はあらたな力を借りて、自分たちの世界から彼らを締め出した。考えてみれば、彼らが機を得てふたたび戻ってきただけだ――。

母の一件以後、ぼくたちは〝悪魔ハンター〟のつもりになっていた。武装を固め、手あたりしだいに魔物どもと戦い、あるいは手なずけ、召喚可能な味方とした。ぼくたちはそれを〝仲魔〟と呼んだ。仲魔を使いさらに戦いを重ねた。

悪魔使いとしてのぼくは〝邪教の館〟の恩恵を受けた。異変とともに忽然と出現したものだということしか知らないが、そこで仲魔を合体させて別の魔物を作りだすことをおぼえていた。トシキとテツオもそれぞれの特異な能力を伸ばしていった（ただし二人の力の性質※1は異なっていた。それは事態が進むにつ

※1・二人の力の性質
トシキ（ロウヒーロー）は衝撃系、テツオ（カオスヒーロー）は火炎系の攻撃魔法をそれぞれ覚えていく。

れて顕著になり、やがてあの決別の時を迎えることになる…)。

魔族との接触は、いわば、さまざまな力へのアクセスだ。召喚にしろ戦いにしろ、異界の力を還流させることにほかならない。ある魔物を殺すということはそいつに凝縮している力を解体することなのだ。そしてそれを吸収する。ぼくたちにはそれができた。力が増していけば、さらに大きな力※2にアクセスすることができる――。

とにかく、三人とも憑かれたように魔物を狩った。母を喰い殺されたぼくにとってみれば当然のなりゆきだった。トシキは恋人アオイの消息がつかめないのにひどく心を痛めていたが、それとは別になにか漠然とした使命感のようなものをいだいていた。テツオは自分のなかに秘められた力に目覚めていくことを楽しんでいた。

とはいえ、魔物狩りに満足しきっていたわけではない。いったいなんのためにこんなことをやっているのか？ 疑念はたびたび起きた。だがテツオはもちろんのこと、トシキの漠然とした使命感でさえ、それに答えることができなかった。ぼくたちは筏を与えられて大海に放りだされただけで、生きのびる以外なにをすべきか少しもわかっていなかったのだ。

他の街へ行ってみようにも、街の周囲は完全に封鎖されていた。状況はまさに八方塞がりといったかんじだった。

だが転機はやってきた。エコービル※3への侵入。かねてからそこが魔物の巣窟

---

**※2・大きな力**
邪教の館でおこなう悪魔特殊合体。作りだそうとする悪魔のレベルよりも主人公のレベルが小さいとその悪魔を作りだすことは出来ない。したがってレベルを上げれば上げるほど強い悪魔を仲魔にできる。

**※3・エコービル**
オリアスと戦った病院の隣のビル。吉祥寺駅南に位置する。普段はオートロックシステムのため入れないようになっている。

「悪魔召喚の図」

魔族との接触は、いわば、さまざまな力へのアクセスだ。召喚にしろ戦いにしろ、異界の力を還流させることにほかならない。ある魔物を殺すということはそいつに凝縮している力を解体することなのだ……

だという噂を聞いていた。ぼくたちはそれ以上の期待もなく乗り込んだ――。

以前は人の集まるターミナルビルだった。廃ビル然としているわけではないが、静まりかえっている。なにか異様な密度の静けさ。例の病院と似ている。

「邪気がうずまいていますね」

トシキが顔をしかめた。

「手ごたえがありそうだぜ」と、テツオ。

なかに入ったとたん、ぼくははっとした。

「前にもここへ来たことがある…」

うわごとのようにつぶやいた。

「そりゃそうだろう」不意に感傷にとりつかれたとでも思ったのか、テツオは茶化すように言いかけた。「オレだって昔はよく――」

「…どうしたんですか?」

トシキがさえぎった。ぼくの顔つきに気がついたのだろう。

「あの夢…」

ぼくは二人を交互に見つめた。公園で不思議な老人に出会ったことで起きた白昼夢。

二人ともそれを知らなかった。

「最上階だ」ぼくは目指すべき場所をはっきりと告げた。「悪魔召喚師がいる。なにか装置があって…」

それだけしか言うべきことはなかったが、二人とも黙ってうなずいた。あらたな局面がひらけるかもしれ

ない、という予感がぼくたちをこれまでになく奮いたたせた。

ビルは五階建てだった。夢のときほど簡単に目指す場所へ行けたわけではない。途中、うんざりするほど魔物どもとのやりとりがあった。が、やがてどうにか五階へたどりついた。

そこまできてぼくはたじろいだ。

『だめよ、ショウ！　先へ行ってはだめ…』

母の声を聞いた場所を正確に憶えていた。あの悲痛な叫びをもういちど聞くのは耐えられない、と思った。

召喚師がいるはずの部屋の扉が見えたとき、足はひとりでにこわばった。

「ショウ」

後ろで声がした。ありがたいことに母のではなかった。だがその声の主はなぜかぼくを不安に陥れる。ユリコという女――。

「この先に行くのね？　あなたなら大丈夫よ」

例の謎めいた笑み。彼女の出現に驚くよりも、疑念のほうが強かった。なぜ、この女には言葉とは裏腹な不吉な感じがつきまとうのだろうか――。

「おい、どうかしたのか？」

テツオの手が肩に触れた。

「あの女…」

と、言いかけてぼくは気がついた。テツオの視線もトシキのそれも、怪訝そうにぼくにそそがれているだけなのだ。

もう一度ふりむいてみると、ユリコの姿は消えていた。

幻覚だったのかどうかはあまり問題ではない。かつてのように夢と現実を区別する習慣は捨てていた。すべてが非日常の様相を帯びている。夢だろうが幻覚だろうが、それが起きたということじたい、現実と同質の意味を持っている。ぼくたちはそんな世界に紛れ込んだのだ。

「だいじょうぶですか？」

トシキがのぞきこんだ。ひそかにぼくに活力を与えようとしているのがわかった。彼の不思議な能力のひとつだ。

ぼくはためらいをふりきった。どのみち引き返せない。

「行こう、あの部屋だ」

「わが同胞よ、いまこそ魔界よりよみがえり、われらが主の前哨となれ――」

夢と同じ光景が目に飛び込んだ。

思えば奇妙だ。護摩も魔方陣もおどろおどろしい祭壇もない。部屋は気密実験室かなにかのよう。得体の知れない装置が壁や天井に等間隔で配置されている。部屋のまんなかにはコンピュータのようなものがひとつ。ふりむいた男は技師かなにかに見える。

機械じかけの悪魔召喚！

「やがて魔界の王が戻り来たりて…」男の口調はぞっとするほど単調だった。くぐもった声はどこか別の場所から響いてくるような感じ。「その身を闇に追いやりしかの宿敵に対峙せんと…」

ずっと後になって、このときの言葉を理解した。じつは異変の深層に触れたものだった…。

「おまえたちはわが主が宿敵に使われるものであろう？」

「なんだ？　こいつ…なにを言ってやがる？」
男の目はなにも見ていなかった。
「体を乗っ取られている――」
トシキが言った。同時に彼の周囲で見えない波がうねる。
男の体が跳ねとんだ。
かつて邪悪な力に触れたことがあるものは、同じ力によってよみがえる。そのものの下僕となって仕えるために。
真の姿があらわれた。血と肉を得て過去からよみがえった悪魔召喚師――。

## 超人ドウマン出現！

LV15・HP398・MP50・使用魔法マハラギ／シバブー／マハザン

【パーティー】

●ショウ　LV15・装備　むめいのかたな／サバイバーナイフ／ヘッドギア／レザーグラブ／レザーブーツ

●トシキ　LV15・装備　スパイクロッド／ベレッタ92F／通常弾

／サバイバーベスト／ヘッドギア／レザーグラブ／レザーブーツ

●テツオ　LV15・装備　スパイクロッド／MPSマシンガン／通常弾／ケブラーベスト／フルヘルム／リベットナックル／コンバットブーツ

【仲魔】

●ケルベロス（パスカルと、仲魔のどれか一体とを二身合体）

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・トシキ／攻撃魔法ザンまたは回復魔法ディア・テツオ／使えるならば攻撃魔法アギラオ、使えなければガンでの攻撃・ケルベロス／ひたすら攻撃

【ワンポイント】

ケルベロスを先頭にして戦おう。魔法攻撃を中心としてマメに回復を繰り返せば、それほどやっかいではない。

戦いのやりかたをぼくたちはもうかなり心得ていた。やけっぱち気味の魔物狩りもあながちむだではなかったのだ。経験に乏しければこの戦いに耐えることができなかっただろう。それまでに戦ったどの相手よりも手こずったのはたしかだが、たぶん——それだけのことはあったのだ。

部屋のまんなかにある装置[※4]が警告音のようなものを発していた。
「見たことのないタイプのコンピュータですね」
ぼくたちはそれを囲み、しげしげと眺めまわした。
「いかれちまってる」
小さなモニター部分になにか表示されているのだがめちゃくちゃに乱れている。テツオが少しためらってから点滅しているパネルに手をのばした。
合成音がなにかを告げたが、ひずみがひどくて聞き取れなかった。しかしなにかがはじまったのはわかった。
部屋全体がかすかなうなりをあげはじめた。周囲の壁がかげろうのようにゆらめいたかと思うと、たちまち急速に流れだし、やがて灰色の霧に変わった。
予想外のことが突然起きたとき、それが異様に長い時間続いたような気がするものだ。このときの場合もおそらくほんの一瞬だったにちがいない。
起きたときと逆の順序でぶーんといううなりが止まったとき、ぼくたちはひとまずほっとした。部屋の光景にまったく変化はなく、なにかまずい事態をまねいたわけでもなさそうに見えたからだ。
たしかにまずくはなかった。おかげで八方塞がりの状況から脱出できた。部屋を出るまで気づかずにいたが、その装置こそ車椅子の男が言った瞬間移動システムだったのだ。

---

※4・装置
ゲーム中ではケルベロスが先に転送されてしまう。スティーブン博士が開発した瞬間移動装置。吉祥寺、渋谷などの都市を瞬時に移動できるシステムが建設されている。

NEUTRAL DATA FILE: 4▶ESCAPE

# 脱出

## 攻略手順

［IDカードでエコービルに侵入］⇩［エコービル5Fでドウマンと戦闘］⇩［パスカル強制転送されターミナルシステム作動］⇩［ターミナルシステムを使って研究所にワープ］

属性に関与してくるイベントは無い。ドウマンとの戦闘やこれから先の戦闘に備えて十分なレベルアップをしておくことが重要だ。

## 【第5章】新宿

「…世界の文明は腐りきっている。それは大地ガイアからの搾取の上になりたつ文明だからである。差別、貧困、戦いが世界を覆う今、われわれは悪魔と呼ばれる古の神々を目覚めさせた。それは真の危機に備えるためである。日本抹殺計画！　この恐怖の陰謀を阻止せんがため、われわれは古の神々の力を借りた。神々と人類が共存するユートピアを築きあげるために……」

駅前のオーロラビジョンが映しだす男は、かつてならまちがいなく狂気のレッテルを張られただろう。詭弁。妄想。神がかり…あるいは悪魔つき？　日常世界に恐慌をもたらしかねない狂った野望。だが今は？　いったい狂気というものの基準はなんだろう。日常世界の破壊？　では守るべき日常世界が変貌してしまったら？

「わたしは戒厳司令官のゴトウ[※1]である……」

演説は繰り返し繰り返し続いていた。

ぼくたちは新宿にいた。

あの奇妙な装置が作動したあと、いささか拍子抜けして部屋から出たぼくた

---

※1・ゴトウ
市ケ谷駐屯所に陣取っている。悪魔による力と混沌の世界を作ることを理想にかかげている。

ちは、はじめてそこがエコービルの中ではないのを知った。なにか研究所のような場所だった。車椅子の男の言ったことを思いだしたのはそのときだ。瞬間移動装置。『実験は成功した。ただしとんでもないおまけがついたがね……』——装置のせいで異界と通じてしまったのだというようなことを言っていた。たしかに機械じかけの悪魔召喚。あの召喚師をやっつけたので、本来のシステムが作動しはじめたにちがいない。

その建物に人気はなく、どこも荒れ放題だった。あちこちに散らばっていた紙くずから、瞬間移動装置の開発がここで行なわれていたらしいことをたしかめた。さらに、装置はすでに何ヶ所かに設置されていること、そこはターミナルと呼ばれ、ターミナル間での移動だけが可能だということを知った。

ぼくたちはまさに一瞬にして吉祥寺から千駄ヶ谷（そこに研究所があった）にやってきたというわけだ。そして研究所を出て新宿へ向かった——。

この街では多くのことがいちどきに飛び込んできた。まず目にしたのがオーロラビジョンから流れるゴトウという男の演説だった。

彼は戒厳司令官と称していたが、これをクーデターと呼んで威嚇していたのは、アメリカ大使トールマン※2という人物だった。いったいだれがどんな権限と秩序をふりかざしているのか？　なにもかもめちゃくちゃだった。最終手段として、アメリカ軍がミサイル攻撃を用意しているという噂もあった。

異変以来、人々の多くは考えることをやめていたから、このめちゃくちゃな

※2・トールマン
六本木のアメリカ大使館にいる。神による千年王国実現のきっかけとなるべく、東京にICBMを落とそうとしているが、悪魔（ここではゴトウ）との対峙のため、双方手だし出来ない冷戦状態にある。

事態を前にしても、たいていが怯えたり盲従したりという暗黒時代の蒙昧に堕ちていた。

　ガイア教とメシア教というふたつの宗教がそれぞれこう説いていた――。

「……最後の時が近づいています。いまわれわれがおすがりすべきお方はルシファーさまなのです。かつて天界にあって最も美しい天使であられたルシファーさま。われわれ人類に知恵をさずけるため、地上に降り立たれたルシファーさま。それゆえ神の怒りにふれ、悪魔にされながらも、われわれ人類のために神と雄々しく戦われたルシファーさま。いまこそわれわれはルシファーさまを崇めたてまつりて……」

「……わたしたちメシア教の仲間になって、ともに神に祈りましょう。みんなが神へ祈りを捧げれば、神はきっとわたしたちを救うために、救世主をおつかわしになるでしょう……」

　ぼくたちははじめからゴトウ対トールマンの争いに近づいていったわけではない。直面している事態は深刻だったが、別の噂によれば、ゴトウもトールマンも相手をうかがっているのか、なにかを待っているように、直接衝突する気配はないということだった。

　三人でこんな会話をかわしたことがあった。

「そういえばあの男のことも言っていましたね、スティーブン博士は。自分の野望を遂げるために悪魔の力を借りた、と」

　トシキの口調にはそんなことは断じて許し難いという相手を辟易させるような勢いがあったので、ぼくはやや冗談めかしてこう言った。

「でもぼくたちだって悪魔の力を借りている…」

「われわれにはきっと使命があるはずです」トシキはきっぱりと言いきった。それから少し考えこみ、いささ

か心もとなげにつけ加えた。「たとえばこの世界に秩序を取り戻すとか……」
そういえば夢のなかでトシキは言っていた、ぼくはなにかをなしとげるはずだった、と。彼はそれを見つけようとしているのだ……。
「救世主、か？」
笑いながらテツオが言った。深い意味はなかったのだと思う。メシア教徒につかまってさんざん説教を聞かされたあとだったから、たぶん、その言葉が出たのだろう。
「ゴトウってやつだって言いかたを変えればそうなるぜ」
「悪魔の力で世界を支配しようとするやつが、ですか？」トシキは眉をつりあげた。「悪魔の力を借りて理想国家をうちたてるなんて、ごまかしもいいところです。絶対にやめさせなければ」
「ここまできたらなんだっていいさ」テツオは肩をすくめた。「ミサイルと悪魔の対決ってのもけっこうおもしろそうだぜ。どっちが勝つかな。結局、力のあるやつが残るんだ」
トシキもテツオも正直だったのだと思う。
とにかく、はじめぼくたちにとってゴトウという男のことは、異変後の狂った状況のひとつであったにすぎなかった。
ところがこんな情報を耳にした。トールマンとは別にゴトウの企みを阻止しようとする動きがあること。彼らはレジスタンスと呼ばれているが、これを潰そうとするゴトウがリーダーを血眼になって探しているらしいこと。さらに――重要なのはここからだ――ゴトウの下で実際に動いているのはオザワという男であること。
そして狙われているレジスタンスのリーダーの名はアオイ――。

NEUTRAL DATA FILE: 5▶SHINJUKU

# 新宿

## 攻略手順

【研究所1Fでスティーブン博士に仲魔ストックを2体増やしてもらう】➡【アルトビル前でゴトウの演説を聞く】

場所が一転して新宿にかわり、出現する悪魔も吉祥寺にくらべて概して強い。とくにおしちは素早いので注意が必要。スティーブン博士に仲魔ストックを2体増やしてもらったので戦闘は楽になる。初めて出会った悪魔は必ず仲魔にするぐらいの取り組みが望ましい。今後の戦闘に備えてパーティーを充分レベルアップしておくことが大切だ。

# 【第6章】――レジスタンス

トシキは悩みを深くした。〝アオイ〟という名を聞いたとき、恋人のことを思い浮かべたのは当然だったと思う。しかしぼく同様、彼女がレジスタンスのリーダーになっていると考えたわけではない。隣家のアオイはごく普通の女の子だった。もちろんなんだって起きる。ぼくが悪魔使いなんかになったように。だがトシキにもわかっていた。悪魔と結託したゴトウが探しているという〝アオイ〟は、夢のなかで生贄にされかかっていたあの不思議な少女にちがいない――これはもう霊感的な確信だった。ぼくたちは彼女を探さなければならない――。

いろいろ聞きまわったところによると、ゴトウ一味はアオイという名の娘を見つけしだい、片っ端からどこかへ拉致して行ったらしい。トシキの彼女もとばっちりをこうむったにちがいなかった。

宿命的な使命感とそれとは無関係な恋人の安否。トシキは板ばさみになっていた。ゴトウの手先であるオザワという男に会えば、恋人の消息もわかるかもしれない――それが望みの綱だった。

テツオはといえば、むしろオザワを見つけたがっていた。ぼくたちが出会ったとき彼を痛めつけていたあのチンピラだと確信しているのだ。今度は必ずひとあわ吹かせてやる、と彼はいきまいた。そのことをぼくはあまり深く考えていなかった。いわゆる〝昔の借りを返す〟というやつだろう、と。テツオ自身、このときはせいぜいそんな程度だったのかもしれない。けれどもオザワとの確執によって、テツオの〝性質〟は決定的にある方向へと導かれていった…。

ぼくたちが〝アオイ〟と〝オザワ〟を探しているということは、地下街の情報網のなかですぐに広まった。

あるバー※1にいたときだ（ぼくたちは店の男がいつも聞き耳をたてているのを知りながら、〝アオイ〟や〝オザワ〟の名を口にしていたのだ）。チンピラ風の男が近づいてきて、ぼくたちを横柄な態度でながめまわした。

「オザワさんを探しまわってるってのはてめえらか？」

地下街の外にある廃ビル※2。ヤクザの事務所だったとしか思えない。似合いの場所だ。テツオのにらんだとおりだった。

「なんだ、吉祥寺の小僧じゃねえか」と、オザワはテツオを見てせせら笑った。

「まだ悪魔退治ごっこをしてるのか？」

「悪魔の使いっぱしりよりはましだろう？」

テツオは挑発的に言い返したが、余裕を見せようというつもりか、あえて武器には手を触れないでいた。

「いつからそんな大きな口がきけるようになったんだ？　二度とツラを見せるなと言ったはずだがな」

「言っとくがオレは昔の――」

「昔の痛いめを思いだしたいってか？」

二人は真正面からにらみあった。テツオの側から抑えきれなくなった攻撃的

---

※1・あるバー
新宿地下街には3つのバーがある。一番南のバーがレジスタンスたちの利用するところ。

※2・廃ビル
新宿地下街から見て北西の方向に位置する。

な力のオーラが発散されはじめ、それを感じたオザワのほうにも同様なものがみなぎった。まだ探りあいの気配だったが、双方が発散する力の波はみるみる不穏なうねりを高めていた（いつのころからか、ぼくたちはそういうものを目で見るようにありありと感じることができるようになっていたのだ）。

「ちょっと待って――」トシキがあわてて割って入った。「アオイはどこに？」

気配はややゆるんだ。

「アオイ？」一瞬、オザワは怪訝な顔をした。それからふと思いだしたように、うすら笑いを浮かべた。「どのアオイだ？」

「ぼくの――いや、さらっていった娘たちはどこにいるんですか」

トシキは努めて冷静さを保とうとしていた。

「知らねえな」オザワは肩をすくめてみせた。「オレはアオイって名の娘を片っぱしからゴトウのところへ連れてっただけだ。どれもこれもヤツが探しているのとは違ったらしいけどな。用なしの娘をどうしたか…そりゃオレの知ったこっちゃない」

トシキはあまりの怒りで声も出ないようだった。

「犬！」

テツオが吐きだした。力がみなぎり、いまにも爆発させかけていた。

「ほざいてな」オザワは目を細め、なぜか一歩しりぞいた。「力のあるやつが勝ち残る。だがオレにとってゴトウは手段だ。いずれヤツにとって代わってやる。てめえにつきあってる暇はねえ…」

ぼくたちははっとした。邪悪なものがあらわれるときに生じる霊気の波を感じとったからだ。

「こいつとでも遊んでな！」

オザワは悪魔を呼べるようになっていた。
死者は魔の力によってよみがえる。あまりに強い怨念を残して死んだものは、怨念そのものが悪魔の姿と化してしまう。
意志はなく、魔族としてはむしろ下級。悪意の実体化。
ぼくたちが戦っているうちに、オザワは姿を消していた。
テツオは武器を思いきり床に叩きつけたあと、もの凄い目をして黙りこんでしまった。彼のくやしさをわかったつもりで、ぼくは声をかけないでいた。今にして思えば、じつは半分も想像できていなかったが…。

〝アオイ〟の手がかりをつかんだのも、やはり例のバーだった。オザワの一件のあとだ。
店の男がいつにもましてじろじろとぼくたちのほうをうかがっていたが、人気がなくなるとなにげないふうに近づいてきた。
「召喚プログラムを持っているんだな?」男はいきなりそう言った。
「どうだか」
相手の狙いがなんなのか見当がつかなかったので、ぼくはあいまいな返事をした。すると男は呪文のように同じ調子で繰り返した。
「…持っているんだな?」
「まあね」
男はうなずき、次にこう言った。
「悪魔がのさばる状態をほおっておいていいもんかね?」

「いいわけがないでしょう」
トシキがむっとして言った。それにかまわず男はさらにこう言った。
「トールマンがうまくやってくれると思うかね？」
「うるせえな！」テツオがすごんだ。「あっちへ行けよ」
いじくりまわしていた銃を微妙な角度に持ちあげたので、テツオが本気だと思ったのか、男は少したじろいで後ずさりした。
「トールマンね…」トシキが思いだしたようにつぶやいた。「どうして彼は悪魔を恐れていないのでしょう」
「召喚プログラムを持っているんだろう、やっぱり」テツオがなげやりに鼻を鳴らした。
「二人の膠着状態を深読みすると、ゴトウのほうが内心彼を恐れているようにも見える…」トシキはなにか考えこんでいた。
「たしかに…」ぼくはふと思いついて言った。「トールマンも悪魔の力を借りてないとはいえないかもしれない」
「どっちだって同じようなもんさ。トールマンはミサイルをふりかざしてんだ。冗談としちゃおもしろいが、ほんとにやられたら悪魔よりオレたちが絶滅だ。オレはこのままのほうがまだましだって気がしてきたな」
テツオがそう言ったとき、ぼくのなかに稲妻のようにひらめいたものがあった。この街の地下街の片隅で、ラリった少女がたしかこんなことをつぶやいていた――『たくさんの黒い影が飛びまわって…大きな光が輝きだして…大勢の人のうめき声が聞こえ…でも黒い影は消えない…』
店の男は少し離れたところでぼくたちのやりとりをじっとながめていた。そしてぼくたちがふと黙りこんだとき、ふたたび近づいてきてぼくの前にすっと店のマッチを差しだした。

地下街の北のはずれにある階段を降りて行く。廃坑のような荒れかただ。じめじめした通路に居場所のなくなったような男たち数人がたむろしている。
「なにもねえよ」
「ここはおれたちのねぐらだぞ」
無気力な声を装っているが、投げかけてくる視線は油断がない。近づいていくと、一人の男が立ちあがった。バーのマッチを見せる。男はマッチとぼくたちとを念入りに見比べ、それから仲間のほうをふりむいてうなずいた。
武器は取りあげられたが、破れたシャッターが降りている場所に案内された。
「やはり本当にあなたがたと会う運命だったのですね」
奥の部屋にアオイがいた。夢のなかでぼくに強烈な印象を与えたあの少女——。

「とにかく——」
と、テツオが口をきった。ぼくがいつまでたってもただアオイを見つめているばかりだったからだ。
このときの状態をどう言いあらわせばいいのかわからない。それまで考えていた自分の宿命というものを別の角度から眺めて動揺した…か？　あるいは、大海だと思っていたのがじつは水たまりにすぎず、はじめてそれを俯瞰したときの感じ…か？　ただこのときにはそこまでも気がついていなかったから、不安も恐れも絶望も、そのほかのどんなものもはっきりとした形をとらなかった。なにかとてつもなく大きな予感めいたものに捉えられたものの、なにを予感しているのかわからない…というのがいちばん近かったかもしれない。

アオイはすべてを秘めている。このときぼくがなにか言えたとしたらそれだけだ。
テツオがもっと明快に言っていた——。
「これであの不思議な夢のなかで会った人物はでそろったってわけだ。で、なにがはじまる？」
「あなたは魔王召喚のための生贄にされかけていた。あの夢にはすべて意味があるのです。あなたはきっと重要な鍵を握っているにちがいない。それに、夢のなかでショウにこう言っていた…一度は別れる定め、と。あなたはどんなことを知っているのですか？」と、トシキ。
夢のなかと同じ深いまなざしがぼくたち三人を順番にめぐった。やがてアオイはこう語りはじめた——。
「あの夢の意味はわかりません。なぜわたしが夢のなかであんなことを言ったのか…。わたしには記憶がないのです。この…みんなが言っている異変以前の記憶が。仲間のなかにもそれ以前のわたしを知っている人はいないようです。わたしはあの夢を見る前の自分を思い出せない…。そのかわり夢から覚めたあと、わたしはなにか使命感みたいなものがあることに気がつきました。それがいったいどういうものなのかはよくわかりません。でも、いましなければならないことははっきりしています。ゴトウを…悪魔の力を使って思いのままの世界をつくろうとしている彼の企みを阻止することです。そして同時に、アメリカ大使トールマンの動きをも止めること——。彼がその気になればわたしたちの街は壊滅してしまいます。わたしの力だけではどうしようもありません。あなたがたの…きっとわたしと同じようになにかに導かれたあなたがたの力があれば…」
アオイはすべてを秘めている——ぼくは思った。さらに言えば——しかし彼女自身もそれを知らない。
「ショウ…」アオイはあらためてぼくを見つめた。「わたしは夢のなかで悪魔の生贄にされようとしていたところをあなたに救われました。それによってわたしは眠っていたなにかがよみがえってくるのを感じました。ところが目覚めてみると、消え失せていました。けれどあなたとこうやって本当にめぐりあったいま、ふたた

び感じています。失われた力がよみがえってくるのを。わたしはまだ目覚めかけたばかりです。でもあなたとともにいることで、わたしの力は――」

そのとき、アオイの目がふとぼくを通りこして入り口のほうにそそがれた。ぼくがつられて後ろをふりかえるより先に、ぞっとすることが起きていた。アオイのはっとした表情はそのまま凍りつき、ニュアンスにみちた瞳がみるまにガラス玉の虚ろさにすり変わっていった。その劇的な変化をまのあたりにして、ぼくも一瞬凍りついた。

「うふふふ……」

ユリコ！

ぼくはたちまち事態を悟った。夢かまぼろしか知らないが、その女があらわれるたびに感じていた不吉なものが、はじめて現実となって迫っていた。

「やっと本物のアオイを見つけたわ」

ふりむくと、異様にきらめくユリコの目にぶつかった。そのとたん視界の細部がぼやけ、夢のなかにいるような奇妙な状態に陥った。自分の姿を外側から眺めているような魂の離脱感。時が歪んだようなけだるさ。

ユリコは腕を組み、狩りの成果を調べるように、ぼくたちのまわりをゆっくりとめぐっていた。目は彼女の動きを追うことができたが、体はまるで感覚がない。そこにないかのよう。

「ショウ、だめよ」ユリコは微笑んだ。「あなたのパートナーはわたし。そう言ったでしょ。悪いけどこの女は連れていくわ」

ユリコはぼくに目を向けたまま、蠟人形のように無力なアオイの腕をつかんだ。

（アオイ――）

ごくごく平凡な悪夢さながら、叫ぼうにも声が出なかった。
二人の姿がゆらめき、そして…消えた。
「魔王召喚が現実になってしまいます」
トシキが言った。
アオイがユリコにつれ去られた。だれもがユリコの呪縛を受け、なすすべもなかった。アオイとユリコの姿が消え呪縛が解けたあとでも、どこからどこまでが夢なのかを、ぼくはきっぱりと認められなかった。
だがいつまでも呆然としている余裕はなかったのだ。まるですべてが仕組まれていたかと思いたくなるほどたちまちのうちに、公開処刑の情報は街をかけめぐった。レジスタンスのメンバーたちに懇願されるまでもなかった。
「ゴトウはいわば司祭にすぎません。より大きな力を招来するための道具なんですよ」
「そうなればトールマンが動く…冗談じゃねえぜ。最悪だ！」
テツオがそう言ったとき、ぼくは不吉にも閃光を感じていた。

NEUTRAL DATA FILE: 6▶RESISTANCE

# レジスタンス

## 攻略手順

［新宿地下街から北西の位置にあるオザワの隠れ家に行く］⬇［新宿地下街でゴトウ、トールマン、レジスタンスの話を聞く］⬇［バーでマッチ入手］⬇［B2Fレジスタンスのアジトに行く。リーダー（ヒロイン）に会う］⬇［ヒロイン、ゆりこに連れ去られる］

属性に関わるイベントはない。これ以降のボス戦に備えてレベルアップしておこう。新宿の街では様々な情報が聞ける。ゴトウ、トールマン、レジスタンスの対立関係をしっかりと理解しておくことがゲームを理解する上で大切だ。バーのマスターとの会話でマッチを貰うには本文の通り。悪魔も神も認めないニュートラルの立場で答えよう。

# 【第7章】——公開処刑場

「ショウ!」
異様な静けさのなかにユリコの声が響いた。
広場の中央に立てられた柱。そこに縛りつけられているアオイの姿が目に飛び込む。頭を垂れたままぴくりともしない。
「やっぱりきたのね」
ユリコは階段の上にたたずんでいる。群衆といっていいほど大勢の人々がいるにもかかわらず、彼女を別にすれば都庁※1前広場は凍りついたような光景だった。女、子供、年寄り、兵士、警官…おそろしく雑多な人たちが入り交じっていたが、みな一様に虚ろな顔つき。みじろぎひとつしない。
またしても悪夢にまぎれこんだような感じ。ユリコがあらわれるといつもそうだ…。
「みんな操られているのか?」テツオがあたりを見まわしながらつぶやいた。
「なんなんだ、あの女は…」
「もちろん悪魔の…」
「悪魔!」

※1・都庁
新宿地下街の西に位置している。

ユリコが鋭くさえぎった。トシキのささやき声が届く距離ではなかったのに。

「人間が悪魔と呼んでいるのは神と呼ぶものがあらわれるまで世界に君臨していた古い種族のことよ。長い長い抗争の末、魔族はかつての地位を追われた。ただそれだけのこと。正も邪もありはしない。悪魔が人間の敵で神が味方？　人間は〃神〃にそう信じこまされただけ。神は人間が魔族をあがめるのを許さなかった。神は嫉妬深く身勝手なのよ」

だから？　このときユリコの言葉にどれほど意味があるのかは重要でなかった。

「なぜ彼女を…？」

ぼくはつぶやいた。ほとんど声にならなかったが、ユリコは答えた。

「あなたにわたしの側で戦ってもらいたいから」

「まどわされてはいけない！」

トシキが言った。

「戦う？」

テツオは問いかえした。

ユリコはあの謎めいた笑みを浮かべた。

「これからどんな戦いがはじまるかあなたたちは知らない。わたしたちにはさらに大きな力が必要なの。人間たちもそれを望みはじめたわ。魔王がよみがえる。もうすぐよ。でもぐずぐずしてはいられなくなった。敵は動きはじめたわ。わたしたちは魔王の復活を急がなければいけない。この女はそのための生贄よ」

アオイを救わなければ——ぼくの心のなかにはそれしか浮かばなかった。

あたりの空気がにわかに変わった。ユリコは心を読んだのだ。そして黙ってたしなめにかかった——。

人々が動きはじめていた。どんより濁った目が次々にぼくたちのほうを向く。のろのろと体をまわし、ぎこちなく足をひきずりはじめる。下等な生物が餌や光を感じて寄り集まるように、緩慢な動きだが、確実にぼくたちを目指していた。

その光景には異形のものたちが迫ってくる以上にぞっとするものがあった。ぼくたちは背中あわせに寄りかたまり、突破口はないものかとうかがった。度を失うというよりためらいがあったのだ。

そのあいだに不気味な人々の輪は密度を増し、距離はじりじりと縮まっていた。

真っ先に動いたのはテツオだった。※2 いちばん距離を縮めていた戦闘服の男にMPSマシンガンを浴びせた。

「こいつらは人間じゃあねえ」テツオは叫んだ。「見ろ！」

正確には、かつて人間だったものたちだ。彼らは死者だった。魔力で操られ、頭を砕き飛ばされてもずるずると足をひきずりながら迫っていた。

テツオはめくらめっぽうに撃ちまくった。

だが彼らはひるむということを知らなかった。腕がもげ、首がねじきれ、胴がえぐれても、なにかそれらしいかたちがあるかぎり、ぼくたちの生気に引きつけられ、にじり寄ってきた。

腐肉をひきずり、どろどろの臓腑をしたたらせる死者の群れがぼくたちのま

わりにひしめいていた。ぼくたちはそれがさらにずたずたになるまで切り裂いた。ぐちゃぐちゃの肉塊になるまで打ちのめした。
そんな身の毛のよだつ戦いのあいだ、ユリコのささやきがつきまとった。
「あなたのアオイがどうなったか知りたくないの？　市ヶ谷[※3]のクーデター部隊司令部に連れて行かれて…」
トシキに向かって言っているのだった。テツオにはこう言っていた。
「オザワやゴトウがどうやって力を手に入れたか知りたくない？　あなたならオザワにとって代わる力があるわ…」
ユリコの声は耳にではなく、じかに心にしのびこむささやきだった。それは蜘蛛の糸のようにいつまでもしつこくまとわりつき、ぼくたちの心をかき乱した。
「ショウ、あなたを苦しめるつもりはないの。さあ、わたしの名を呼んで。そうすればこの世界に血と肉を得ることができる。あなたのパートナーとなってあなたを偉大な力のもとに導いてあげられる…」
押し寄せる死者の群れには際限がないように思えた。いくら切り刻んでも、あとからあとからわきだしてくるかのようだった。
ぼくたちは休むことなく武器をふりまわしていたが、やがて完全に取り囲まれた。どこからともなく伸びてくる腕に、体のあちこちをつかまれ、それをふりほどこうとすればするほど、動きは取れなくなっていた。

---

※2・真っ先に動いたのは……
この都庁前広場での戦闘では、ゾンビコップ×8・ゾンビアーミー×8・ゾンビアーミー、レムルース各×4・レムルース、ピシャーチャ各×4の順で主人公達に襲いかかってくる。

※3・市ヶ谷
新宿地下街から見て東部に位置している。

ぼくたちは疲れ果て、わめき声さえ嗄れ、ついにユリコの魔力の前にくじけかけた。

『ショウ…』

そのときぼくはアオイの声を聞いたと思った。

けんめいに首をねじまげて目をやると、柱の前にユリコがたたずみ、縛られたアオイの体に両腕を差し伸べるのが映った。

なにが力を与えてくれたのか知らない。

「アオイ――」

ぼくは叫んでいた。アオイが生贄に捧げられようとしていたあの夢のときと同じように。

ふと周囲の動きが止まった。

ぼくたちは死者の群れを呆然と見つめた。あたりに飛び散った腐肉や血の溜り。まだかたちを保っていたものも、そのなかに頽れた。

異様な静けさがもどっていた。ぼくたちのあえぎ声だけが響く…。

「わかったわ」

冷たい声がきっぱりと言った。けれどもその姿は水面に乱れる影のように揺らめいていた。

「わたしを拒み、この女を選んだ…。ショウ、残念だわ。わたしにはこれ以上どうにもできない。これがどんな結果になるのか自分の目で確かめるといい――」

ユリコは消えた。

# 公開処刑場

NEUTRAL DATA FILE:7▶THE PLACE OF DEATH PENALTY

## 攻略手順

［レジスタンスのアジトを出て、レジスタンスのバーに行く。ヒロインが都庁前広場で処刑されてしまうと聞く］

↓［都庁前広場でヒロインを助ける］

レジスタンスのバーは、前項でマッチを貰ったところ。ここで公開処刑の情報を入手するが、ここでは焦らずに都庁に向かう前に体力、魔力回復をしておこう。都庁での戦闘はゾンビコップ、ゾンビアーマーなど出現する敵の数が多い。ＭＰに注意しながら戦えば楽に勝てる。

# 【第8章】――悪魔と神の対立

トシキとテツオが去った。

トシキは恋人アオイの行方を求めて。クーデター司令部に連れて行かれた、とユリコは言った。テツオはオザワへの執着を巧みにそそのかされて。

ユリコ（あるいはゴトウの？）の罠だ、とぼくは言った。けれども憑かれたような二人を結局止めることはできなかった。

ぼく自身は目的を見失っていた。もともとはっきりと見えてはいなかったのだが。アオイを救い出した。だがトシキとテツオは去った。これからどうするべきなのか？

これがどんな結果になるのか自分の目で確かめるといい――と、ユリコは言った。不吉な予言めいた響きだった。そのことを話すと、アオイは遠いところを見つめて言った。

「世界を破滅から救うためにゴトウとトールマンに会わなければ」

そしてふと、懐かしいものを見つめるようなまなざしをぼくに向けた。

「あの夢はやはりほんとうでした。力がよみがえるのがわかります…」

その言葉のとおり、やがてアオイは不思議な力を発揮するようになった。見つめるだけで相手を眠らせたり※1、意志を集中して相手を※2ひるませるに充分なショックを与えたりすることができた。あるいは逆に増幅させることも。相手の力を捉えてコントロールするようだ。まだ兆しにすぎなかったが、ぼくがユリコの魔手から救っ

たとき、アオイの秘められた力は目覚めはじめたのだ。
市ヶ谷のクーデター司令部※3に陣取るゴトウ。六本木のアメリカ大使館※4にたてこもるトールマン。周辺には不気味な力がうごめいていた。事態の表面的な主役である二人に会うことができたのも、アオイの目覚めがあってこそだった。

「あの女を拒んだらしいな」

ゴトウは手にした刀から目を離さずにそう言った。引きしまった体つき。隙のない眼光。強靭な精神と肉体の融合を称揚するタイプ。だが彼はそれ以上のものを信奉している。悪魔の力を借りて世界を操ろうという男。

彼はぼくたちが来るのを知っていた。

「ということは――」

ゴトウは歪んだ笑みを浮かべながら、おもむろにぼくたち…ぼくとアオイだ…をねめつけた。

「おまえたちはわたしの敵だ。だがわたしはもういちどチャンスを与えよう。よく考えるがいい」

ゴトウは駅前のオーロラビジョンから流れている演説そっくりの口調で〝悪魔〟と人間の共存について説いた。そして〝神〟の陰謀についてこう語った――。

「いま神のもとに千年王国をつくりあげる計画が進んでいる。千年王国…そこ

---

※1・見つめるだけで……
神経系の魔法ドルミナーだ。

※2・意思を集中して……
ジオ、マハジオといった電撃系の魔法だ。

※3・クーデター司令部
ゴトウのいる市ヶ谷駐屯所。入るためにはヒロインの持っているIDカードが必要。

※4・アメリカ大使館
トールマンのいるクーデター司令部（アメリカ大使館）は、市ヶ谷駐屯所から見て南方の六本木地下道を通って行くことが出来る。ここでもIDカードがないと入ることはできない。

に生きる民はとこしえの安らぎが約束されるという。しかしそれは神に選ばれたひとにぎりの者のみに許されること…その他の者は神の意志のもと、アメリカ軍により抹殺される。アメリカ大使トールマンは神の代理人だ。やつはアメリカ軍を支配し、ミサイルによってそれを成し遂げようとしている。ろくでもない人間どもは根こそぎ…」

ふと口をつぐみ、あたりを払うしぐさをしてみせた。

「だがなぜ彼はただちに行なわないのか？　われわれの力があるからだ。悪魔、すなわち古の神々がトールマンの力を抑えている。したがっていまのところミサイル攻撃は防がれている。だがいずれ、より大きな力で挑んでくるだろう。その前にやつを倒さなければならんのだ」

よく考えろ、と彼はふたたび言ってぼくたちに背を向けた。

一方、アメリカ大使トールマンの言い分はこうだった——。

「われわれは神のもとに生きています。にもかかわらず…」

信念にあふれた聖職者のような口ぶりで〝悪魔〟の野望を非難した。

「ゴトウは悪魔の力を手に入れました。魂とひきかえに。彼は傀儡です。混沌こそ理想の世界を築くエネルギーだと言っていますが、それはつまり悪魔の支配する世界にほかなりません。彼はこの世界に魔王ルシファーを呼ぼうとしているのです」

魔王の召喚。ユリコもそれを言っていた。トールマンはこう続けた。

「わたしは神の加護を受けています。わたしがここにいるかぎり、彼の力を抑え、彼によるルシファーの復活は遂げられないはずです。けれども彼はいずれもっと力を蓄えるでしょう。その前に彼を滅ぼさなければなりません。そのためにはミサイル使用さえ辞さないつもりです。もう準備は整っているのです」

ぼくたちはそのときはじめて彼の後ろにある壁のパネルの意味に気がついた。地図だ。東京と太平洋上のある一点とを結ぶ破線の恐ろしい意味。ICBMの軌道。

「罪のない多くの人々はどうなるのです!?」

アオイがうめくように言った。

「より大きな正義の前には多少の犠牲もしかたありません」

トールマンは悲しげに首をふってみせた。そして諭すようにこう言った。

「あなたがたは選ばれた人間です。なんのためにその力を用いるのがふさわしいか、よく考えてください」

ぼくたちはいつのまにか重大な選択を迫られていた。

トールマンはゴトウを悪魔に利用されている人間だと言った。彼はそれに気づいていない、と。

あなたがたは選ばれた人間だ――。

しかしぼくたちはトールマンに説得されたわけではなかった。より大きな正義の前には多少の犠牲もしかたない――あるいはトシキならその考えを受け入れたかもしれない。だがぼくにはきっぱりとそう言いきるだけのよりどころがなかった。

だが彼は本気だ。殉教者の狂気。ぼくたちはトールマンに会ってそんなものを感じた。このまま両者のにらみあいを傍観していればどうなるか。トールマンはミサイル攻撃の指令を下すだろう。また彼になにかあっても計画は即座に実行されるはずだ。

間違いなくそう思えたのだ。となると、当面の破局、つまりミサイルによる破壊を回避するためにはゴトウを……。

ゴトウを倒す——実際のところ、ぼくたちがふたたびクーデター司令部へ行ったとき、はっきりと決意を固めていたわけではなかった。しかし彼はぼくたちの気持ちを見抜いていた。

「どうやら——」と、ゴトウは目を細めてぼくたちを眺めた。「神の手先にうまくまるめこまれたようだな」

周囲に力の気配がうずまいた。トールマンの意を汲んだのではない、などと説明してもむだだ。ユリコを拒み、アオイを選んだ。それだけでぼくの立場ははっきりしている。戦いは避けられない、と悟った。

「ならば——」

ゴトウは次々に悪魔を呼びだした。ぼくもまた仲魔を呼び出し、それに応じた。異形のものたちの力がぶつかりあった。

「なるほど。おまえも悪魔使いだったな」ゴトウは言った。「なぜその力を神のために使う？　なぜ自分のために用いない？　それが生きのびる道だというのに…」

「悪魔の意のままに？」

アオイが言った。

ゴトウはかっと目を見ひらき、刀を抜きはなった。

「人間は悪魔とこそ共存できるのだ。神のもとでは奴隷にすぎん…」

彼の体がひとまわり大きくなった。ぼくたちを見おろす目は底なしの闇を思わせた。闇の奥からふつふつと力がわきだすのがわかる。ゴトウは悪魔召喚の力を手に入れただけではなかったのだ。みずからの体に悪魔の力を宿らせていた。

## 超人ゴトウ出現！

LV28・HP440・MP60・使用魔法シバブー／かいしん／ディアラマ

【パーティ】

●ショウ　LV21・装備　さんせつこん／MPSマシンガン／ショットシェル／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／ライダーブーツ

●アオイ　LV21・装備　アセイミナイフ（ドリアードとの戦闘で入手）／MPSマシンガン／神経弾／メタルクラウン／ハイレグアーマー／ガントレット／スカイヒール

【仲魔】

●ツチグモ（アメノウズメ＋インプ）

●アメノウズメ（アンドラス＋ジャックフロスト＝エンジェル、エンジェル＋ジャックランタン＝アメノウズメ）

●スパルトイ（米大使館に出現）

※　合体に使用する悪魔は、全て新宿で仲魔に出来る。

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンで攻撃・ツチグモ／攻撃・アメノウズメ／攻撃または回復魔法ディアラマ・スパルトイ／魔法（タルカジャ）をMPが無くなるまでかけて、その後攻撃

**【ワンポイント】**

ゴトウとの戦闘の前に4体の悪魔と戦闘になる。ここではMPを温存しておくことがだいじ。ゴトウはディアラマを使えるのでできるだけ早めに戦いを終わらせたい。戦闘終了後には、めいとうこてつが手に入る。

ゴトウは異界から呼び起こした力を全身にみなぎらせていた。それは大きな波のうねりのようにぼくを押しつつんだ。

ゴトウの太刀がひらめいた。ぼくは動けなかった。が、そのときかたわらにアオイの力を感じた。それがぼくを呪縛から解き放った。

どうにかまともな戦いに持ち込んだものの、悪魔の力を得て超人と化したゴトウはぼくをはるかに越えていた。ぼくの攻撃は自分の消耗を招くばかり。ゴトウはそのたびにあらたな力を呼び起こした。彼の太刀は周囲の空気をもまきこんで、たてつづけに鋭いうなりをあげた。ぼくは追い詰められ、ふたたび、抵抗しがたい

波のうねりに捉えられかけた。
アオイが叫んだ。
ぼくはアオイを目覚めさせた。だが後になって気がついた、アオイこそぼくの力を引き出す触媒のような存在だったのだ…。
なにか大きな力がはじけた。ぼくはそこに飛び込んだ。
一瞬、自分がそれを受けたのだと思った。体が砕けるような衝撃。ぼくはよろめき、大きく後退していた。
見えない波のうねりが急速に退いていくのがわかった。
ゴトウは太刀をふりかぶったままの姿勢で、胸を貫いたぼくの剣をじっと見おろしていた。やがて一、二歩よろめき、それからゆっくりと目をあげてぼくを見た。
「わたしが死ねばやつが引くとでも思うのか…」
ゴトウは倒れた。
青い炎がそれをつつんだ。
この世ならぬ魔物同様、異界の力と融合したゴトウの体は一瞬のうちに消え失せた。
彼の持っていた刀[5]だけが残された。
「やはりあなたがたにはその力があった」

---

◆5・刀
攻撃力32、命中率7、回数1の剣、めいとうこてつ。

大使トールマンはいかにも感嘆したようにうなずいた。計算されたようなその態度のどこかに、ぼくたちを警戒させるなにかがあった。

「ミサイル攻撃の命令は撤回してもらえますね」

ぼくは用心深く念を押した。だがトールマンはそれに答えず、あいかわらず愛想のよい笑みを張りつけたままこう言った。

「これからも神のためにはたらいてくれますか？」※6

なぜか不吉な宣告のように感じられ、ぼくは答えをためらった。

「わたしたちは…」アオイが言った。「神のためにゴトウを倒したのではありません」

トールマンは驚いたように両手を広げた。

「神に仕えるのがいやだとでも？」

ぼくたちは答えなかった。沈黙は充分に答えのかわりになった。

「神のもとで生かされていることがわからないのですか？　それでは——」

トールマンの声が変わっていた。

「それではおまえたちもゴトウと同じだ」

いくつもの稲妻のような光が彼の周囲をかけめぐった。次の瞬間、ぼくたちは異形のものを前にしていた。

「わたしは偉大なものによって遣わされた」

---

※6・これからも……
この問いを承諾するとロウに寄り、トールマンとの戦闘は行われないので注意。

## 魔神トール出現！

LV30・HP482・MP90・使用魔法　ジオンガ／マハジオ／バインドボイス

【パーティー】

●ショウ　LV21・装備　めいとうこてつ／MPSマシンガン／ショットシェル／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／ライダーブーツ

●アオイ　LV21・装備　アセイミナイフ／MPSマシンガン／神経弾／メタルクラウン／ハイレグアーマー／ガントレット／スカイヒール

【仲魔】

●ツチグモ（アメノウズメ＋インプ）

●アメノウズメ（アンドラス＋ジャックフロスト＝エンジェル、エンジェル＋ジャックランタン＝アメノウズメ）

●スバルトイ

【攻略法】
ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンで攻撃（神経弾使用）・ツチグモ／攻撃・アメノウズメ／攻撃または回復魔法ディアラマ・スパルトイ／魔法タルカジャをＭＰが無くなるまでかけて、その後攻撃

【ワンポイントアドバイス】
ゴトウよりも戦闘は楽。神経弾を装備したガンでトールマンを攻撃。動けない状態にしておけば楽勝。

天使トールマンの姿は仮のものだったのだ。このとき、おぼろげだったが、ぼくはユリコの言ったことをはじめて理解した。魔族と神族の確執。ふたたびこの世界で両者の戦いがはじまろうとしていること――。

「神の意志に逆らうものは罰を受けねばならぬ」

神族の使いは巨大なハンマーをふりあげていた。

雷鳴がとどろいたように思った。圧倒的な衝撃。だがぼくはかろうじて受け止めていた。ゴトウのところで得た剣だった。

しかしアオイの力がなかったら、とうてい持ちこたえてはいなかった。

そこで屈服していたら、事態は変わっていたのだろうか？　その後起きることがあらかじめわかっていたとしたら、頭上にのしかかる力にあらがうのをあきらめ、神に仕えることを誓っただろうか？

ふたたび空気が激しく震えた。だがそれは消えゆく雷鳴だった。

ぼくは巨大な鉄槌をはねのけていた。

「すでにわたしの手に負えぬとは……！」

神族の代理人は無数の小さな稲妻につつまれていた。だが光はしだいに弱々しく乱れていく。

「だがすでにわがハンマーはふりおろされた。悪魔どもとその追従者は消え去るのだ……神の千年王国に栄光あれ……」

魔神トールは消えた。

「ショウ！　見て――」

アオイが叫んだ。壁のパネルを指さしていた。

「まさか…」

太平洋上にあらわれた光の点を、ぼくたちは呆然と見つめた。それはおそろしく律儀に、そして異常な速度でもって、東京まで伸びた破線の上を進んでいた。

すでにわがハンマーはふりおろされた――ＩＣＢＭの姿をとった神の鉄槌！

なぜ!?

逃げよう！　どこでもいいからとにかくこの場を離れたい！　罠にかかった動物はきっとこんなやみくもな恐怖に襲われるのだ。

そのほうがまだましなのじゃないか、とさえ思う。

逃げよう――でもいったいどこへ!?　ばかげている！　あと何十秒かで都市をまるごと破壊する爆弾が炸裂するのだ。残る時間でどこへ行こうと同じじゃないか！

あまりにも明白な絶望の前に、考えることはもちろん、怒りや恐怖さえも萎えいっさいが麻痺してしまった。

「信じられない…」

ぼくはばかのように繰り返しつぶやき、急ピッチで移動する光の点を眺めていた。

「ショウ、あなたは生きのびなければいけない…わたしがまたあなたに会うためには…」

アオイがなにを言っているのかわからなかった。ぼくはにわかに自分を取り戻し、アオイに伝える言葉を探した。

「時間がないわ」

アオイは首をふった。ぼくたちは手を取りあって壁のパネルを見つめた。

光の点が東京の位置に重なり…そして止まった。

永遠の長さに思えた一瞬。

アオイが押しのけるようにしてぼくの手をふりほどき、すばやく唇を動かした。

「さようなら、ショウ…」

音はしなかった。閃光がいっさいを消しさった。アオイの姿が一瞬だけ輝きのかたまりとなって目に焼きついた。

そしてすべてが消えた。

ぼくは灰色の空間に浮かんでいた。大きな手につかまれ、どこかへぐいぐいと引っ張られているような感じとともに、意識が遠のいた。

# 悪魔と神の対立

NEUTRAL DATA FILE:8▶THE DEVIL & THE GOD

## 攻略手順

「レジスタンスのバーでロウヒーローの彼女の話、オザワの話を聞く。目的が出来たので、ロウヒーロー、カオスヒーローともに去る」⬇「ヒロインが仲間になる」⬇「市ケ谷駐屯所ゴトウの話を聞く」⬇「アメリカ大使館でトールマンの話を聞く。頼みを聞き入れる」⬇「ゴトウと戦闘になる」⬇「トールマンに対して神への忠誠を誓わない。戦闘になる」⬇「ICBMが東京に落る。ヒロインに飛ばされて主人公脱出」

初めて属性に関連するイベント、ゴトウ&トールマンとの戦闘がある。いったん2人の話を聞いたあとでまずはゴトウと戦う。そのあとでトールマンに再び会いに行き、彼の頼みを断れば戦闘となる。ゲームをニュートラルで進めていくうえでのポイントは、そのイベントがロウ寄りなのか、カオス寄りなのかを、街での情報やその場での会話から読みとって、両方のイベントをうまく交互にクリアしていくことが基本になる。どちらかにかたよりながらも最終的にニュートラルの状態にもっていけばいい。

# 【第9章】金剛神界

霧がたちこめていた。

霧はゆっくりと流れているようで、自分の手も見えないほど濃くたちこめたかと思うと、ふと途切れ、奇妙なかたちをした岩や石筍が透かし見える。

どうやら岩山のような場所なのだが、いったいどこなのか、どうしてそんなところにいるのかわからない。これは夢で、目が覚めると自分の家のベッドのなかにいて、母の声が聞こえてくる…ふと思ってみたものの、そんな考え自体がひどく遠いことのような気がした。

心にもやがかかっている。だから不安も恐怖もぼやけている。それはむしろ心地よく、もやをはらいのけるのは億劫だ。ぼくは夢遊病者のようにふらふらとさまよい歩く。なぜそうするのかさえ考えもしない…。

流れる霧の切れめにあらわれた岩がまるで人影のように見える。ふと足を止めると、見おぼえのある姿が浮かびあがる。

「…いまこそわれわれはルシファー様をあがめたてまつりて…」

奇妙な服装をした男…新宿のカオス教徒だ。

霧がゆらめき、彼の姿は消え失せる。幻だ、と思い、ふたたび歩きはじめる。幻は次々にあらわれる。

「…みんなが神へ祈りを捧げれば神はきっとわたしたちを救うために救世主をお遣わしになるでしょう…」

メシア教徒の女。

「…きみはわたしがつくったプログラムを持っているな?」
車椅子の男。
「…やめてくれ…改造手術なんていやだ…」
病院でわめいていた男。
「…公園で殺された女の子、同級生らしいの…」
彼女はなんて名だった?
さまざまな人たちがとりとめもなくあらわれては、消えた。ぼくは夢見ごこちでそれを眺める。
「…気をつけてね、ショウ。あまり遅くならないように…」
母だ! 心の痛みは生々しさを失い、むしろ懐かしさだけをかきたてられた。ぼくの家…ぼくの街…。
「…え? 夢? あたしそんな夢見ないわよ。どうしたの、ショウ?」
隣家のアオイ。そういえば彼女はどうなったのだろう? それに…トシキは? テツオは?
心のもやが激しくゆらめいた。ぼくはどこかでそれに抵抗していたことに気がついた。だがもう逆らえない。
「…大きな光が輝きだして…大勢の人のうめき声が…」
地下街の片隅で繰り返しつぶやいていた娘。
「…ショウ」
アオイ!
「あなたは生きのびなければいけない…わたしがもういちどあなたに会うためには…」
すべてをはっきりと思いださないわけにはいかなかった。
ゴトウとトールマン。悪魔の手先と神の代理人。ぼくとアオイはミサイル攻撃を阻止するためにゴトウを倒

した。だれのためでもない。あえて言えば、自分と多くの人たちのため。そのことをトールマンに言明しただけなのだ。なのに、みんなあの閃光とともに——。なにが間違っていたのだろう？

『時間がないわ…』

ぼくの願いにもかかわらず、アオイの姿も霧の流れとともにかき消えた。

「いったい——ぼくになにができたっていうんだ!?」

ぼくはひどい苦痛をはきだした。

気がつくと、泉のそばに立っていた。どこかで見た光景だと思った。

「ショウ…？」

岩だと思っていた影が動いた。幻影ではなかった。霧をかきわけるようにトシキがあらわれた。※1

「おまえたちもか？」別の方向からも声がした。「よかった、助かったぜ——」

「テツオ！」

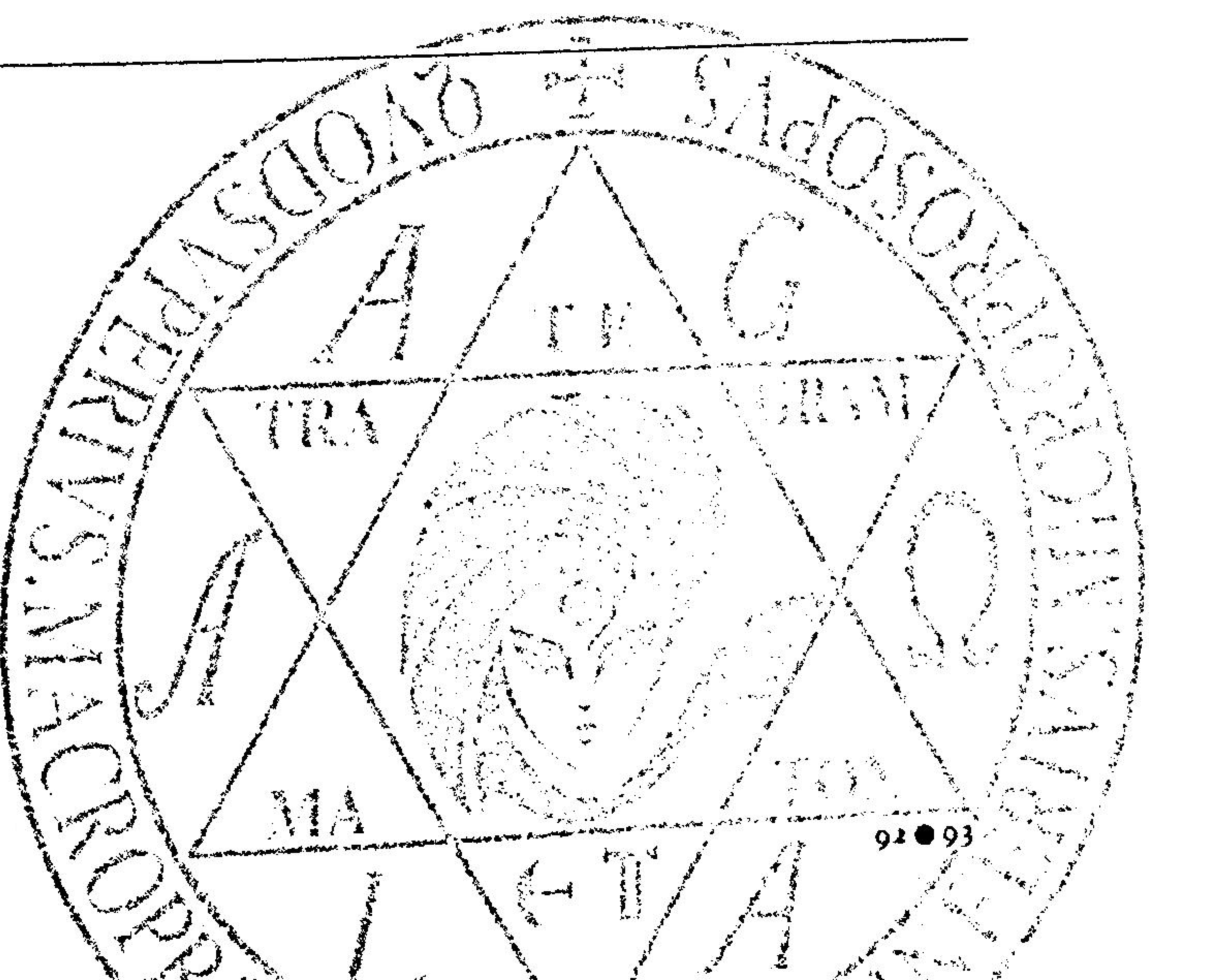
ぼくたちはふたたびいっしょになった！

二人は当惑しきっていた。

ぼくと別れた後、トシキは恋人アオイの消息を求めてクーデター指令部にどうにかもぐりこんだ。たしかにそこにはアオイという名の娘が何人か捕らえられていたが、すでにどこか別の場所に連れて行かれたあとだった。見張りの

---

※1・トシキが……
ゲーム中では、ロウヒーロー、カオスヒーローと再会する前にエンノオツノと出会うことになる。



男からそのことを聞きだした。途方にくれ、ぼくを探していたとき、あれが起きたのだ、と。
「閃光を感じたとたん、なにか不思議な力がはたらいたのです」
テツオも似たようなものだった。やはりオザワには会えないままにこんなことになってしまったのだ、と。
ぼくは事の次第を話した。ぼくの選択について二人にはそれぞれの考えがあったに違いないが、あえてそれを明かそうとはしなかったのはありがたかった。
「それにしても――いったいどうなったんでしょう?」
「――で、ここはいったいどこなんだ?」
二人はほとんど同時にそう言った。
「ここか?」あらたな声がそれに答えた。「ここは金剛神界。おぬしらから見れば…まあ、魔界のひとつといったところかの…」
泉の縁に突き出していた大きな岩のまわりで霧がうずまいた。あらわれたのは修験道の行者のような老人。
「わしはエンノオヅノ。この世界をひらいたのはわしじゃ」
テツオが身がまえた。
「おまえがおれたちをここへ連れてきたのか?」
「わしが呼んだわけではない。ゆえあってあずかっただけじゃ…」相手は言葉をにごした。「おぬしらがいた世界はひどいことになってしまった」
「ひどいって…どんな…?」
ぼくはおそるおそる訊ねた。
「魔界よりもひどいかもしれんな」行者はあいまいに首をふった。「だが心配することはない。まだ人間は滅

びておらん」
「なら戻してくれ！　どんなことになっていようとここにいるよりはましだ」
「そんなにひどいことになっているならよけい戻らなければ――」
「そろそろ地上ではしかるべき時がたっておろう」
ぼくたちの当惑をよそに、行者はのらりくらりとつぶやいた。それからふと思いついたように、こんなことを言った。
「ところで、ひとつわしの頼みをきいてくれぬか？[※2]　ここには二人の怪人が住み着いておる。彼らはあるものを持っているのだが、それを取ってきてほしいのだ」
試されているのだ。ぼくたちは顔を見あわせた。
「いやいや、行くのはおぬしひとりじゃ」
エンノオヅノは首をふり、ねじれた杖の先をぼくに向けた。

霧のなかに青い光が浮かびあがった。
そのあたりをうろついていれば会えるだろうて、と行者の言ったとおり、泉のほとりを離れてしばらく歩きまわっていると、それが行く手にあらわれた。
光はもやもやとうねりながら、やがておぼろげな人のかたちとなった。

---

※2・わしの頼み……
ゲームではまずソーマの泉に行ってソーマを取ってきてくれと2回頼まれる。金剛神界の中にはそれ以前に仲魔にしていた悪魔のいる部屋がいくつかある。ゴトウ・トールマンとのイベントで属性がかたよっていると、悪魔によっては再び仲魔にならない場合がある。

## 超人青怪人出現！

LV32・HP310・MP60・使用魔法　マハラギ／アギラオ／シバブー

**【パーティー】**

●ショウ　LV25・装備　めいとうこてつ／MPSマシンガン／ショットシェル／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／ライダーブーツ（※前回のトール戦と装備は変わらない）

**【仲魔】**

●ハクタク（タンキ＋ツチグモ※タンキ、ツチグモは金剛神界に出現）

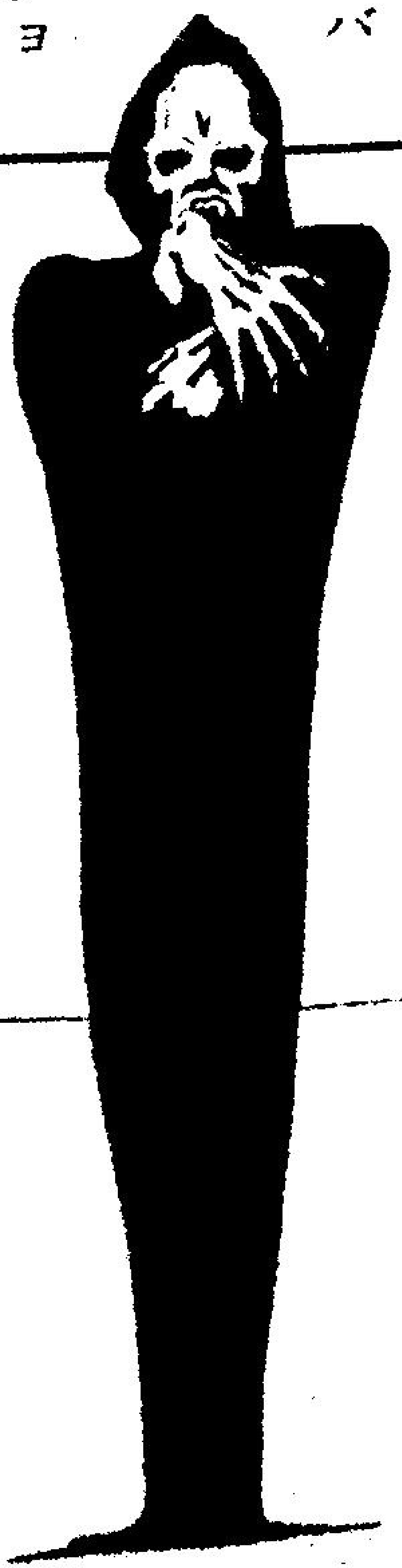
●アメノウズメ（アンドラス＋ジャックフロスト＝エンジェル、エンジェル＋ジャックランタン＝アメノウズメ）

●ガンダルバ（金剛神界に出現）

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・ハクタク／攻撃・アメノウズメ／攻撃または回復魔ディアラマ・ガンダルバ／攻撃魔法（ジオ）をかけ続ける

**【ワンポイントアドバイス】**



主人公1人なので仲魔は絶対に連れていこう。特に攻撃魔法（衝撃系）を使える「ガンダルバ」あたりがいい。回復系の魔法を使える仲魔も重要。戦闘終了後ギロチンアクスを入手できる。

青い怪人は黙ってぼくを見つめていた。と、いきなり両腕をひろげた。

炎の渦が押し寄せた。

「…そういうことか」

なんだか知らないが、戦い取れということらしい。

仲魔を使えるのがさいわいだった。相手の攻撃を封じなくては手も足も出ない。仲魔の一体が電撃を放つ。ぼくが青い怪人に斬りかかる。別の仲魔も攻撃に加わる。何度か繰り返すうちに、怪人の姿は揺らぎ、もやもやした光と見分けがつかなくなっていた。

やがてその青い光も消え、あとに斧[※3]が残された。

しばらくすると、今度は赤い光が浮かびあがった。やはり人のかたちをとっていく。

※3・斧
ギロチンアクスだ。属性がカオスの者だけが装備出来る。

## 超人赤怪人出現！

ＬＶ32・ＨＰ320・ＭＰ60・使用魔法　ザンマ／ディアラマ／マハザンマ

【パーティー】

●ショウ　ＬＶ25・装備　めいとうこてつ／ＭＰＳマシンガン／ショットシェル／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／ライダーブーツ（※前回の青怪人戦と装備は変わらない）

【仲魔】

●ハクタク（タンキ＋ツチグモ※タンキ、ツチグモは金剛神界に出現）

●アメノウズメ（アンドラス＋ジャックフロスト＝エンジェル、エンジェル＋ジャックランタン＝アメノウズメ）

●ガンダルバ（金剛神界に出現）

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・ハクタク／攻撃・アメノウズメ／攻撃または回復魔法ディアラマ・ガンダルバ／攻撃魔法（ジオ）をかけ続ける

**【ワンポイントアドバイス】**
青怪人よりもＨＰが10多いだけで強さはさほど変わらないが、ディアラマを使えるのでやっかい。戦闘終了後ひかりのこだちを入手。

この相手も敵意をあらわした。見えない波がぼくを容赦（ようしゃ）なく跳ねとばした。
やはり仲魔の助けが必要だった——。
赤い光が消えたあとには小太刀があった。
ぼくは斧と小太刀※4を行者の前に置いた。
「すんなりと譲ってくれたか？」
行者は言った。ぼくは首をふった。行者は笑みを浮かべた。
「この二つがほしいかの？」
ぼくはもういちど首をふった。斧も小太刀も、強く握ると電流に触れたような痛みが走るのだ。そう言った。
「おまえたちはどうじゃ？」
トシキとテツオはためらいがちに手をのばした。それぞれ一度だけ顔をしかめた。
「それを携（たずさ）えるがいいぞ」

トシキが赤い怪人の小太刀を、テツオが青い怪人の斧を手にしたとき、行者は言った。
そしてぼくの前には別の太刀※5を置いた。
「おまえにはこれをやろう」
ぼくたちはこのなりゆきを神妙に受け入れた。
「さて」と、行者はうなずいた。「そろそろ戻してやるかの。※6よいか、世界がどう変わり果てていようと驚くでないぞ」
その言葉が終らないうちに、霧がうずまきはじめ、輝きを帯びてぼくたちをつつみこんだ。あの閃光のあとに起きた強引な浮遊感。
行者の声が遠ざかる。
「悪魔を使いしものよ。みずからの意志で操ってはいても悪魔の影響を受けるということを忘れるな——」

■追加戦闘データ

## ゼンキ、ゴキ

【金剛神界を離れるときに遭遇】

※4・小太刀
ひかりのこだち。属性がロウの者だけが装備可能。

※5・別の太刀
みかづきのたち。主人公に装備させよう。

※6・そろそろ戻して……
金剛神界から出る前に、ゼンキ、ゴキと戦闘になる。データ99～100ページ参照。

●ゼンキ　LV32・HP340・MP80・使用魔法　ジオンガ／かいしん／ラクカジャ

●ゴキ　LV32・HP290・MP70・使用魔法　メディア／マカジャマ／タルカジャ

**【パーティー】**

●ショウ　LV26・装備　みかづきのたち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

●トシキ　LV26・装備　ひかりのこだち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

●テツオ　LV26・装備　ギロチンアクス／M16ライフル／神経弾／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／コンバットブーツ

**【仲魔】**

●ハクタク（タンキ＋ツチグモ）

●モムノフ（アプサラス＋ツチグモ※アプサラス、ツチグモは金剛神界に出現）

●ガンダルバ（金剛神界に出現）

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・ロウヒーロー／剣で攻撃、もしくは回復魔法（ディアラマ）・カオスヒーロー／剣で攻撃・ハクタク／攻撃または回復魔法（ディアラ

マ）・モムノフ／タルカジャを3～4回唱えたあと攻撃・ガンダルバ／ゴキにずっと攻撃魔法（ジオ）を唱える

**【ワンポイントアドバイス】**

この2体の特徴はゼンキが力、ゴキが魔法での攻撃が多いこと。まずはゼンキを倒しておくとHPの減りが少なくてすむ。

NEUTRAL DATA FILE:9▶KONGO-SHINKAI

# 金剛神界

## 攻略手順

「金剛神界でエンノオヅノに会う。ロウヒーロー、カオスヒーローに再会する」⬇「エンノオヅノに頼まれてソーマを2回取りに行く」⬇「青怪人、赤怪人の所で武器を入手（青怪人ギロチンアクス、赤怪人ひかりのこだち）」⬇「エンノオヅノからみかづきのたちを受け取る」⬇「金剛神界の出口でゼンキ、ゴキと戦闘」⬇「エンノオヅノに破壊後の新宿に戻してもらう」

青怪人がカオス、赤怪人がロウの属性関連イベントになっている点に注意。どちらとも戦闘になれば主人公の属性はニュートラル。

# 【第10章】大破壊後の新宿

「……みなさん、神を信じるのです」
オーロラビジョンは恍惚の表情を浮かべた女を映しだしていた。
「地上の楽園、千年王国がみなさんを待っています。神への愛を忘れなかったものだけが千年王国へ行けるのです……」女は繰り返し言っていた。「……神を信じて生きていくことがわたしたちの務めなのです。今から三十年前、世界は大破壊に見舞われました。三十年前の大破壊は神によって与えられた試練なのです。試練を堪え忍び、神を信じ続け、せいいっぱい生きてきたみなさんの力によって世界は復興の兆しをみせています。神を信じることが……」
ぼくたちは取り憑かれたように聞き入った。事実をのみこむまで、繰り返し、繰り返し。
三十年前の大破壊？　三十年！　あれから三十年がたった!?　ぼくたちにとってはつい昨日のことなのに!?
地獄絵を予想していた。ビル群は瓦礫の山と化し、ねじ曲がった鉄骨や溶けたガラスのあいだを、生き残った人々がうめき声をあげて這いずっている…。
そんな生々しい光景は眺めずにすんだ。なにもかも灰塵と化したわけではない…。
むしろ意外な風景にとまどった。奇跡的にそびえ立っている都庁のビルが目に入ったし、ぼくたちが立っていた場所には緑すら残っていた。そこが代々木公園だということを思いだすのに時間はかからなかった。

人間はまだ滅びておらん…たしかにそのとおりだった。
「よお、ちょいと恵んでくれよ、なんにも食べていないんだよ、なあ…」
みすぼらしい格好の男がしつこくつきまとってきた。トシキが金をいくらかさしだすと、男は怪訝な顔でそれをまじまじと見つめた。
「なんだ、こりゃ?」媚びた笑いが引っ込んだ。「にいちゃん、からかうなよ。マッカ※1だよ、マッカを恵んでくれよ」
「…マッカ?」
ぼくたちは顔を見あわせた。男はぼくたちをじろじろ見ながらようすをうかがっていた。強気に出たものかどうか考えていたのだろう。たぶんぼくたちの装備を値踏みしたのだ。やにわに金を投げ捨て、後ずさりしながら毒づいた。
「悪魔にやられちまえ!」
なにがなんだかわからなかった。
新宿へやってきて謎が解けたのだ。世界がどう変わり果てていようと驚くでないぞ…。そう、破壊の爪痕にはそれほどたじろぎはしなかった。もっとひどい風景を予想していたからだ。だが三十年の時を越えてしまったのだという事実は、ぼくたちをひどくうちのめした。ぼくにしてもトシキにしても、それぞれのアオイのことを考えると絶望的な気持ちになった。
それにしてもこの世界はいったいどうなったのか?
人々はシェルターがわりになった地下街に住みつき、地上は悪魔のものにな

※1・マッカ
この時代の通貨。

## 「破壊後のトーキョウ」

人々はシェルターがわりになった地下街に住みつき、地上は悪魔のものになっている——つまり、ゴトウが目指していた人間と悪魔が共存するという世界が到来しているのだ!

っている――つまり、ゴトウが目指していた人間と悪魔が共存するという世界が到来しているのだ！

街では〝私設警察〟※2なるものが目を光らせていた。人々は言う、彼らは悪魔と協約があり、だからここでは無事に暮らせるのだ、と。無事に！　〝私設警察〟はサイコダイバーと呼ばれる特殊な人間を使い、彼らに異を唱えるものを洗脳するという。それが悪魔との共存というわけだ！

ＩＣＢＭというかたちをとった神の大破壊はいったいなんだったのか？

ガイア教徒が言っていた――。

「今や恐怖と暴力が支配する世界となった。力こそすべてなのだ。だが神にはそんな力などない！　その力を持つのは唯一ルシファー※3さまのみ！」

一方、メシア教徒たちはこう言っている――。

「夜明けが近づいて来ました。試練のときは終ろうとしています。わたしたちの聖地、地上に降り立つ神の玉座、カテドラル※4ができあがるのです。カテドラルができあがれば、神の治める千年王国が現実のものになるでしょう……」

救世主の噂もあった。渋谷にいるとかいないとか。メシア教徒たちは新宿を出て行きたがっていた。だが私設警察が許さない。

トシキとテツオがどう考えたかはともかく、ぼくはメシア教徒たちにほとんど同情できなかった。もちろん〝悪魔との共存〟を喜んだわけではないが。ミサイルはぼくの選択をきっかけにこの都市に襲いかかった。もちろん今となっ

---

※2・私設警察
オザワは悪魔との密約によって新宿を手中に治めている。彼の下僕となり街をわがもの顔でのし歩いているのが、彼の部下達である私設警察だ。

※3・ルシファー
悪魔サイドの統治者。カオス教徒達（悪魔）は彼を地上に呼ぶことで、神のカテドラル建設を阻止し、地上を悪魔のものにしようとしている。

※4・カテドラル
神によって選ばれた人のみが暮らす神にとっての理想郷。この目標の達成がメシア教徒たちの願いとなっている。

ては、ぼくがあのときもっとましなことができたとは思わない。破壊はあらかじめ準備されていたのだ。いわば、神のやり口を見せつけられたわけだ。メシア教徒たちが言うように、これを試練だなどと思えるはずがない。

結局、人々はいっそう無力になっただけなのではないか？　三十年のあいだになにが変わって、なにが変わらなかったのか？　なにが正しくなにが間違っているのか？

街を徘徊（はいかい）しながらいろいろなことを聞いているうちに、ぼくはすっかりわからなくなっていた。

ともあれ、まっ先に立ち直ったのはテツオだった。彼はある事実を知ると、たちまち自分のなすべきことを見いだした。私設警察なるものを仕切（しき）っているのは〝オザワ〟だという事実——。

NEUTRAL DATA FILE:10▶SHINJUKU AFTER THE DESTRUCTION

# 大破壊後の新宿

## 攻略手順

「乞食に出会って通貨が￥（円）からマッカに変わっていることを知る」⬇「アルトビルのスクリーンに映し出されたメシア教徒の話を聞いて、大破壊から30年がたっていることを知る」

再び地上に戻った主人公たち。ここではさらなるレベルアップが必要になってくる。またそろそろ属性も大事になってくるところ。属性によって、各イベントに出てくる登場人物の応対が変化したり、仲魔になってくれない悪魔が出てくる。イベントによって、属性が変化することは以前にも触れた。イベント以外に属性を変える方法は2つ。1つは街にあるメシア教会、カオス神殿それぞれにおいて寄付をする方法。もうひとつは自分が仲魔にしている悪魔と同種の悪魔に遭遇したとき戦って倒す方法。イベントはロウ寄りのものの方が多いので、戦闘でこれを補ってやろう。

## 【第11章】――カオスヒーローテツオ

「やつに違いない。やつなら生きのびてるさ。悪魔と手を結んでいるんだからな」

かつて…そう、三十年前、すでにオザワは悪魔を召喚できるようになっていた。ぼくたちにとってはつい昨日のことのようなものだったから、ひと泡くわせてやろうとして失敗したあのときのことを、テツオが忘れるはずもなかった。

「いつかゴトウにとってかわる、そう言ってたからな。そいつを実現したんだ…ちくしょう！　やつとはどうしたって決着をつけてやる」

テツオはあらためてオザワに対する執念を燃えあがらせた。

一方、トシキはトシキで使命感みたいなものを取り戻していた。

「私設警察の存在は人々を苦しめています」

「でも彼らがいなくなれば悪魔が…」

どうせ同じことだ、と言いかけた。このときぼくはかなり無気力な状態に陥っていた。破壊後の状況を知って落ち込んだせいもあるのだが、直接の原因は別にあった。この世界に戻って以来、奇妙な現象[※1]に悩まされていた。ときどき女の悲鳴が聞こえるのだ。助けを求めるような苦しげな声。一定の間隔をおい

---

※1・奇妙な現象
満月ごとに主人公に起こる。ダメージを受ける。

て聞こえてくるのだが、トシキにもテツオにもそれは起きなかった。ぼくの頭のなかだけに届くのだ。それがはじまると、頭が麻痺したようになり、何にも立ち向かう気がおきなかった。
　そういうわけで、ぼくはいささかなげやりになっていた。だがトシキはきっぱりと言った。
「戦うんです」
　あらためて三十年という時を越えたことを思い知った。たしかにぼくたちとそう歳は違わなかったはずだ。ところが目の前にいるのは、白いものがまじった髪をなでつけた中年の男。
「まったくわけのわからない小僧どもだな」
オザワ※2は露骨な尊大さでぼくたちに対し、もちろん、テツオをおぼえていなかった。
「さっきからなにをごちゃごちゃ言ってやがる？　よそから来たのか？　なら、私設警察をチンピラなどと抜かしたことは大目にみてやろう。どうせメシア教徒どもにそそのかされたのだろう。いいか、ここではな、わたしに従っているかぎり、悪魔の餌食にならずに暮らしていける。けっこうじゃないか。え？　やつらとうまくやってなにが悪い。おかしなだだをこねていないでとっとと失せろ。それともわたしの下ではたらきたいというのなら――」

※2・オザワ
新宿地下街の旧ヤクザビルにいる。

「ふん」

テツオはじれったそうに顔をゆがめた。

「歳だけはくっても中味は変わっちゃいねえな。自分より強いやつにくっついてはうまいこと立ちまわるってやりかたは」

かつてのライバルは街ひとつの支配者然としてふんぞりかえっている。トシキにしてみれば悪魔と手を結んでそうしているということが許せないのだが、テツオは相手が自分より上にいるのがただ我慢できない。

「結局、使いっぱしりにゃ変わりねえんだ。あいかわらずだぜ」

「なんだと？」

いかにもガキっぽい挑発の言葉にどれだけ煽られたかはともかく、オザワはあらためてテツオを見つめた。尊大に構えた態度とともに三十年の時が剝がれ落ち、以前対峙しあったときのようなむきだしの敵意があらわれた。たぶん思い出しはしなかったのだろうが、あのときと同じようにテツオが発散する憎悪を敏感に嗅ぎとったのだ。

彼らは同類だ。

「どうも気にくわねえな。ガキだと思っていいかげんにあしらってりゃ……いいだろう。教えてやろう。わたしに逆らうとどういうことになるか――」

オザワは悪魔を召喚した。

結果を言うと、オザワが呼びだした鬼神の前に、ぼくたちはほとんど手も足も出なかった。たしかにぼくたちは以前より力を蓄えていた。だがオザワもまた格段の力を操るようになっていたのだ。

テツオの激憤は言うまでもなかった。
たとえばそれを悪魔のささやきというのだろう。冗談にもならない。だが、テツオのなかでなにかがささやき、それは信念となって彼を支配してしまった。テツオが目をぎらぎらさせながら、そのことを言いだしたとき、ぼくもトシキも唖然とするばかりだった。
「どうして今まで気がつかなかったんだろう…そうだ…あれしかない…やつを凌ぐにはそうするしかないんだ！　おい――」
テツオはぼくの肩をつかんで激しくゆすぶった。
「おれにあれをやってくれ」
「…あれとは？」
「合体だ…合体するんだよ！　悪魔の力を宿すんだ」
そう言って、テツオはもうすでにそれを遂げたかのようにうなずき、凄味のある笑みを浮かべた。ぼくたちはしばらく返す言葉もなかった。
「なんてことを…」
トシキはようやく立ちなおり、次に憤然として諭しにかかった。
「人間の魂を捨ててしまうつもりですか？　それじゃ、あのゴトウと同じじゃないですか!?　なにもそこまでしてオザワを…。彼は自分が力を手に入れたつもりだが、結局、悪魔に操られているのですよ。真の敵はオザワなんかじゃなくて――」
「そいつにさえ手も足もでないじゃねえか、おれたちは――」テツオは拳をふりあげた。「真の敵もへったく

れもあるもんか！　おれは神頼みしか能のないメシア教徒や、そこいらのクズどもみたいにびくびくしながら生きたくはない。力がほしいんだ。悪魔が牛耳っているこの世界を自分で生き抜く力が。それも手っとり早く。そのためだったらなんだってしてやる。ショウ、おまえだって悪魔を使ってるんだ。どっちみち同じことだろ？　おれが自分の体にそれを宿してなにが悪い。おまえがそうするようにおれが悪魔の力を使ってなぜいけないんだ？」

ぼくは黙っていた。もちろんショックを受けた。だがトシキのように非難をこめて反論する気にはなれなかった。

「ショウ！」

トシキはすぐに反応を読み取って、ぼくにも非難のほこさきを向けかけた。

「まさか――」

「そうじゃない――」ぼくは首をふり、迷いながら自分の気持ちを口にした。「実際…ぼくたちは無力だ。それはテツオの言うとおり。このままだとなにもできない。なにかするとしてだけど。ぼくにはなにが正しいのか正しくないのかわからない。だけど――」

もしぼくが断われば、テツオはどんなことをしてでも他に方法を見つけるに違いないと思った。

それならばぼくが見届けなければいけない。そんな気がした。ぼくに選択が委ねられているのだ。それはあのトールマンのときと同じ痛烈な後悔を招くのかもしれない。だが宿命なのだ。テツオの望みをかなえてやるのが今のぼくの務めなのではないか…。

「たぶん、ぼくたちはそれぞれの道を与えられているんだと思う」

そう言ったとき、金剛神界でのことは重要な暗示だったのだと気がついた。ぼくには持てなかった武器を、

トシキとテツオはそれぞれ手にしたように。テツオは目覚めた。おそらく、オザワへの執念は、じつは、力への率直な憧憬と渇仰なのだ。テツオのなかにあった性質がはっきりとその方向を定めたのだ。

トシキがどこまで納得したかは知らない。けれどもぼくたちのあいだにある霊感的なひらめきがはたらいて、それ以上の反発はむだだと悟ったに違いなかった。

やがて突き放すようにぽつりと言った。

「後悔しますよ、かならず」

「懲りないようだな」

そううそぶいたものの、オザワはたちまち強い警戒を示した。

「ただのガキじゃあないらしいが、おれにとってかわろうなんてことは…」

テツオを見つめながら後ずさりしていた。テツオのようすはそれほど異様だったのだ。もう以前の彼ではない――。

邪教の館。

魔方陣の中にテツオは立った。

そのとき仲魔のストック※3は八体あった。そのなかからテツオは妖鬼モムノフを選んだ。怨念を残してこの世を去った人間の魂を、かつては鬼と呼んだ。

※3・仲魔のストック
カオスヒーローは、この時点でストックしている仲魔の中から1番レベルの高い悪魔を自動的に選ぶ。

## 「カオスヒーロー誕生」

テツオの背後に古代の戦人の姿があらわれた。だがそれは一瞬のことで、すぐにひとかたまりの妖しい光輝となってテツオをつつんだ。テツオは火中の立木のように見えた。異界の力が収束した。

怒りや怨念は強いエネルギーとなる。妖鬼モムノフはそんな力によって魔界に転生した存在だ。ぼくはそれを呼びだした。

テツオの背後に古代の戦人の姿があらわれた。だがそれは一瞬のことで、すぐにひとかたまりの怪しい光輝となってテツオをつつんだ。テツオは火中の立木のように見えた。

異界の力が収束した。テツオは目を閉じたまま、息を大きく吸いこんだ。そしてそんなことができるのが驚きだとでもいうように、たっぷりと間をおいてから吐きだした。

「そうか……こういうことだったんだ……おれのなかに闇がある……闇の奥には……」

テツオは思いだしたように目をあけた。

「後悔だって?」彼は笑った。「これを――?」

ぼくはあのゴトウの目を思いだした。テツオは力のありかを探りあてたのだ。

オザワが例の鬼神を呼び出すのはわかっていた。鬼神が剣をふりかざすと稲妻が飛び交い、それがぼくたちを打ち倒すのだ。

だが今度は遅れをとらなかった。ぼくはすぐさま仲魔を呼び出し、鬼神があらわれると間髪を入れずに攻撃に出た。テツオはあらたに得た力をまだ扱い慣れていなかったはずだ。それでも彼の銃撃は異様な力を帯びていた。

## 鬼神タケミナカタ登場！

LV43・HP560・MP50・使用魔法　シバブー／ブフーラ／マハジオンガ

【パーティー】

●ショウ　LV26・装備　みかづきのたち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

●トシキ　LV26・装備　ひかりのこだち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

●テツオ　LV26・装備　ギロチンアクス／M16ライフル／神経弾／フルヘルム／ケプラーベスト／リベットナックル／コンバットブーツ

【仲魔】

●ハクタク（タンキ＋ツチグモ）

●モムノフ

●ブッカブー（2Dフィールド、金剛神界に出現）

**【攻略法】**

ショウ／ガンでの攻撃・トシキ／ガンで攻撃・テツオ／魔法で攻撃・ハクタク／攻撃・モムノフ／タルカジャをかけ続ける・ブッカブー／魔法（マハーブフ）をかけ続ける

**【ワンポイントアドバイス】**

カオスヒーローの攻撃魔法が戦いの中心。これに回復魔法、補助魔法を絡ませて戦うのがベスト。長期戦になることは必死。HPに注意しながらの戦闘が大切だ!!

再度の対決はぼくたちが競り勝った。

鬼神は消えた。

「なんてこった…」

オザワは色を失った。しばらくぼくたちを眺めるばかりだった。やがてへつらうようにしどろもどろしはじめた。

「わかった…言うとおりにする…おまえたちの好きなようにすればいい…」

守護神を撃退されたのだ。ぼくたちの前になすすべはない。オザワは情けないほどあわれな男に堕ちていた。

テツオはついに勝ったのだ。ところが——。
　テツオの敵意はいささかもゆるんでいなかった。
「待てよ…」
　ぼくはあわてて腕をつかんだ。トシキもまたテツオの意図に気がついていた。
「彼は悪魔に利用されていた愚かな人間です。いまとなってはもうあなたの敵じゃない——」
「だから？」
　テツオの声は乾いていた。彼を止められない…このときぼくは悟った。
「だから…」たじろぎながらもトシキは叫んだ。「ほおっておけばいいでしょう！」
「見逃せってか？」テツオはぼくたちを見くらべた。「おまえら甘いぜ。ここでへたに情けをかけたらどうなるか…こいつがどうするかわからないのか？　おれなら悪魔と契約しなおすね、もっと大きな力をくれって——」
　テツオはためらいもせず銃をかまえた。
「やめてくれ——」
　悲鳴は血反吐に押し流された。

「おれたちは別れたほうがよさそうだな」
　テツオは言った。トシキは硬い表情で口をつぐんだままだった。テツオはちょっと肩をすくめてみせ、ぼくに向かってはまるで校門を出たときのように手を振った。
「ショウ、生きていたらまた会おうぜ」
　テツオは自分の道を歩みはじめたのだ。

# カオスヒーローテツオ

NEUTRAL DATA FILE:11▶CHAOS:HERO

## 攻略手順

〔新宿地下街をうろつく。街は破壊前と同じ様に残っている〕⬇〔3つあるバーの一番北のバーで、古銭収集家の老人に¥をマッカと交換してもらう（少額のマッカしかもらえない）〕⬇〔D－SCOの地下でオザワの話しを聞く〕⬇〔B2Fで精神をいじれるサイコダイバーに出会う〕⬇〔オザワと出会う。オザワが召喚したタケミナカタと戦闘になるがかなわずに撤退する〕⬇〔テツオ悪魔との合体を望む〕⬇〔邪教の館に行きテツオと悪魔を合体させる〕⬇〔再びオザワの所に行き、タケミナカタと戦闘。オザワを倒す〕⬇〔ひとつの目標を達成したカオスヒーローは、新たな力を求めて主人公達のもとを去る〕

いよいよカオスヒーローが宿敵と対決。そして去ってしまう。タケミナカタとの戦闘の後のオザワとの会話が属性イベント。オザワを許さない（カオス）、カオスヒーローにオザワのとどめをさせない（ロウ）と答えることでニュートラルで進める。情報やイベントをもとにして、自分の立場や回りの状況を確認しておくことも大切だ。

# 【第12章】——転生

渋谷に行こうと言いだしたのはトシキだった。新宿のメシア教徒たちはオザワが倒れたのを知ると、次々に渋谷へ移動しはじめていた。救世主がいるという噂があったからだ。じつのところ、ぼくには興味がなかった。というより、頭のなかに聞こえてくる声はますます切迫したものとなり、そのピーク時にはほとんど廃人のような状態に陥った。しかもテツオとの劇的な別れはやはり重く、そうするしかなったのだと思いながらも、迷路に踏み込んだような不安といらだちがあった。一方、トシキはそれにきっぱりと決別し、あらたな目的を見いだそうとしていたのだ。ぼくはトシキに引きずられるように渋谷へ向かった。

意外なことが待っていた。

「カテドラルの完成が待ち遠しい」

「神が降り立たれるのです。カテドラルができあがれば平和な世界が訪れるでしょう。まもなくできあがるということです」

「場所はメシア教徒以外にはお教えできません」

「すぐにも行きたいのですが、六本木の結界が解けなければ…」

「カテドラルの完成には救世主さまの力が必要です。ところが救世主さまが…」

渋谷にはメシア教徒たちがひしめき、神の救いの手がさしのべられるのをひたすら待ちのぞんでいた。

彼らは救世主に悪魔がとりついてしまったのだと言った。トシキはメシア教会に寄付することで、地上二階にある教徒の集会所のような場所を聞きだした。

「きみがショウくんかね?」

入り口の脇にうずくまっていた男が声をかけてきた。

「やっと来てくれたか」

やれやれ、と腰をあげた男の背丈は人並の半分ほどだった。見覚えはない。

「オザワをやっつけたのはきみたちだろう? おかげでわたしは自由になれた。すぐに新宿を出たのだが、お手あげだ。きみを待っていたのだよ」

男はぼくたちの当惑にかまわず喋り続けた。その話はまるでぼくたちが前から知っていることを繰り返しているみたいに断片的なものだったので、はじめはなんのことだかわからなかった。

「相手はここにいる娘…メシア教徒たちのいう救世主さまだった。精神を冒されているのだよ。わたしにはずっと助けを求める声が聞こえていた。だがわたしにではなかった。きみに、だ。わたしはサイコダイバー※1だから聞こえていたのだ」

「サイコダイバー?」トシキが険しい顔でさえぎった。「じゃあオザワの…」

人の精神をいじっていたという超能力者。「しかたがなかった」

---

※1・サイコダイバー
彼を救い出さなければヒロインの精神に入ることは出来ない。彼は新宿地下街B2Fの牢屋に監禁されている。オザワを倒していれば助け出すことが可能。ヒロインに会う前ならレジスタンスのバーに行ってしまうが、バーで対面すれば渋谷に向かってもらえる。ヒロインに会っていれば直接渋谷に向かってくれる。

男はあっさりとうなずき、わかるだろう？　というふうに肩をすくめた。

「そんなことより――」サイコダイバーはぼくの腕をとった。「早いとこなんとかしなけりゃいかん。じつは彼女の頭のなかに悪魔が入り込んでいる。彼女はたしかに人並以上の力を持っていて、懸命にそれと戦っている。だが限界だ。悪魔は徐々に彼女を乗っ取ろうとしている。わたしの力ではそれをどうすることもできん。ちょいとのぞいて見たんだがね。彼女はきみを呼んでいる。きみなら彼女を助けてやれるはずだ」

「ショウ…」

全身を電流が貫いた。はっきりとぼくの名を呼ぶ声が聞こえたのだ。

トシキが驚いてふりむいた。

「どうしたんです？」

「彼女だ…」

ぼくは奥の部屋に飛びこんだ。

〝救世主さま〟が縛られていた。

「ひどく暴れるのです」

メシア教徒の女がつらそうに言いわけした。

三十年の時のことを思い浮かべもしなかった。どういうからくりがあろうと、それは彼女に間違いなかった。

ぼくは震える声で呼びかけた。

「アオイ――」

サイコダイバーが転がるように追いついてきた。

「外からではだめなのだ。わたしが彼女の精神をひらく。きみがなかに入るのだ。そうして悪魔の力を追い出

せ――」
　ぼくの目をのぞきこんだ。
　ぐっとなにかにつかまれるのを感じた――サイコダイバーの目のなかにぼくが映(うつ)っていた。そのぼくの目には縛られた救世主が映っていた。そんなふうに感じた。ふたつの視野(しや)がめまぐるしく入れかわり、一瞬(いっしゅん)、魂(たましい)が抜けたようにたたずんでいる自分の姿が見えた――。

# 転生

## NEUTRAL DATA FILE:12▶TENSEI

### 攻略手順

【渋谷に行きメシアと呼ばれる少女（ヒロイン）に出会う。少女は悪魔に精神を乗っ取られかけている】⬇【新宿に戻ってサイコダイバーを助ける。先に渋谷に行っていると主人公達に告げて、サイコダイバーは去る】⬇【渋谷に戻る。サイコダイバーと共に少女の精神世界に入る】

ヒロインが登場。属性イベントはないが、精神世界での戦闘に備えて出来るだけレベルアップしておこう。アルケニーのところにいくまでに、三ヶ所のワープポイントがあるので現在位置を確認しながら進もう。途中でメシアの少女の記憶の断片が垣間(かいま)見れる部屋が何ヶ所かある。彼女が三十年前のレジスタンスのリーダーの生まれ変わりだとはっきりと解るぞ。

# 【第13章】――精神世界

心の奥には記憶の小部屋の迷宮がある――そんなたとえ話を聞いたことがある。とすれば、これはぼくのイメージか、それとも心の主のイメージなのか。

いくつもの部屋をさまよい歩いている。

部屋はひとつとして同じようすのものがない。

暗闇。夏の輝き。月明り。黄昏時の窓の外。さまざまな色彩。匂い。音。寺院の回廊のような静謐。街路のざわめき。遠い雷鳴。花壇。十字架。ぶあつい書物。貝殻。オルガン。サーチライト。鏡。長い影。奇妙な動物。祈りの唱和。

そういった無数の暗喩にこめられたささやかな秘密。心の主のほかうかがい知れない記憶の断片。喜び。悲しみ。希望。不安。ぼくはその輪郭だけをおぼろげに感じ取る。

けれども、そこに入り込んだだけで強烈なビジョンをもたらす部屋がある。

魔方陣、祭壇、仮面の司祭――あの夢のなかでのぼくとの出会い。

ユリコ。広場。ゴトウ。トールマン。閃光。

ぼくのそれと重なる鮮烈な記憶。まぎれもなくぼくはアオイの心のなかをさまよっている――。

「深く…もっと奥だ…心のいちばん奥底へ…」

サイコダイバーの声が聞こえる。いや、耳に届くというより自分の心のなかの声として。ぼくの心のなかに

彼の心の一部がもぐりこんでいる。そうしてアオイの心へ入りこんだのだ。
心の深奥部がどこなのかぼくにはわからない。サイコダイバーに導かれるまま、無数にあるかに思える小部屋を通り抜けていく。
からっぽの部屋がある。
虫やネズミさえ逃げだした廃屋のよう。なにもない。だがかつてそこにあったものの名残を感じとれる。だからいっそうぞっとする空虚さ。
奇怪な部屋がある。
歪んだ壁。裂けた床。深淵にうごめく炎。不気味な影。記憶の断片は恐ろしいかたちに変貌している。
『悪魔が冒したのだ…』
彼女は並はずれた意志を持っている…サイコダイバーはそう言った。彼女は入り込んだ悪魔たちと懸命に戦っている、と。それでも多くの部屋が空虚と恐怖の場所に変えられていた。
『近づいたぞ…』
目の前に思わぬ光景がひろがった。
礼拝堂のようだ。ステンドグラスが七色の光をかもしだし、ふたつの人影をやわらかくつつんでいる。祭壇の前に修道女とおさない少女。静寂と平穏が満ちている。
修道女が話しかけている。
「…いいですか？　あなたは選ばれた人間なのです。神を失って荒れはてた世界の救世主となるべく生まれてきたのです。メシアとなって人々を神のもとに導くのが定め…あなたの魂の定めなのです。それは容易なことではありません。でも…それを実現するためにあなたはなんどでも生まれ変わるのです…」

## 少女の精神世界

心の奥には記憶の小部屋の迷宮がある――そんなたとえ話を聞いたことがある。とすれば、これはぼくのイメージか、それとも心の主のイメージなのか。いくつもの部屋をさまよい歩いている。

少女は椅子に腰をかけている。足が床に届かないほど幼い。それでもひたむきな目でじっと見あげている――。
そのとき不気味な声が平穏を破った。
「しぶといね。これだけ痛めつけてやったというのに」
高さの知れない天井からとどろいたとも、耳もとのささやきとも思える響きだった。それと同時に礼拝堂は積木細工のようにぐらぐら揺れた。ところが少女も修道女も、それにまったく気がつかないかのようにこおりついたまま。
戦慄をおぼえる異様な光景――ステンドグラスが次々と割れていく――いや、そうではない――光景そのものが鏡に映ったものだったかのように、こなごなに砕け、無数の破片となって飛び散ったのだ。
悲鳴がこだました。アオイの叫び――このとき、ぼくがずっと聞いていた悲鳴はほんのもれ聞きにすぎなかったことを知った。長い、苦痛に満ちた叫びはぼくの心をえぐった。というより、いまやぼくは苦痛そのものを感じていた。心を冒される耐えがたい苦しみ。
ぼくもまた身をよじって叫んでいた。
部屋は廃屋同様の薄暗い場所に変わっていた。
ぼくはそろそろとあたりを見まわす。祭壇のあったところに巨大な蜘蛛の巣が張りめぐらされている。と、ふたたび不気味な声。
「だれか入り込んだな?」
蜘蛛の巣がゆれ、なにかがつたい降りてきた。

## 鬼女アルケニー出現！

LV48・HP700　MP90・使用魔法　ドリミナー／マリンカリン

【パーティー】

●ショウ　LV33・装備　みかづきのたち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード、／サイバーアーム／ジェットブーツ

●トシキ　LV33・装備　ひかりのこだち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

【仲魔】

●パピルザグ　（ブッカブー＋ネコマタ＝ユニコーン、ユニコーン＋モムノフ＝ストーンカ、ストーンカ＋ドワーフ＝パピルサグ※ブッカブー…渋谷周辺の2DMAP上に出現、ネコマタ…新宿のヤクザビル周辺に出現、モムノフ…新宿のヤクザビル周辺に出現、ドワーフ…渋谷の街に出現）

●シトリー　（新宿のヤクザビル2Fに出現）

●エルフ（渋谷の街に出現）

**【攻略法】**

ショウ／ガンで攻撃・トシキ／ガンで攻撃・パピルサグ／通常攻撃・シトリー／魔法（ラクンダ）をかけ続ける・エルフ／魔法（ジオンガ）をかけ続ける

**【ワンポイントアドバイス】**

ドルミナー・マリンカリンを使ってくるので、まめにガンで眠らせないとつらい。ラクンダで相手の防御力を下げつつ地道に攻撃するのがベスト!!

『かつて夢魔と呼ばれた悪魔たちは眠りのうちに人の心に入り込む。この娘は抵抗しているが、弱い人間ならたちまち支配されてしまう。そいつを追い払え――』

その悪魔の姿を、ぼくははっきりと認めることができなかった。蜘蛛の巣という背景が巨大な蜘蛛を連想させたのだが、じつはあいまいな影にしか見えていなかった。

「この娘の心にはひどく手ごわい部分がある。なかなか崩れない…それはおまえだったのか…」

悪魔はそんなことを言いながら、ゆらゆらと蜘蛛の巣をゆすり続けた。影のなかにうごめくかたちを見きわめようとして、ぼくはじっとそれを見つめていた。

ふと女の姿が浮かびあがった。
突然、ぼくは蜘蛛の巣にからめとられたアオイの姿を前にしていることに気がついた。
「ショウ…」
身をもがきながらアオイが言った。
「助けて…早くここへきてわたしを助けて…」
ぼくははっとして足を踏みだした。
『まどわされるな！』サイコダイバーの声が突き刺さった。『そいつは悪魔だぞ！　いかん…』
「ショウ、ずっと待っていたの…」
アオイは苦しげに訴えかけた。ぼくは引きよせられるように巨大な蜘蛛の巣のほうへと近づいていた。
『…いかん！』
サイコダイバーが思念を送りこんできた。
ぼくは剣をにぎりしめた。
「ショウ、やめて！　まさかあたしを…」
剣は鉛のかたまりのように重くなった。ぼくはふたたび邪悪な魔力に捕らえられた。
「さあ、もっとこっちへ…」
アオイは笑った。蜘蛛の糸が投光のようにぼくをつつみこんだ。
「ショウ…」
かすかな震え声。目の前にさまざまな光景がストロボのように浮かびあがっては消えた。アオイとぼくの記憶の断片。その一瞬ごとに、蜘蛛の巣に捕らえられたアオイは醜い姿にすり変わった。

『そうだ、そいつは偽物(にせもの)なんだぞ――』
ぼくは蜘蛛の巣のなかから腕をさしのべたアオイに向かって剣をふりおろした。

# 精神世界

## NEUTRAL DATA FILE:13▶PSYCHIC WORLD

### 攻略手順

【少女の精神世界の中。アルケニーと戦ってヒロインを救う】

少女の精神世界はワープゾーンがあってわかりづらい。注意が必要だ。マッパーやオートマッピング機能をフルに活用しよう。アルケニーとの戦闘は長期戦になる。鬼女なのでハマ系、ザン系の魔法が効果的。

# 【第14章】――アオイ

「あなたは救世主ではない、と?」

トシキはむしろ落胆を隠さずに問いなおした。

「ええ」

アオイは申しわけなさそうにうなずいた。

「救世主…たしかにそう言いきかされてメシア教徒の人たちに育てられました。それはたぶん、わたしの不思議な記憶…」

夢のなかからはじまるぼくとの出会いから閃光のなかでの別れまでのことを、アオイはいくつか数えあげた。

「そう、あれは本当にわたしの記憶だったのですね。夢だと思っていたのです。繰り返し繰り返し同じ夢を見ることがあるでしょう? わたしは幼いころからそれを口にしていたのです。それをメシア教徒の人たちは啓示だとみなし、わたしを救世主だと…」

「でも…それにしてもあなたはなぜ――」

トシキは言葉を探した。彼がなにを言いたいのかぼくにはわかった。だがどう言いあらわしていいのかわからないのだ。つまり、彼女はいったい何者なのか――。

「わたしにわかるのは…」

アオイはぼくのほうに向きなおった。

「あなたと運命をともにするために生まれてきたのだということ」

ぼくはふたたび（夢のなかでのことを入れれば三度目だ…）アオイを悪魔の手から取り戻していた。救世主であろうとなかろうと、ぼくは必ずそうしただろう。そうせずにはいられないはずだ。

別れる前にサイコダイバーはこう言った——彼女はきみが生きているかぎり転生し続ける。彼女はきみの一部でありきみもまた彼女の一部なのだ、と。たぶん、ぼくはそのことを知っていた…。

このアオイとの再会は、ぼくよりむしろトシキに決定的なものをもたらした。

自分はメシア教徒のいう救世主ではない、とアオイが言ったことで、はじめトシキは落胆した。彼は神による救済を願うメシア教に強く惹かれていたからだ。神の降臨を実現するには人々を導く救世主が必要だ——トシキのなかにそんな確信が芽生えたのはおそらくこのころだ。まだはっきりとは意識していなかったと思うが、トシキは自分の〝なすべきこと〟を求めていた。

彼は教会に寄付を重ね、神を迎えるというカテドラルについて聞きだそうとしたが、渋谷のメシア教徒たちもたぶんよく知らないに違いない。東のほうに建設中だということしかわからなかった。だがメシア教の拠点は品川にあるというので、そこへ行けばもっと聞きだせると思ったようだ。

ぼくたちは渋谷を離れた。

大破壊の後、東京の地形は大きく変わり、陥没と入り込んだ海水とで、いくつかの大きな島状に分断されていた。品川方面へ行くためには、六本木の近くにある地下道を使うしかないのだということを聞いていた。

六本木の街へ立ち寄ったのはむしろ気まぐれのつもりだった。ところが、そこできわめて重大な事がトシキに起きたのだ——。

「この街を仕切っているのは赤伯爵と黒男爵…悪魔は入ってこない※2しおれたちは永遠の命をもらってる…」

「どういうことでしょう…」

トシキが眉根を寄せながらそうつぶやいたとき、そばで飛び跳ねていた男が言ったのだ。

「ここはいいわよ」

つられたように周囲から声があがった。

「あんたたちも赤伯爵に会いな」

「ここへきて正解だったわ」

目を疑った。昔はディスコだった場所だ。かつてそうだったように、大勢がたむろしている。ぼくたちはすっかりめんくらい、あたりを見まわすばかりだった。

「これは…」

やがてアオイ※3がなにか言いかけた。そのときトシキがはっと息をのんだ。

「アオイ…」

「え?」

アオイがふりかえる。が、トシキは立ちすくんだまま瞬きも忘れている。その視線の先を突き止め、ぼくもあっと声をあげた。

「まさか——」

---

※1・六本木
渋谷から六本木へは地上ルートをとる。渋谷の街を出ると東の方角に30年前にICBMが落下した巨大な穴が見える。この穴の上部にそって時計まわりに進み、少し南下すると六本木の街が見える。結界が張ってあるので直接は入れない。左の海の脇にある出入口が街への入口になっている。

※2・悪魔は入ってこない
彼らが六本木の周りに結界を張り、街の中に悪魔が入ってこれないようにしている。

※3・アオイ
ゲーム中では、彼女はディスコの奥にある部屋に監禁されている。彼女との会話から、ここが死人の街で彼女自身も死人である事実がわかる。

隅のほうでぼんやりと壁にもたれかかっている一人の娘…隣家のアオイ!
トシキははじかれたようにかけだした。
「…アオイ!?」
少女はぼんやりとトシキを見あげた。どんな表情も浮かんでこない。
「トシキ…」ぼくはため息をついた。「そっくりだ…でも…」
あれから三十年たっているのだ。彼女もまた転生したとでも?
「まちがいない…彼女なんだ…どうしてぼくのことがわからない!? アオイ——」
トシキは肩をつかんでゆすぶった。彼女はやはり答えず、ぼんやりとされるままになっていた。そのうつろな瞳。ぼくはなにかぞっとするものを感じていた。だがそれをトシキに言う気にはなれなかった。
「だめ」
アオイが——ぼくのパートナーのアオイが——そっとトシキの腕をおさえて言った。
「魂がないの。彼女だけではないわ。ここにいるみんな…。わたしにはわかるの。みんな操り人形なのよ」
ぞっとする感じはそれだったのだ。この街にいる人たちのなにか妙な感じ。トシキもそれを悟ったのだ。ぶるぶると震えはじめた。アオイは痛ましそうに目をそらした。
そのとき娘の唇がかすかに動いた。
「はん…ごう…こ…」
「アオイ!?」
トシキはあわてて恋人の唇に耳を寄せた。
「はんごうこう…」

娘はきれぎれにつぶやいた。

「わたしを…救って…わたしの…魂を…」

反魂香[※4]のことはアオイが知っていた。メシア教会の祝福した特殊な香だという。

「悪魔に奪われた魂を解放する力があるといいます。でも――」

アオイは口ごもった。

「それで彼女を救うことができるんですね!?」

トシキはアオイのためらいに気がつかなかった。

「救う…」アオイはそっとつぶやき、それからいたわるようにトシキを見つめた。「ええ。彼女は救いを望んでいるでしょう」

トシキはふと眉根を寄せた。救いという言葉にこめられた深い意味を感じとったのだ。そのことを知ると、アオイはふたたび静かに口をひらいた。

「反魂香には悪魔に奪われた死者の魂を神のもとに導く力があるのです」

「死者…」

「彼女は死者なのです」アオイはむしろ冷淡に言った。「三十年前に死んでいるのです。魂は悪魔に奪われ、体だけが生かされている…」

トシキの顔からすべての感情が消えていた。問い返すまでもなく、彼はもう充分に理解したのだ。「…ほかに方法は?」

---

※4・反魂香
はんごうこうのこのイベントは属性に関係する。データファイル参照。

トシキは努力して言葉を押しだした。答えを知っていることはあきらかだった。
「魂を解放してあげないかぎり彼女は苦しみ続けるでしょう」
ぼくたちは長いあいだみじろぎひとつしなかった。
やがてトシキは立ちあがった。渋谷へ戻り、メシア教会の反魂香を手に入れるために。

「トシキ…」
つかのま娘の目は生気を得た。それがトシキにとってなぐさめになっただろうか。彼は無言のまま恋人の手をとった。
だが長くは続かなかった。娘のからだはあっというまにひからびて、ひとにぎりの灰になってしまった。トシキはそれをじっと見つめた。
「やっと彼女は昇天できた…」
やがてうつろな声でつぶやいた。
「ええ。あなたのおかげで彼女は救われました」
アオイが言った。

## 昇天するアオイ

「トシキ…」つかのま娘の目は生気を得た。それがトシキにとってなぐさめになっただろうか。彼は無言のまま恋人の手をとった。だが長くは続かなかった。

NEUTRAL DATA FILE:14▶AOI

# アオイ

## 攻略手順

【ヒロインが仲間になる】↓【渋谷のメシア教会に1000マッカずつ10回寄付する】↓【月が2周まわったらメシア教会が完成する。はんごうこう購入】↓【六本木で主人公の隣家の少女（ロウヒーローの恋人）を助ける（はんごうこう使用）】

ロウヒーローの彼女の魂を救うロウイベント。はんごうこうを購入するためにメシア教会に寄付をしなければならない（寄付はメシア教会がロウ、ガイア神殿がカオスにそれぞれ属性が寄るイベントになっている）のでさらにロウに寄る。クリアしなくてもいいイベントだが、ストーリー上では重要なポイント。ゲームをさらに理解するためにもクリアしておきたい。クリアの後で前述の属性変更の方法を使って属性をニュートラルに戻しておこう。

# 【第15章】死人の街

「このまちはね、あかいおじさん※1とくろいおじさん※2がわたしのためにつくってくれたの」

そう話しかけてきたのはまだあどけない少女※3だった。生き生きとしてとても可愛らしい。それだけにいっそう奇異だ。

六本木は悪魔があやつる死人の街だった。魂のない死体が見せかけの享楽をつくりだしている。

そのことを知ったぼくたちが（とくにトシキが）赤伯爵、黒男爵と名乗る悪魔たちへの憎悪をかきたてられたのは当然のなりゆきだった。地下街を探し歩いているところへその少女があらわれたのだ。少女は小首をかしげてぼくたちを見あげた。

「おじさんたちにあいたい？」

少女のあとについていったぼくたちは、地上三階のある場所で、まず〝あかいおじさん〟に対面した。

少女はまったく無邪気なようすでこう言った。

「ねえねえ、はやくたましいをとってみせて※4」

---

※1・あかいおじさん
赤おじさんは六本木の3Fにいる。

2・くろいおじさん
黒おじさんは六本木のB1Fにいる。

※3・あどけない少女
ゲーム中で、この少女は赤おじさん、黒おじさんと対決することになるきっかけを作る重要な役割をはたす。名前はアリス。六本木の1Fにいる。

※4・はやくたましいを……
実際のゲームではまずアリスにヒランヤを買ってきてと頼まれる。新宿のジャンクショップで購入し彼女に渡すと今度は死んでと頼まれる。これをことわると彼女が泣き出し、このことに怒った赤おじさんと戦闘になる。

「よしよし――」と、〝あかいおじさん〟は相好をくずしてうなずいた。「じゃあくろいおじさんを呼んでおいで」

少女が出ていくと、〝あかいおじさん〟は言った。

「わたしたちのやりかたが気にくわないらしいな。なぜ邪魔をする？　ほおっておいてほしいのだがね」

「人間の魂を奪うのを？」※5

トシキは怒りに燃えていた。

「魂などないほうが平穏に暮らせるぞ」赤伯爵はあざ笑うように言った。「人間の命などはかないものじゃないか。あの少女は可愛らしいだろう？　あの少女だってわたしの魔力が絶えればあっというまに灰になってしまう。ずっと無邪気に可愛らしいままで暮らせたほうがどんなに幸せなことか――」

トシキは無言で力をみなぎらせた。

「わたしに挑むつもりなら――」

赤伯爵は正体をあらわした。

「だめ――」アオイが悲鳴をあげた。「とても無理――」

炎がうずまいていた。

ベリアルはいままで出会ったどんなやつらよりも強大だった。伝説によれば魔王に継ぐ力があるという。ぼくたちのどんな力も通用しなかったのは当然だった

---

※5・人間の魂を……
赤おじさん、黒おじさんは人間から魂を抜きとって2Fのある部屋に集め、それを六本木の街に結界を張る魔力にしている。

# 「アリスとおじさん」

人間の命などはかないものじゃないか。あの少女は可愛らしいだろう？　あの少女だってわたしの魔力が絶えればあっというまに灰になってしまう。ずっと無邪気に可愛らしいままで暮らせたほうがどんなに幸せなことか—

ぼくたちはベリアルの地獄の炎からかろうじて逃げ出した。
「永遠の平穏？　抜け殻になって!?」トシキは身を震わせた。「我慢できない。やつらは人間の魂を糧にしているんです。魂はどこかでうめいている。ぼくはあの悪魔を倒すためならなんだってする――」
最後は祈るようにしぼりだした。地下街の片隅で途方にくれているときだった。
ふと、背後にたたずむ影に気がついた。
その〝人物〟の印象はきわめてあいまいだ。たっぷりとした布を全身にまといつけたような格好で、頭まですっぽりとおおい隠している。しかも深くうつむいたような姿勢。顔はまったく見えなかった。にもかかわらず、ぼくはその姿を知っているような気がした。
その人物はトシキだけを手まねきし、ぼくたちのほうには背を向けた。
はじめトシキは不審そうなようすだったが、相手の顔をのぞきこんだとたん、はっとなった。低く二言、三言かわすうちに、トシキの目が輝きはじめたのがわかった。言葉は聞き取れなかったが、トシキはなにか強く訴えかけるようなそぶりを示し、相手はかすかにうなずいているようだった。やがてふところからなにかとりだし、トシキに渡すのが見えた。それからすっと離れていった。
ぼくたちのところにもどってきたトシキの顔には、なにか熱っぽい表情が浮かんでいた。いまにして思えば殉教者の決意と満足だったのだ……。

---

※6・小さな壺
この壺（わきみのつぼ）はゲーム中ではB1Fの宝箱の中にある。これが伯爵（赤おじさん）の弱点だという話は新宿や六本木の街の人達との会話からわかる。この封印の力はゲーム中では壺の力であって、ロウヒーローの力（神の力）ではない。

彼は小さな剣を手にしていた。
「これでやつらの力を封じることができます」
トシキは目を伏せて言った。その確信にみちた言いかたにぼくはどきりとした。
「あの人は……？」
あたりを見まわしたが、もうその人物の姿はなかった。
「あれは……」トシキは高揚を抑えたような口ぶりで言った。「神の使いです。ぼくは神に魂を捧げることに決めました」
はっと思いあたった。
「魂を捧げる――」
ぼくは言葉を探した。だが結局なにも言えなかった。魂を捧げるというのがどういうことかよくわからなかったが、これはもう避けようのないことだ……と、たちまち感じとっていた。テツオが悪魔との合体を言いだしたときと同じことがトシキにも起きたのだ。あのとき、ぼくたちはそれぞれの道を与えられているのだということを悟った。彼は目覚め、自分の道を歩きはじめた……。トシキは恋人の悲惨な最後を見届けたことで自暴自棄になったわけではない。それは引金にすぎなかった。これによって彼のなかにあったものが目覚めたのだ。
ぼくはいちばん最初に見た夢を思いだしていた。十字架にかけられたトシキのそばで神の使いがこう言った――「これは神に捧げられし魂」

魂を捧げることを約束し、トシキは神の力を借りた。
ふたたびベリアルに対したとき、それはたちどころに発揮された。あっけないほど簡単にベリアルはかたづ

いた。トシキの手にした壺のなかに封印されたのだ。
だが、それですべてがすんなりと終ったわけではなかった――。

「ひどいことをしますね」
別の声がした。ぼくたちははっとそのほうを見た。〝くろいおじさん〟こと黒男爵にちがいなかった。
「あの少女の永遠の生を奪ってしまった…」
黒男爵はさも悲しそうに首をふった。
少女はベリアルの封印とともに消えてしまったのだ。わたしの魔法が絶えればあっというまに灰になってしまう、と言ったとおり。
「ひどい？　ひどいだって!?」トシキは驚き、憤然となった。「大勢の人間の魂を犠牲にしておいて――」
「だからひとりの少女を抹殺してもいい？　あの少女に罪はないのに？」
黒男爵は意地悪く言いつのった。
トシキは言葉をのみこんだ。心が一瞬ぐらついたのかもしれない。相手の狙いどおり。
そのときだった。
「それはもらっておくわ」
その声は忘れようもない。トシキのそばにふっとユリコ[※7]の姿があらわれた。そしてあっというまにトシキの手から壺を奪いとっていた。
ぼくはユリコに注意を奪われていたので、黒男爵の奇妙な動きに気づくのが遅れた。
「危ない――」

と、トシキが叫んだとき、なにか黒い影が目に前に広がったのがわかった。同時にぼくは突き飛ばされていた。

はっと気がつくと、ユリコの姿も黒男爵の姿も消えていた。そしてトシキが倒れていた。なにが起きたのかわからなかった。ぼくもアオイも呆然としていた。

「魂を奪われてしまった…」

いつのまにあらわれたのか、背後にあの不思議な人物——神の使いがたたずんでいた。

「神に仕えることを誓った魂だったのに。このままでは彼の魂を神のもとに導くことができない」

ぼくはふたたび自分の使命を悟った。神の使いに言われたからではない。トシキは神に魂を捧げることを望んだ。自分の道を選んだ。テツオが悪魔との合体を望み、ぼくはそれに手を貸したように、トシキの決意も見届けなければならないはずだ…。

ぼくをかりたてたのはそれだけだった。

黒男爵のかたわらにトシキがいた。無惨にも、この街の住人同様、魂の抜け殻なのだということがひとめでわかった。

「魂をとりもどす? むだなことだ。いったんわたしの手にかかった以上、この体に以前の生をよみがえらせることはできない…」

そう言いながら、死人使いネビロスが正体をあらわした。

## 堕天使ネビロス出現！

LV46・HP1002・MP220・使用魔法　マハザンマ／ハッピーステップ／ムド

**【パーティー】**

●ショウ　LV36・装備　みかづきのたち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード、／サイバーアーム／ジェットブーツ

●アオイ　LV36・装備　初期装備

**【仲魔】**

●アークエンジェル　（エルフ＋シトリー※シトリーは新宿のヤクザビル2Fに出現、エルフは渋谷の街に出現）

●パビルサグ

●ストーンカ　（ブッカブー＋ネコマタ＝ユニコーン、ユニコーン＋モムノフ＝ストーンカ）

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／攻撃魔法（ジオンガ）・アークエンジェル／通常攻撃・パビルサグ／通常攻撃・ストーンカ／通常攻撃

**【ワンポイントアドバイス】**
魔法の得意な強敵。ジオ系で動けなくしてから戦うことが大切。ハヒルサグのテトラカーンで攻撃を跳ね返す手も有効だ。

ネビロスに操られたトシキが太刀を手にふらふらと近づいてきた。ぼくはたじろいだ。魂のない抜け殻だとはいえ、トシキに剣を向けることができなかった。

衝撃の波が襲いかかった。ぼくは手ひどいダメージを受けた。力が抜け、戦意がみるみる萎えていくのがわかった。

「神に魂を捧げたところで思うままに操られるだけだ。われわれの手に預けてもたいした違いはない」

ネビロスが言った。ぼくはそれに惑わされかけていた。

「ショウ…」

アオイが心のなかに力を送りこんできた。そしてネビロスに向かっては攻撃に転じた。いつのまにか彼女は目ざましい力を身につけていた。トシキの体が操り糸の切れた人形のようにふらついた。

アオイはネビロスの力を封じていた。

「ショウ、いまのうちに――」

---

※7・ユリコの姿
ゲーム中ではいったんユリコが主人公達に魂をおとなしく渡すか問いかけてくる。おとなしく渡した方が無難。拒否するとダメージを食らったうえに結局魂をとられることになる。

※8・このものの魂
ゲームではロウヒーローの魂は前述の魂を集めている2Fの部屋に捕らわれている。

ぼくは立ちなおり、仲間を呼び出して攻撃に加わった。
やがてネビロスの姿は黒い影となり、よじれ、霧(きり)のように消え去った。死人使いの力は絶(た)え、トシキの体が頽(くずお)れた。

かすみのような白い人影がふたつあらわれた。一方が言った。
「このものの魂は神のもとに導かれる…」

# 死人の街

NEUTRAL DATA FILE:15▶THE LIVING DEAD'S CITY

## 攻略手順

「六本木の街でアリスという少女と友達になる」⬇「3F、アリスに赤おじさんを紹介してもらう」⬇「アリスにヒランヤを買ってきてと頼まれる」⬇「新宿のジャンクショップでヒランヤ購入」⬇「六本木B1Fでわきみのつぼ入手」⬇「赤おじさんの部屋に戻りアリスにヒランヤを渡すと、今度は死んでくれと言われる。断ると赤おじさんがベリアルに変身」⬇「わきみのつぼにベリアルを封印」⬇「ユリコがわきみのつぼをもって行ってしまう」⬇「黒おじさんがロウヒーローをさらっていく」⬇「B1Fで黒おじさん（ネビロス）と戦闘」⬇「2Fでロウヒーローの魂昇天」⬇「六本木が死人の街に戻る」⬇「月が5周まわると街が復興する」

属性に関連するイベントはない。ここでの攻略ポイントは、本文や攻略手順を参考にして必要な壺等のアイテムをそろえた上で戦闘に挑むということ。ネビロスとの戦闘では敵の一撃呪殺のムドに注意しよう。できるだけ相手を眠らせて攻撃回数を減らすのがうまい手だ。

## 【第16章】銀座

大破壊によって東京は大きく三つに分断されていたが、それぞれが完全に孤立していたわけではなく、じつは地下の通路※1でつながっていた。それまでぼくたちがいたのは新宿や渋谷のある西の地域だった。地下通路は六本木の近くにあったのだが、ベリアルたちの張った結界のために入り口が閉ざされていた。そのため、新宿より北、六本木より東の地域へは行けなかった。だが結界が解けたことによって通路が開放された。

とどまっている理由はなかった。

通路は三方向に分かれていた。そのひとつを進んでいくと、銀座へたどりついた。

銀座の地下街は大きく、雑多な人間と悪魔たちが住みついていた。ぼくたち(ぼくとアオイだ)はあてもなく歩きまわった。

悪魔やその手下たちに襲われれば身を守るために戦ったが、これといった目的や使命感は持っていなかった。テツオとトシキがそれぞれの道を選んだこと

は認めた。認めざるをえなかった。それは宿命的なものだと思っていた。ではぼくは？
答えを見つけられないでいた。それは身の置きどころがないようなじれったさだった。
「カテドラルができあがればそこに神があらわれ、苦しむ人々をあまねくお救いになられるのです。品川のメシア大教会※2へお行きなさい。洗礼を受ければカテドラルへの道がひらかれるでしょう」
メシア教徒が言っていた。
「メシア教は神がすべての人間を救うようなことを言っているが、そんなまやかしにだまされてはいけない。上野のガイア教総本山※3へ……」
ガイア教徒が言っていた。
「メシア教徒もガイア教徒も人々を救うと言っている。しかしただ神と悪魔の手先になって勢力争いをしているだけなのではないかね」
そう言う人もいた。
「あなたが正しいと信じる道がいつかきっと見つかるはず」
アオイはそんなふうに言った。だがぼくは混乱するばかりだった。そんなとき、地下三階に迷い込んだ。
奥まった場所に浮浪者めいた年寄りが座りこんでいた。ぼくははっとした。
吉祥寺の公園で出会った老人！　鮮明なビジョンをもたらし、ぼくに暗示を与

---

**※1・地下の通路**
六本木から来た進行方向から見て右が銀座、真中が警視庁ビル、左が池袋にそれぞれ進める。

**※2・メシア大教会**
各都市にあるメシア教会の総本山。街の中心にはメシア大聖堂がある。

**※3・ガイア教総本山**　各地にあるガイア神殿の総本山。上野の街自体がガイア教徒であふれている。

えた不思議な人物。あのときと同じように、老人は眠っているかのように首を垂れていた。だがぼくがそろそろと近づくと、しゃがれた声でこう言った。
「進むべき道を失ったらもういちどここへ戻ってくるがいいぞ」
老人の口から出たのはただそれだけだった。ビジョンもなかった。いま示してほしい、ぼくはいったいどうすればいいのかわからない――そう叫びかけた。だが老人は首を垂れたまま、気配さえ消したかのように沈黙していた。
それ以上はなにも聞けないのを悟った。まだ探すべき場所が残っているということなのだろうか？
ぼくはいっそう困惑しながら、その場を離れた。
たしかに、このあと自分の道を見いだすまで、ぼくはたっぷりと翻弄されたのだった――。
※4品川へ行ったのはむしろ偶然だった。はじめからメシア大教会を目指していたわけではない。地下二階で通路を塞ぐ悪魔使いに挑まれたのだ。ぼくは苛立っていたので戦いに応じた。
相手は次々に悪魔を繰り出してきた。

※4・品川
品川へは本文の通り銀座のB2Fから抜けられる。途中には悪魔使いとの戦闘が待ち受けている。

## ピシャーチャ、ベイコク、ラケー出現！

●ピシャーチャ　LV19・HP89・MP16・使用魔法　デスタッチ／仲間呼ぶ／マヒかみつき

●ベイコク　LV25・HP187・MP46・使用魔法　シバブー／ブフーラ／ムド

●ラケー　LV37・HP259・MP38・使用魔法　かみつき／あばれまわり／ザンマ

【パーティー】

●ショウ　LV41・装備　びぜんおさふね／M249ミニミ／神経弾／ダーククラウン／テトラジャマー／きしんのこて／メタルブーツ

●アオイ　LV41・装備　さそりむち（銀座街のおにじょうろうとの戦闘でらいでんのむちを入手している場合これを装備）／SPAS12／神経弾／おにくいカブト／テトラジャマー／きしんのこて／スカイヒール

【仲魔】

●ロキ　（クシナダヒメ＋エルフ＋チュルルック※3匹とも銀座の街

に出現）

●ボブゴブリン　（※銀座の街に出現）

●ナーガ・ラジャ　（※品川の街または銀座のB3Fに出現）

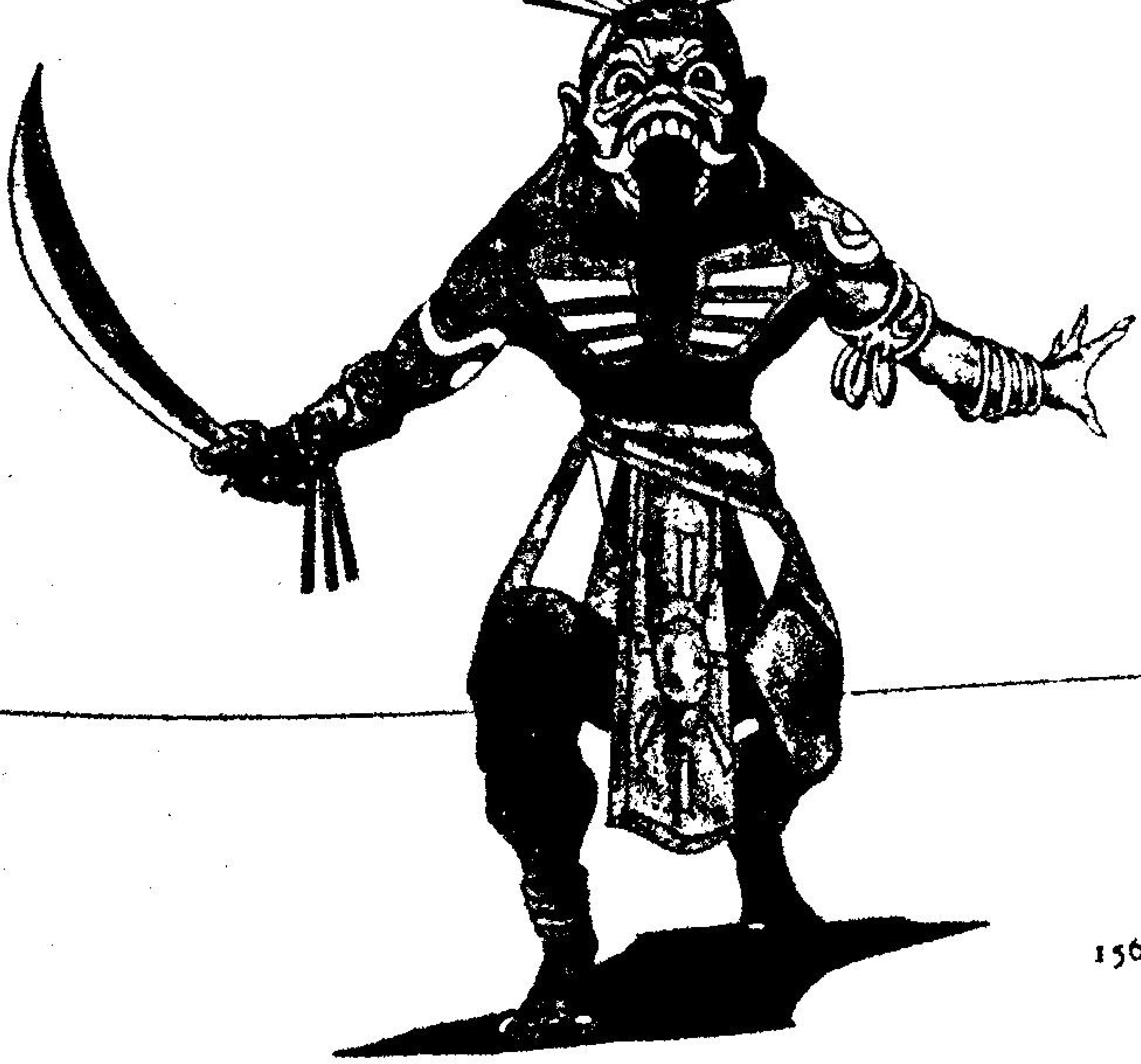
●パワー　（アークエンジェル＋リリム※渋谷の街に出現＝オロバス、オロバス＋ボブゴブリン＝パワー）

【攻略法】

ショウ／ガンで攻撃・アオイ／ガンで攻撃・ロキ／攻撃・ボブゴブリン／タルカジャをかけ続ける・ナーガ・ラジャ／攻撃・パワー／攻撃またはタルカジャをかけ続ける

【ワンポイントアドバイス】

3種類の悪魔が8匹ずつ登場。主人公とヒロインのガン攻撃で敵を眠らせることが大事。ベイコクのムドには注意しよう。



だがぼくはどの戦いにも勝った。悪魔使いは道をあけた。その通路の先が品川だったのだ。

## 警備システム【警視庁ビル5Fで遭遇】

LV58・HP1310・MP0・使用魔法　電撃

【パーティー】

●ショウ　LV39・装備　みかづきのたち／M16ライフル／神経弾／フリッツヘルム／サンダーガード／サイバーアーム／ジェットブーツ

●アオイ　LV39・装備　初期装備

【仲魔】

●天使アークエンジェル

●聖獣バビルサグ

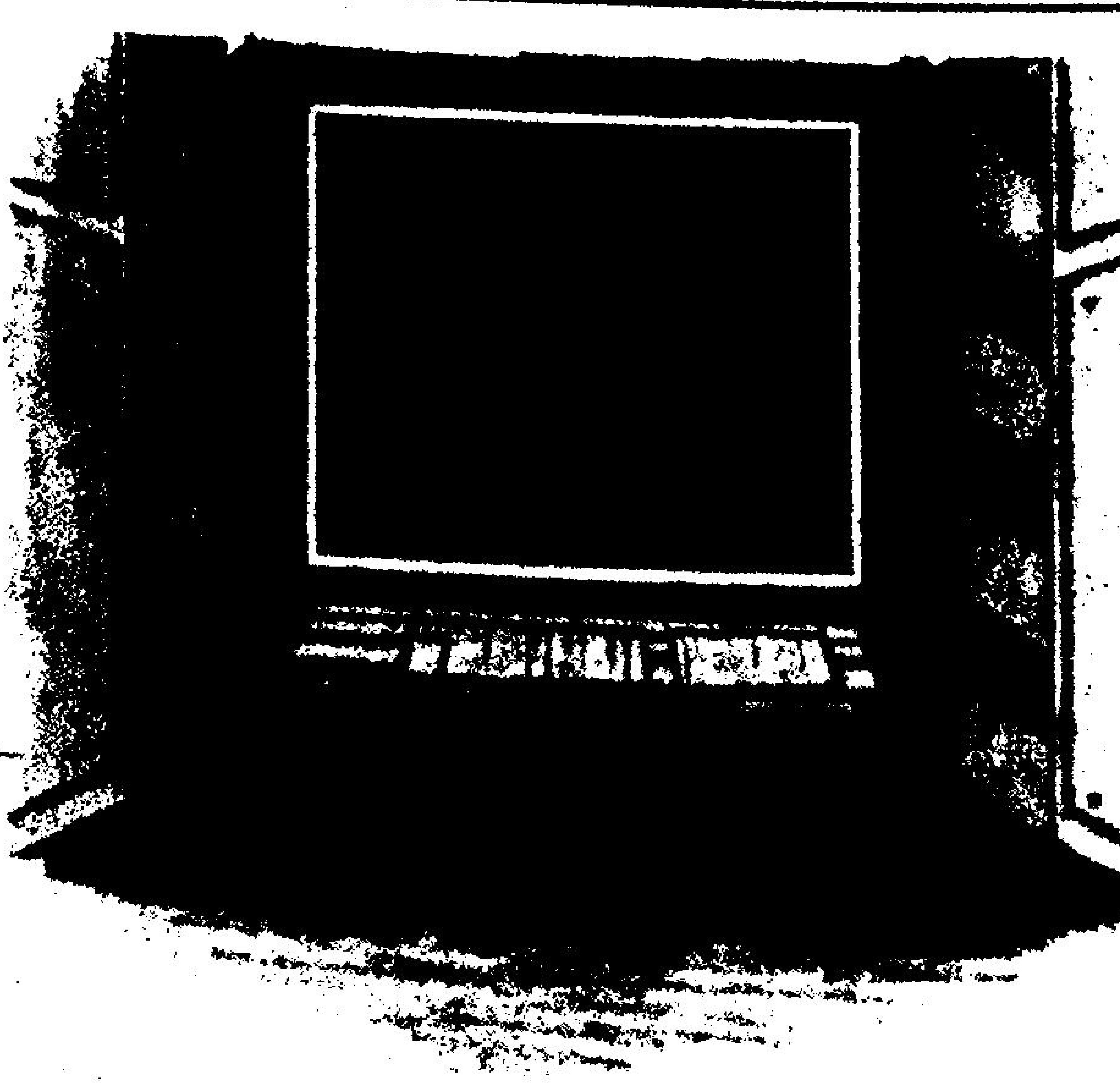
●魔獣ストーンカ

●妖精エルフ　（※前回のネビロス戦と変化なし）

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／剣での攻撃またはガン攻撃・アークエンジェル／通常攻撃・バビルサグ／通常攻撃・ストーンカ／通常攻撃・エルフ／ジオンガをかけ続ける

【ワンポイントアドバイス】



警備システムのある最上階に登るまでの道のりが辛い。視界が失われる場所が多いので、位置確認を常にしながら進もう。警備システム戦では、まずマシンロボ軍団との戦闘があるので、ＨＰに気をつけながら闘おう。マシンは厄介な魔法を使って来ることがないので、プリンパ等を絡ませながらあせらずに攻撃しよう。

# 銀座

NEUTRAL DATA FILE:16▶GINZA

## 攻略手順

「六本木地下道でロウヒーローの魂と出会う。警視庁ビルのロボット警官のコントロールシステムを破壊して欲しいと頼まれる」⬇「六本木地下道でスティーブン博士と出会い、同時に4体仲魔が呼び出せるようにしてもらう」⬇「警視庁ビル5F中央管制室を破壊する。メモリーボード入手」⬇「銀座B2Fでスティーブン博士に出会う。メモリーボードを持っていればストック出来る仲魔をメモリーボード1枚につき2体増やしてくれる」⬇「銀座B2Fで悪魔使いと戦闘。品川方面への通路を開けてもらう」

警視庁ビルのイベントは属性には関係しないが、ストックできる仲魔の数を増やせるので必ずクリアしよう。銀座の街はけっこう広くて迷いやすい。まめに現在位置を確認しながら進むことが大切。B3Fにいる老人のところは、カテドラルへのニュートラルルートになっているので、位置をしっかり把握しておこう。

## 【第17章】メシア大聖堂

「ついに神がメシアを遣わされました。悪魔のもとで苦しむわたしたちを見て、救いの手を差し伸べられたのです…」

街頭テレビが繰り返しそう流していた。

品川はメシア教の拠点だった。

「カテドラルさえ完成すれば、ガイア教徒も悪魔たちも恐るるにたりない」

「身も心も神に捧げるのです。神はいま、信じるものの力を必要としています」

「カテドラルを完成させるため、みなの力を神に捧げるのです。神のためにはたらくのはいまです。カテドラルが完成すれば、神はそこに降り立ち、千年王国がはじまりのときを迎えるでしょう。そして神に力を捧げたものは必ず神に救われるのです」

カテドラルと神による救済の望みのことは渋谷でも耳にタコができるほど聞かされたが、品川のメシア教徒たちはそれをいっそう熱っぽく語りかけてきた。

ぼくたちは洗礼[※1]を受けることをすすめられたけれども、そうしなければならないという熱意を欠いていた。

洗礼を拒否したまま、ぼくたちは三階の聖堂へ行こうとしていた。それはなかなかやっかいなことだった。メシア教に帰依していないものを排除しようというのか、いたるところに罠※2が仕掛けられていて、かなりうんざりさせられた。それでもぼくたちはあきらめなかった。メシアに会わなければならない、と思っていたからだ。

メシアが誕生したという街頭テレビのニュースは気になった。渋谷ではアオイがメシアとみなされていた。だが彼女は目覚め、メシアではないことを告げた。ではいったいだれが？　なにか胸騒ぎのようなものを感じたのだ。そのあと一階の広場でメシア像を見つけたとき、ぼくはほとんど衝撃を受けた。信じられない…と、ただ驚き、目を疑ったというより、心のどこかでこのことを予想していたような奇妙な感慨をおぼえたのだった。

神のもとに人々を導くメシアの像――それはトシキにそっくりだったのだ。

「ぼくは神の力によって復活したのです」

メシア教の聖衣に身を包んだトシキは言った。

「ぼくはよみがえり、千年王国の理想を聞かされました。地上に永遠の平和をもたらす神の千年王国…。ぼくは決心しました。千年王国実現のために救世主として戦うことを」

やはり彼だったのだ。トシキはぼくとの再会を喜び、ネビロスに奪われた

※1・洗礼
メシア大聖堂に到着した時点で、属性が著しくロウに寄っていて、しかもレベルが65以上ある場合には洗礼を受けることが出来る。洗礼を受けると属性が決まってしまい、ニュートラルとロウ以外の悪魔を呼び出せなくなってしまう。

※2・罠
回転する床、ワープポイントなどの仕掛けが数多い。2Fの真ん中の部屋で入手出来るくさなぎのけんは必ず手にいれよう。
●これでニュートラル最強の剣ヒノカグツチを作ることができる。剣と精霊との2身合体で作り出すのだ。
くさなぎのたち＋シルフ＝ふつのみたま
ふつのみたま＋ウンディーネ＝あめのむらくも
あめのむらくも＋サラマンダー＝ヒノカグツチ

魂を取り戻してくれたことを感謝すると言った。そして救世主としての使命を語った。
「カテドラルのことは知っているでしょう？　神を迎えるための。完成は目前なのですが…」
　トシキはふと顔をくもらせた。
「それを悪魔たちが黙って見ているわけがありません。神の降臨をなによりも恐れているのですから。これまでにもガイア教徒たちを使って数々の妨害を行なってきました。ぼくたちは懸命に戦っています。しかし悪魔の数はあまりにも多く、神の加護があってもぼくひとりの手に負えません。そしてここにいたっては、エキドナ※3という強力な邪神を送りこんでカテドラルの完成を阻止しようとしているのです」
　カテドラルは東京湾上に建設中だという。そういえば、銀座でだれかが「海の上にでっかい建物が浮かんでいる」と言っていた。また、隅田川河口に謎の島があらわれたとも。そこに邪神エキドナがいるらしい。
「エキドナの力がはたらいているかぎり、カテドラルを完成させることができません」
　トシキはエキドナを倒してくれと言っているのだった。
　ぼくは答えることができなかった。トシキが神に魂を捧げ、それが彼にとって無意味なまま終らなかったことは祝福すべきなのだろう。彼は神の心にか

※3・エキドナ
神のカテドラル完成を阻むために、TDLを自らが動かしやってきた悪魔。多くの悪魔たちの生みの親といわれている。

ない、救世主として復活した。自分の道に目覚め、それを遂げようとしているのだ。だが正直言って、ぼくはとまどっていた。なるほど、彼の使命感は理解できる。だけどぼくは彼のようにそれを確信していない…。

　トシキはぼくの迷いを見抜いたにちがいない。

「多くの人々が神による救済を願っています。だれにそれを阻止しようとする権利がありますか？　人間の混迷をもたらすだけの悪魔の跳梁をぼくは許せません。どちらが正しいか、自分の目で確かめたいというのならそうしてください。しかしぼくはきみがともに戦ってくれることを望み、またそうすると信じています」

# メシア大聖堂

NEUTRAL DATA FILE:17▶MESSIANIC TEMPLE

## 攻略手順

〔品川1Fでロウヒーロー（メシア）の銅像を見る〕⬇〔品川2Fでくさなぎのけん入手〕⬇〔品川4Fで悪魔使いと戦闘。しもんの玉入手。四天王の扉を開くことが出来る〕⬇〔品川3Fメシア大聖堂でメシアとして復活したロウヒーローに出会う。エキドナを倒してくれと頼まれる〕

まず1Fのメシア教徒の説教がロウイベントになっていることに注意。全ての話を聞き終わった時点で、属性が1段階ロウに寄る。4階の悪魔使いとの戦闘はヌエ、サウォバク、バーベガジとの3連戦。バーベガジのブフ攻撃に要注意。ジオ系の魔法を使って攻撃しよう。ロウヒーローの頼み自体は属性決定イベントになっていないが、法と秩序を重んじるロウの考え方をここでもう一度確認して頭に入れておくことが大切。

## 【第18章】――スガモプリズン

品川からいったん六本木の地下道に戻ったぼくたちは、池袋方面への出口へ向かった。池袋になにがあるか知らなかったし、そこを目指していたわけではない。エキドナのいる島には、池袋から上野を経由して南へ向かうしかないと聞いていたからだ。

ぼくはトシキになにも約束しなかった。自分の目で確かめるしかない。そう思いこむことで、なにかふっきれない気持ちを整理する時間を稼いだつもりだった。上野へ寄ってみるのもいいと思っていた。ガイア教の拠点だという。どんなようすか見ておきたかったのだ。

そういうわけだったのだが、池袋で意外なことが待っていた。

地上に出ると、※1 いきなり声をかけられた。

「よお、やっぱりまた会ったな」

テツオだった。

彼が無事なのはうれしかった。ぼくは素直にそう言い、トシキのことも話した。テツオは黙って聞いていたが、どう思ったのかはわからない。ぼくたちをじろじろ見ながら、ただこう言った。

---

※1・地上に……
実際のゲーム中では、六本木の地下道から池袋に抜ける途中でカオスヒーローと出会う。主人公達に闘いを挑んでくるが、池袋には近寄るなという脅し(?)で、どう答えても戦闘にはならない。その後地下道を抜け地上に出たところで強制的にスガモプリズンに連れていかれる。

「おまえたちはこっち方面に来ないほうが身のためだぜ」

なにか歯切れの悪い言いかただったが、戻れという意味らしかった。ぼくは理由をたずねた。しかし彼は、それを拒否だと受け取ったようだ。

「しかたがない」テツオは肩をすくめた。「じゃあ、ちょっといっしょに来てくれ」

「いったいどういうことなんだ?」

ある場所に連れて行かれた。大きな椅子がたったひとつだけある奇妙な広間を見まわしながら、ぼくはたずねたが、テツオの態度はどこかぎこちなかった。

「ここは閻魔大王ヤマの裁きの間。これから悪魔使いショウ、つまりおまえの裁判がはじまる。裁きは公平…」

まるでなにかを読みあげるようにそう言ってから、声を落した。

「悪く思うな。うまくやってくれ」

なるほど、とぼくは思った。テツオはヤマ※2という悪魔に忠誠を誓っているというわけだ…。

ヤマは冥府の王だとされているが、新興の神々によって天界を追われた古い神の眷族なのだ。この頃になってぼくもようやく気づいたのだが、大破壊以来、続々と強大な力のある悪魔たち、つまりいにしえの神々(これは破壊前にゴトウがそう呼んでいた…)が到来しているのだった。

---

※2・ヤマ
ヤマとのやり取りは属性イベント。カテドラル完成を阻むことを承諾するとカオスに寄って無罪になる。拒むとロウに寄って入牢となる。脱獄の後でもう一度ヤマのいる2Fに来ると戦闘になる。そのときは追加戦闘データ参照。

ヤマの支配地である池袋では、奇妙な〝法〟が行なわれていた。あとでわかったことだが、ぼくがヤマの要請を拒んだために入れられたスガモプリズンには、ヤマの基準によって裁かれた人間たちが捕らえられていた。多くはメシア教徒たちだった。神のために悪魔を殺すのが使命だと考えている者。メシア教会へ寄付するために金を盗んだ者。大勢のガイア教徒を殺した者（この男はいつか神が祝福してくれると信じていた）。メシア教徒ではなかったが、悪魔は人間の敵だから殺すのが当然だと叫ぶ男。

ぼくの罪状はこうだ――。

「いにしえより伝わりし契約によらずして悪魔を使いしこと」

テツオが広間を出て行ったあと、いつのまにかヤマがあらわれ、そう言ったのだ。悪魔と人間のあいだにははるか昔からしかるべき契約の方法があるのだという。それをぼくは用いていない、つまり悪魔召喚プログラムなるもので勝手に悪魔を操っているのはけしからん、というわけだ。

「もっともやむを得ない事情もあったことは認めるが」

冥府の長はもっともらしくうなずいた。ぼくはなかば唖然としてなりゆきを見まもっていた。やがてヤマはこんなことを言いだした。

「わが頼み、聞き入れるならすべて許してつかわそう。あらたなる支配の象徴、カテドラルの完成を阻んでほしい」

そういうことだったのだ。

ぼくはこのとき、そんなことはできない、と言ったのだと思う。きっぱり拒否したというより、そんなことはできそうにない、無理だ、というとっさの気持ちからだった。ところが釈明をする間もなく、ぼくたちは牢獄へ送られてしまった…。

そこから脱出できたのは、テツオの助けがあったからだ。彼はぼくたちが閉じ込められていた部屋をのぞきこみ、失望したように肩をすくめた。
「うまくやってくれると思ったのにな」
それだけ言ってテツオは去ったが、扉の鍵があいていた。
出口を探し歩いている途中で他の囚人たちに会ったのだが、助け出す方法が見つからなかった。そうこうするうち、ある扉の前で追っ手に出くわした。巨大な鬼神だ。

## 鬼神ニオウ出現！

LV72・HP1520・MP170・使用魔法　シバブー／ラクカジャ／ファイアブレス

【パーティー】

●ショウ　LV47・装備　ヒノカグツチの剣／M249ミニミ／神経弾／ドラゴンヘルム／ドラゴンメイル／ドラウプニル／ドラゴンブーツ

●アオイ　LV47・装備　クチナワの剣／SPAS12／神経弾／くれないのかぶと／くれないのよろい／くれないのこて／くれないのぐそく

【仲魔】

●タケミナカタ　（アークエンジェル＋ルサールカ、クシナダヒメ、クシナダヒメ＋エルフ＋カウンチャ＝オオモノヌシ、ラミア＋ターラガ＝ウンティーネ、オオモノヌシ＋ウンティーネ＝タケミナカタ

※ルサールカ、エルフは渋谷の街に出現、カウンチャ、ラミア、ターラガは銀座の街に出現）

●ロキ　（クシナダヒメ＋エルフ＋チュルルック）

●パワー　（アークエンジェル＋リリム＝オロバス、オロバス＋ブブゴブリン＝パワー）

●ナーガ・ラジャ　（※品川、銀座の街に出現）

【攻略法】

ショウ／剣で攻撃・アオイ／ジオンガをかけ続ける・タケミナカタ／攻撃・ロキ／攻撃・パワー／タルカジャをかけ続ける・ナーガ・ラジャ／攻撃

【ワンポイントアドバイス】

シバブーやファイアブレスを使う戦いにくい敵。ジオンガで相手が動けないうちに、タルカジャで味方の攻撃力を上げてひたすら攻撃。

その鬼神の手はぼくをひとつかみにしてしまいかねなかった。アオイと仲魔たちのおかげで何度もそれを逃れた。手ごわかった。燃えるような目がかっと見ひらけば、金縛りにあった。そこへ炎が襲いかかる。ぼくたちはほとんど力を使い尽くし、かろうじて退けることができた。四体の仲魔を呼び出すことができるようになっていたのが幸いだった。

トシキとテツオとの再会。それぞれの立場。それぞれの頼み（テツオの場合は彼に直接頼まれたわけではないが）。

いささか事態が見えてきた。

つまり、これは神と悪魔の争いなのだ。古い神々と新しい神々。呼び名はなんでもかまわない。要するに人間を道具に使った戦いなのだ。ゴトウとトールマンのときのことを考えればあきらかだった。救いのない結果をもたらしたそのことが尾をひいていた。ぼくは関わりあいになることを、たぶん、恐れていたのだ。だからはっきりとしよう、だれも拒否もできなかったのだと思う。

だが結局のところ、それも逃げ道にはならなかった。ぼくはふたたび同じことを繰り返すはめになったのだ――。

## ヒノカグツチの剣

炎のように燃えあがる剣。ひとふりすればあたりに火神の放つ炎が舞い、たちはだかるものをうち滅ぼす。これが最強の剣とされているが、実は……

## 天魔ヤマ出現！「スガモプリズン2Fで遭遇する」

LV77・HP1610・MP64・使用魔法　アギラオ／マハラギオン／ムド

**【パーティー】**

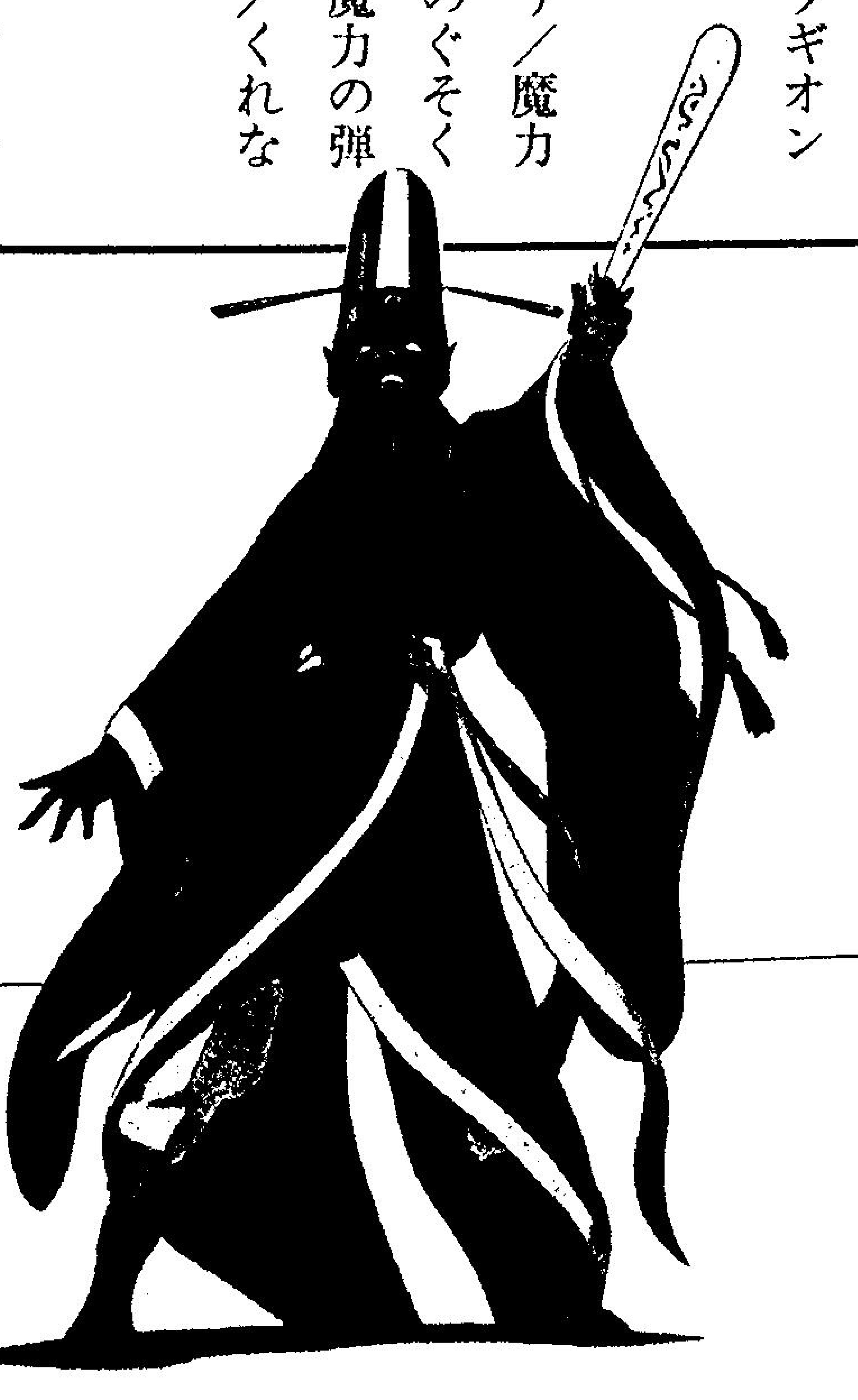
●ショウ　LV52・装備　ヒノカグツチの剣／おうごんじゅう／魔力の弾／ちえのわ／はくまのよろい／ドラウプニル／むしゃのぐそく

●アオイ　LV52・装備　クチナワの剣／おうごんじゅう／魔力の弾／パンツァーヘルム／パンツァースーツ／くれないのこて／くれないのぐそく

**【仲魔】**

●魔人アラハバキ　（デカラビア＋センリ＝ヴァーチャー、ヴァーチャー＋ホブゴブリン＝キクリヒメ、キクリヒメ＋ラミア＋ロキ＝アラハバキ※デカラビア、ラミアは品川の街に出現。センリ、ホブゴブリンは池袋の街に出現）

●鬼神ナガスネヒコ　（ターラガ＋ラミア＝ウンディーネ、ウンディーネ＋タケミナカタ＝ナガスネヒコ※ターラガ、ラミアは品川の街



に出現）

●神獣ナラシンハ　（タムズ＋パワー＋ストーンカ※ストーンカは銀座地上に出現、タムズは池袋地上に出現）

●龍神ガンガー　（キクリヒメ＋ナーガ・ラジャ※ナーガ・ラジャは品川の街に出現）

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・アラハバキ／通常攻撃・ナガスネヒコ／通常攻撃・ナラシンハ／通常攻撃・ガンガー／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】

ヤマとの戦闘は属性に関係してくる。カオス側であるから当然倒すとロウに寄る。無理をして倒さなくてもいいが、経験値や金を得るために闘っておいても損はない。

# スガモプリズン

NEUTRAL DATA FILE:18▶SUGAMO PRISON

## 攻略手順

〔六本木地下道に戻り池袋方面に向かう。途中でカオスヒーローに出会う。池袋に来るなと言われる〕⬇〔地下道を抜け池袋に出た所でカオスヒーローに捕まりスガモプリズンに連れて行かれる〕⬇〔ヤマの裁きを受ける。カテドラル完成を阻んでくれと頼まれる。断ると4Fの牢屋に捕らわれる〕⬇〔カオスヒーローが助けてくれる〕⬇〔門番ニオウと戦闘。スガモプリズン脱出〕⬇〔ヤマと戦闘。倒すと属性がロウに寄る〕

数少ないカオスに寄ることの出来るイベントがまず初めにある。ヤマとの会話はそのときの主人公の属性によって内容が変化する。ニュートラルでヤマに出会った場合、カテドラル完成を阻むことを頼まれる。承諾しておく方がいい。無罪放免となる。倒すとロウに寄るヤマとの戦闘もある。ゲーム中を通してロウ側に寄りやすいので、なるだけクリアしなくても進めるロウイベントは避けて進むことが最短攻略への近道だ。

## 【第19章】―――ガイア教総本山

陥没や残骸の山のために、多くの場所で地上の行き来ができなくなっている。池袋と上野のあいだもそうなのだが、池袋の北東にある赤い屋根の建物に入ると、地下通路があり、東の上野方面へ出ることができた。

ところで、同じような建物は他の場所にもあった。全部で四ヶ所、破壊後の東京に点在しているのだ。後で知ったのだが、それらは四天王の館※1と呼ばれていた。そこでは魔物の出現がやけに頻繁で、しかも概して強力だったから、なにか特別な力が集中しているのが感じとれた。どの建物のなかにも閉ざされたままの扉があるのだが、ずっと後になるまで、そこに隠された重大な秘密を知ることができなかった――。

上野※2でもまた意外な出来事に遭遇した。街に入ってすぐだった。

長い通路の向こうに一人の男が立っていた。彫像のように寸分の隙もないシルエット。長身の、きわめて風采のよい男だが、ぼくは鳥肌立つような感じを受けた。

「やあ」と、男のほうから声をかけてきた。

---

※1・四天王の館
東京の4つの方角にそれぞれ位置している。四天王とは毘沙門天、持国天、項目天、増長天のこと。

※2・上野
池袋の東方、銀座の北方に位置する。本文にもある通り池袋から赤い屋根の建物を通るルートが唯一の侵入経路。

男はルイ・サイファー[※3]と名乗り、完璧に儀礼的な笑みを浮かべてぼくを眺めた。

「きみのことはよく知っている」

その男はなにか底知れないものを秘めていた。それをぼくが感じとっているのを承知の上で、そ知らぬふりを装っていた。

「きみにぜひ会ってもらいたい人がいる。よく知っているとは思うが――」

男は笑みを刻みつけたままそう言ってから、今度は肩ごしにぎくりとするほど命令的な口調を響かせた。

「さあ、きなさい」

通路の角にあらわれた人影を見て、ぼくは思わず身がまえた。ユリコだったのだ。彼女があらわれるとロクなことがない…。が、すぐに妙だな、と思った。ユリコはいつになく沈みこんだようすで、あの挑発的な笑みも影をひそめていたのだ。

男は黙ってユリコを見つめていた。その視線が突き刺さったかのように、ユリコは口をひらいた。

「ショウ…」声も沈んでいた。「あなたはわたしをパートナーにしなければいけなかった。でもあなたはその女を選んだ…いえ、言っておくけど、巧みに選ばされたのよ。いずれわかるわ」

ユリコは唇をかんだ。男はそのようすをおもしろがっているように見えた。

---

※3・ルイ・サイファー
彼が元天使界の天使長ルシファー。カオスルートのエンディングでは、その正体をあらわし、我々悪魔と神はしょせん同じであると言い残して去ってしまう。

「とにかく……」と、ユリコは顔をあげ、思いきったように髪をふりはらった。「わたしの使命は失敗したわ。このままでは引きさがれないのよ」
ユリコの姿が変わった。
彼女の正体は夜魔リリスだった。その目が輝いたとたん、ぼくは思わず叫び声をあげた。頭が割れるような激しい苦痛に襲われたのだ。だがすぐに力はゆるんだ。
「だめ……」
リリスはふたたびユリコの姿にもどっていた。
「おやおや」
男が肩をすくめた。
「できない」
ユリコが言った。
「そうかね」
男はあいかわらず笑みを浮かべていたが、声はぞっとするほど冷たかった。
「しかたがないわ。掟どおり――」
ユリコは肩を落して歩み去った。男はもっともらしい思案顔でそれを見送っていたが、ふとぼくのほうをふりむき、こう言った。
「だが彼女にはもういちどチャンスを与えるとしよう」
ぼくに問いなおす暇さえ与えず、男もまた歩み去った。

その謎めいた出来事のあと、ぼくたちは上野の街を探索したが、噂どおり、ガイア教の総本山※4となっていた。ガイア教徒たちはカテドラルの乗っ取りを叫んでいた。それはぼくの道しるべにはなり得ず、相手もまたこちらをその気にさせようなどとは思ってもいないようだった。ガイア教神殿では一瞥のもとに、「おまえたちはここに立ち寄る資格がない」と追い払われたぐらいだ。むしろ品川以上に居心地が悪く、多くの悪魔やガイア教徒たちに敵意を示された。罠や戦いに追われるうちに、ぼくたちは地下へ迷いこんだ。

地下二階の暗闇の奥から不気味な咆哮がとどろいた。危険を感じ、引き返そうとした。だが遅かった。目の前に怪物があらわれた。

醜い姿の龍だった。

## 邪龍ラドン出現！

LV71・HP1730・MP20・使用魔法　テール／ファイアブレス／おしつぶし

【パーティー】

●ショウ　LV58・装備　ヒノカグツチの剣／くにとものじゅう／魔力の弾／ヤクトヘルム／ヤクトアーマー／ヤクトグラブ／ヤクトレ

※4・ガイア教総本山
ここでも品川のメシア大聖堂と同じ様に、属性が極端にカオスに寄っていてかつレベルが65以上であれば、カオスの洗礼を受けることが出来る。この時点で属性がカオスに決定されてしまう。

ック

●アオイ　LV58・装備　クチナワの剣／くにとものじゅう／魔力の弾／パンツァーヘルム／パンツァースーツ／くれないのこて／くれないのぐそく

【仲魔】

●オーディン（アラハバキ＋ラミア※品川の街に出現＋キクリヒメ）

●シュテンドウジ（※四天王の館に出現）

●ナガスネヒコ

●ヴリトラ（ターラカ※品川の街、銀座の街のB3Fに出現＋ラミア※銀座のB1Fに出現＝ウンディーネ※鬼女＋鬼女なら組み合わせは自由、ウンディーネ＋ガンガー＝ヴリトラ）

【攻略法】

●ショウ／剣での攻撃・アオイ／ジオンガをかけ続ける・オーディン／攻撃・シュテンドウジ／タルカジャをかけ続ける・ナガスネヒコ／攻撃・ヴリトラ／攻撃

【ワンポイントアドバイス】

ファイアブレス、おしつぶしなどの特殊攻撃が得意。レベルの割にHPが高く力も強い。ヒロインのマハジオンガが有効。長期戦は必至。

尾のひとふりでぼくは床に叩きつけられた。アオイが叫んだ。怪物の巨体がはずみ、ぼくの上にのしかかろうとしていた。アオイは力を放った。青白い稲妻のようなアークがひらめき、それが邪龍を一瞬立ち往生させた。そのすきにぼくは転がり逃れた。

怪物は咆哮とともに炎を吐きだした。真っ向から剣で立ち向かえる相手ではなかったのだ。凶暴にうねる巨体じたいも脅威だった。

アオイは繰り返し力を放った。ぼくは隙をみて一撃一撃を繰り出した。

わずかずつだが、怪物の動きは鈍っていた。ぼくはとどめを刺そうと大きく踏みこんだ。ふたたび咆哮がとどろき、ぼくの前に炎がうずまいた。

だがそれは怪物自身をつつんでいた。一瞬ののち、炎も、のたうつ怪物の姿も消えた。※6 アオイは力を使い果して膝をついていた。

---

※5・怪物の姿も……
邪龍ラドンとの戦闘に勝つと、おうごんのりんごというアイテムが手に入る。これはTDLに入る通路で立ちふさがっているケルベロスを正気に戻すために必ず必要になるアイテム。

# ガイア教総本山

NEUTRAL DATA FILE:19▶MECCA OF THE GAIA

## 攻略手順

「スガモプリズンから東方の四天王の館（やかた）を通って上野方面に向かう」↓「上野でルイ・サイファーに出会う。ゆりこが正体を現す。夜魔リリスだった」↓「B2Fでラドンと戦闘。おうごんのりんご入手」

品川で手に入れたしもんのぎょくがあれば、四天王の館の扉を開くことが出来る。最短で進みたいのであれば、ここでこの館の主毘沙門天（びしゃもんてん）と闘ってもいい。属性（ぞくせい）に関係するイベントはない。ここでも品川と同じように、街の人との会話やイベントからカオス側の考えを再確認しておくことが大切だ。

## 【第20章】――ディスティニーランド

その島は銀座の東側にあるのだが、銀座方面から直接行くことができないので、池袋から上野を経由するという遠まわりが必要だった。上野と銀座は分断されているものの、例の赤い屋根の建物※1が上野の南にもあって、地下通路が銀座のあるブロックの東のはずれにつながっていたのだ。

上野のガイア教徒たちは、その島のことをディスティニーランド※2と呼んでいた。そこへ行けば幸運が身につくのだとも。ガイア教徒にとってはそうかもしれない。邪神エキドナの島なのだから。だがぼくたちには――。

島に向かって橋がのびている。橋のたもとに魔獣がうずくまっていた。ぼくたちが近づくと起きあがり、牙をむき出して狂ったように吠えたてた。

まずは幸運だった。ぼくたちは狂った悪魔の気を静めるという〝黄金のリンゴ〟を持っていたからだ。上野の地下で戦った邪龍が消えたあとに残されていた。

〝黄金のリンゴ〟が輝きはじめると、魔獣はうなるのをやめた。魔獣ケルベロス※3はすすんで仲魔になった。

---

※1・赤い屋根の建物
四天王の館のひとつ。館主は毘沙門天。

※2・ディスティニーランド
銀座の東方に突如現れた島。上野から南下するルートが唯一の侵入方法。邪神エキドナが住み操っている島。

※3・魔獣ケルベロス
愛犬パスカルが悪魔と合体したケルベロス。悪魔に精神を奪われ正気を失っている。

ぼくたちは難なく橋を渡った。城のような奇妙な建物が口をあけていた。
「よお、また会ったな」
入ってすぐのところにテツオが立っていた。
「なにをしにきた？」
ぼくは答えなかった。というより答えられなかった。テツオはそれを見抜いてにやりと笑った。「迷っているんだろう？　メシア教の欺瞞でいっぱいのたわごとに惑わされて」
その挑発的な言いぐさよりも、ぼくはテツオのそばに寄りそうように立っている見知らぬ少女のほうが気になっていた。
「おれのパートナーだ」ぼくの視線に気づいてテツオは言った。「名前はリエ…」
少女は黙って微笑んだ。
なにか落ち着かない気分だった。なぜそうなのかはわからない。アオイも同じように緊張しているのが伝わってきた。
テツオはリエという少女のことについてはそれ以上口にしなかった。
「おれは神の陰謀を阻止するためにはたらいている」と、肩をそびやかした。
「…陰謀？」
「やつらはそうは言わなかっただろう」
「多くの人の願いであるカテドラルの建設を邪魔している…」
ぼくが言いわけがましくつぶやくと、テツオは皮肉な笑みを浮かべ、ぼくを値踏みするようにじろじろと眺

めた。居心地の悪い沈黙が続いたので、ぼくはトシキと話をしたときに考えたことを言いだしかけた。
「ともかく…」テツオのほうが先に口をひらいた。「エキドナの話を聞いてみることだな」
そしてパートナーの少女をうながしてぼくたちに背を向けた。
「よく考えろよ」
通路の角に消える前に、肩ごしにふりむいてそう言った。
「あのひと…」
しばらくしてアオイが小さくつぶやいた。
「え?」
ぼくは胸さわぎをおさえながらアオイを見つめた。リエという少女のことだと直感した。アオイはふたりが消えた角を長いこと見つめていたが、やがて首をふった。
「いえ…いいの」
なにかいやな予感がした。

どこからともなく声が聞こえてくる。
「ディスティニーランドへようこそ！」
「ここは運命をためすところ※4だよ。さあ、きみはどうかな?」

※4・運命をためす……
この島では運命をためすイベントが多い。運が悪いとハッピーや、ポイズンなど様々な症状を引き起こす。あえて通る必要はない。

姿なき声に翻弄されながら、ぼくたちはやがて最上階のある場所へたどりついた。
「この奥へ進んでいって着いた先があなたの運命だよ。なにがでるかはお楽しみ…」
「おまえの魂はカオスに引き寄せられる…」
「さあさああなたも運だめし！」
「運が悪けりゃ死ぬだけさ！」

足を踏み入れたとたん、畏怖に近いものに襲われた。大きな空洞を思わせる。全体に鼓動のような響きが満ち、奥の暗闇が底なしに感じられる。
「この島はわが身をもってささえられ、われらいにしえの神々を信ずるものに力をさずける…」
なにか思わず身震いしてしまうような気配がうねった。
「おまえが来ることは知っていた」
巨大な顔が浮かびあがった。
「わたしを倒せとそそのかされたのであろう？　だが聞くがよい――」
エキドナはぼくたちの頭上にのしかかるように首をさしのべていた。暗闇の奥にうねる蛇身がかいま見える。
エキドナは巨大な蛇身の女神だった。はるか昔、多くの怪物を生みだした大地母神。その奇怪な姿と大きさに圧倒され、〝神の陰謀〟について語られるあいだ、ぼくたちは身じろぎさえできなかった。
「かつて多くの神々が法の神により魔界へ落され、いにしえの神と人間がともに栄えし時代は終わりを告げた…。ふたたびその時代はよみがえらんとしているものの、神は人間をそそのかし、われらをまたもや追い落とそうとしている…」

そして千年王国の欺瞞について。

「法の神を崇拝するものどもは人々を救わんがためと称し、法の神をこの地上に降ろさんとしている。ひとたび法の神が降臨すれば、その支配に人々はより苦しもう。信仰の名のもと、心の奥底までも神への忠誠を誓わせる。そして忠誠たしかなる人間のみ選び、千年王国を築きあげる…」

それゆえ、神の降臨を阻止しなければならない、と。

「いま、神の支配の欺瞞に気づかぬものたちが東京湾にカテドラルを築きつつある。カテドラルが完成すれば神は満足して降臨するであろう。これを守護する天使が品川にある。ふたたびわれらいにしえの神と人間がともに栄えることを願うなら、まずはその天使を倒さねばならぬ…」

ぼくは次の言葉が予想できた。

「人々を神の支配から解き放つために…」蛇身の女神エキドナは言った。「天使ハニエルを倒す役目、引き受けてくれぬか」

「…なぜ?」

ぼくは返答を逃れようとして絶望的な抵抗を試みた。

「神の奴隷になるか否か…。人にはみずから道を選ぶ権利があろう?」

「多くの人々はそれを望んでいるとしたら…」

「同じくらい多くのものが拒否している」

ぼくはふたたび黙りこんだ。エキドナは躊躇を許さなかった。両眼を吊りあげ、くわっと口をあけた。

なにが起きたのかわからず、麻痺が解けたあとで、恐怖と衝撃に身を震わせている自分に気がついた。

それを見おろしながらエキドナは言った。

「いうことが聞けぬ、とう」

このときはっきりと怒りを感じた。後になって考えてみると、なにに対してということさえ定かではなく、まだくすぶっているような状態だったのだが、少なくとも、この脅しには我慢できなかった。

ぼくたちはその意志を示した。エキドナはそれを悟った。すさまじい咆哮と切迫した鼓動が耐えがたいほどに高まった。

## 邪神エキドナ出現!

LV81・HP1920・MP200・使用魔法　マヒかみつき/マハブフーラ/どくガスブレス

【パーティー】

●ショウ　LV61・装備　ヒノカグツチの剣/くにとものじゅう/魔力の弾/ヤクトヘルム/ヤクトアーマー/ヤクトグラブ/ヤクトレッグ

●アオイ　LV61・装備　クチナワの剣/くにとものじゅう/魔力の弾/パンツァーヘルム/パンツァースーツ/くれないのこて/くれないのぐそく

【仲魔】

●天魔ヤマ
●魔神オーディン
●龍神ヴリトラ　（ガンガー＋ウンディーネ※特殊精霊合体を利用、女神＋聖獣〈魔獣＋地霊が比較的簡単〉＝龍王で直接作るのも良い）
●鬼神ジコクテン

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／攻撃魔法ジオンガまたはガン攻撃・オーディン／通常攻撃・ヤマ／通常攻撃・ヴリトラ／ドクかみつき・ジコクテン／タルカジャをかけ続ける

【ワンポイントアドバイス】

動きを止める魔法マハブフーラがやっかい。攻撃力も高く1回で80〜90程度のダメージを与えてくる。ガン攻撃やジオンガで敵からの攻撃ができるだけ少なくなるように心がけよう。

ぼくはそこがひとつの島の人工的な建物の内部であることを忘れさっていた。激しい嵐のような空気のうなり。地響き。激震。ぼくたちは原初の恐怖をかきたてられた。エキドナは大地母神。地にうごめくものを生み出し、食らう。長い首がうねり、底なしの闇を秘めた口が大きく裂けて、ぼくたちをのみこもうと迫っていた。

なかば恐慌状態におちいり、ぼくはめちゃくちゃに剣をふりまわしていた。アオイもたて続けに力を放ち、あたりは稲妻をともなった嵐の様相を呈していた。身を守るための懸命な応戦だったにしても、結局、ぼく自身の道を探すためには戦うしかなかったのだ——。

長い、逃げ場のない戦いだったけれども、ぼくたちはしのぎきった。あたりを揺るがせる咆哮が途絶え、ふと気がつくと、エキドナの姿はなく、暗闇だけが残っていた。畏怖をもよおさせる胎動のような響きも、しだいに暗闇の奥底にしりぞいていた。

# ディスティニーランド

## 攻略手順

[上野から東南に行った所の赤い屋根の建物を通ってTDL方面に向かう]↓[TDLの入口にケルベロスが立ちふさがっている。おうごんのりんごがあれば通してくれる。エコービルの所でケルベロスを飛ばしていればケルベロスが仲魔になる]↓[TDLでカオスヒーローと再会]↓[エキドナに会見。ハニエルを倒してくれと頼まれる。断ると戦闘になる]

TDL1Fに属性に関係するイベントがある。5000マッカ払って運を試すイベントがそれ。属性がニュートラルの場合、ゴールは4つある。ガイア教徒の部屋（カオスに寄る）、エンジェルの部屋（ロウに寄る）、グルルの部屋（戦闘後カオスに寄る）、バジリスクの部屋（戦闘後ロウに寄る）の4つだ。他にも多数ある運試しのイベントはバッドステータス状態になるだけなので避けた方が無難。エキドナに謁見する前に悪魔使いとの戦闘がある（避けても先に進めるが、強い仲魔を戦闘後にもらえるのでクリアした方が有利な展開が望める）。ヴェータラ×4＋サンニ・ヤカー×4、ワイバーン×4＋ワイアーム×4、ラクサーシャ×4＋マンティコア×4が次々に出現する。その後でエキドナに会おう。頼みを拒否しないとエキドナと戦闘にならないので属性がカオスに決定されてしまう、注意。

# 【第21章】ハニエル

「そうですか――」エキドナを倒したことを告げると、トシキの顔に満足の色がひろがった。「やっぱりきみは正しい道を選んでくれたのですね」

救世主のその大げさな感謝はむしろ苦痛だった。ぼくはいささか重い気分になりながら、エキドナと戦うに至った顚末を正直に話した。結果的にはトシキの頼みに応じたことになったが、むりやり従わされるのがいやだったからだ、と。メシア教徒のためでも神のためでもない、と。品川に戻ったのはそのことをはっきりさせておきたかったからだ。

「つまり…」と、ぼくは首をふった。「まだ自分の道を見つけたわけじゃあない」

「どういうことです?」

「この前きみが言ったことは、きみにとっては…いや、たぶん多くの人にとっても…正しいのだと思うけど、ぼくには自信がない。わからないんだ」

メシア教徒たちが望んで神に従おうとしているように、ガイア教徒たちにも選ぶ権利があるんじゃないだろうか。強引にぼくを従わせようとしたエキドナには逆らったけれども、その語ったことは充分に理解したつもりだった。結局はどの神を選ぶかだ。

「なにをいまさら――」

トシキは驚いたように目をまるくした。そのとき彼の背後に大きな輝きがあらわれた。

「ハニエルさま！」
光輪のなかに浮かびあがった翼のある姿をふり仰ぎ、トシキはうやうやしく脇にしりぞいた。メシア教徒たちの守護天使。死後の昇天を信じてカテドラル建設に励む人々の指揮者。
天使ハニエルは寛大なようすでぼくを眺めおろした。
「なにを迷うことがあろう。おまえの行なったことは正しい。気づいていないだけだ。人々はみな神の降臨を待ち望んでいる。人々のためにおまえは当然のことをなした。それこそ神の望まれること。これからも神のため、千年王国のため、力を尽くしてもらいたい」
命令なのだ――それを悟ったぼくは逃げ場を探した。だがトシキがぼくに口をはさむ隙を与えなかった。
「そうなのです」と、深刻な口調で言いだした。「カテドラルはいま危難にさらされています。悪魔がガイア教徒どもをひきいて侵入しているのです。だからぜひきみの力が借りたい。ぼくとともにカテドラルへ行って、神の降臨を阻止しようとするやつらを倒してください」
「おまえならできよう」ふたたび天使が言った。「さあ、神に忠誠を誓うがよい。そうすればカテドラルへの道がひらかれる。悪魔どもを追放し、ともに神の降臨を仰ごうではないか。まさしく至福がもたらされるであろう――」
光輪がいっそう輝きを増していた。
ぼくは暖かい光に包まれるのを感じた。目の前に柔らかい輝きがひろがった。輝きの向こうになにかが見える…天をめざす大きな階だ。突然、それを仰ぎ見ていることが喜びとなって体中をかけめぐった。至福というのはこういうことなのか、と感じながら身をふるわせた。ぼくはひざまずき、さらに大きな歓喜を得ようと両腕をひろげてさしのべかけた。

「目をさまして…」

幸福なビジョンに影がさした。目前に迫る階をさえぎられ、一瞬、ぼくは怒りさえおぼえた。それほど強烈な歓喜だったのだ。

「ショウ、自分をとりもどして…」

アオイの声だと気づいたとき、ぼくははっとわれに返った。

トシキが信じられないといった顔でぼくを見ていた。ハニエルは寛大な威厳を糾弾者のそれに変えていた。

「神のためにはたらくことを拒むのか？」

悪魔のためにはたらくつもりもない、とだけ答えた。だが、もちろん、それはハニエルの望む答えではなかったのだ。

「そのようなことが許されると思っているのか――」

ハニエルの怒りをかわすことはできなかった。たとえそれが後にどんな結果をもたらすことになるか知っていたとしても、ぼくたちは身をまもるために戦うしかなかった。

神にも悪魔にも従う気はない――このときそれ以上の決意はなかったにしろ、エキドナとハニエルを退けることで、ぼくの立場はおのずと決まってしまった。

そう、ぼくたちは天使ハニエルを倒したのだ。

## 天使ハニエル出現！

LV80・HP1820・MP150・使用魔法　マハジオンガ／マリンカリン／マハンマ

【パーティー】

●ショウ　LV60
●アオイ　LV60

※装備はどちらもエキドナ戦闘時と同じデータ。187ページ参照。

【仲魔】

●天魔ヤマ　（キクリヒメ＋サマエル※サマエルは特殊精霊合体を利用。マルコキアス＋ウンディーネ、あるいはシルフ、フレイミーズ、エアロス、アクアンズを利用）
●魔神オーディン
●鬼神ジコクテン
●鬼神ゾウチョウテン

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ジオンガをかけ続ける・ヤマ／通常攻撃・オーディン／通常攻撃・ジコクテン／タルカジャをかけ続ける・

ソウチョウテン／タルカジャをかけ続ける

【ワンポイントアドバイス】

攻撃回数が2～4回と多い。魔法マリンカリンにもじゅうぶん気をつけた方が良い。ジオ系の魔法が有効なので、ダメージ覚悟で動きを止めることを第一に考えて闘おう。

ハニエルの電撃。アオイのそれ。アークが飛び交い、メシア大聖堂は目も眩む輝きと衝撃におおわれた。

仲魔たちの援護でぼくの剣は力を帯びた。残りの仲魔たちも神の使いに牙をむいた。

「神に刃向かうものどもがどうなるか――」

ハニエルは声をとどろかせた。だが続くぼくの一撃で天使を包む輝きははじけた。

呆然とたたずんでいたトシキがやがて口をひらいた。

「たいした力をつけましたね」

感情を抑えた声だった。

「でもその使い方をまちがえています。このままではいつか破滅しますよ、きっと…」

ぼくは黙ってトシキに背を向けた。

NEUTRAL DATA FILE:21▶HANIEL

# 天使ハニエル

## 攻略手順

［品川に戻ってメシア大聖堂に行く］➡［ハニエルにこれからも神の為に働いてくれるか？　と聞かれる］➡［いいえと答える］➡［ハニエルと戦闘］

ニュートラルでカテドラルに入るためには、ハニエルを倒さなければならない。だから神のために働いてくれるかというハニエルの答えには必ずいいえと答えることが大切。この戦闘が終わると自動的に属性がニュートラルに決定される。ニュートラルルートには銀座B3Fにいる老人のところから入ることが出来る。さっそく銀座を目指そう。

## 【第22章】——進むべき道

エキドナを退け、ハニエルさえ打ち破ったあと、ぼくは非常な焦燥に襲われた。事態の真相から目を背けるわけにはいかなくなったのだ。

これは神と悪魔（あるいはいにしえの神々）の争いだ。そのことはもう歴然としていた。信仰、崇拝、畏れ…そういった美名のもとではあるが、どちらが人間を支配するかという、彼らの宿命的な衝突なのだ。人々はみずからの求めるところに従って、それぞれの側についた（あるいはつかされた？）。ガイア教徒、メシア教徒、テツオ、トシキ――。

だがぼくは？

その答えを求めて銀座へ行った。

「進むべき道を失ったらもういちどここへ戻ってくるがよい」――テツオと別れ、トシキも昇天してひとりになってしまったとき（もちろんアオイはいっしょだったが）、ぼくにそう言った老人に会うためだった。そもそもはじめに宿命的なビジョンをもたらした不思議な存在だ。二人と別れた後も、いったいこれからどうすればいいのか混乱していた。ぼくはその場でなにか確かなものを示してほしいと願ったものだ。だが老人は応えてくれなかった。自分でよく見きわめろ、とでも言うように。その後、ぼくはトシキとテツオに再会した。どちらも自分の選んだ道にぼくを導こうとした。だが拒んだ。どうしても確信が持てなかったからだ。二人に再会した後も、やはりぼくはひとりだったのだ。ぼくにはぼくの進むべき道があるはず…そんな思いだけが強

まった。

だがその道とは？

いまこそあの老人は答えてくれるのではないか。そんな気がしていた。

銀座。地下三階。

あのときから少しも時間がたっていないかのように、奥まった同じ場所に、深く首を垂れた同じ格好で、老人は座りこんでいた。

その姿を認めると、ぼくはまっすぐに近づいていった。

「カテドラルへ行け」

しゃがれた低い声が届く距離ではなかったが、はっきりと聞きとれた。

「…え？」

ぼくは足を止めた。

老人ははじめて顔をあげた。このとき、ぼくは不思議な気持ちに打たれた。いつかトシキのもとにあらわれた神の使いのように、老人の顔の特徴ははっきりと捉えることができなかった。それでいながら、あとになってきわめて印象的に思い浮かべることができた。この老人の存在は心のなかに直接きざみつけられたのだ。

「カテドラルは――」老人はゆっくりと言葉をもらした。唇はほとんど動かない。「法の神を奉じるものが神の家とすべく完成させようとしておる。それを阻止せんと混沌の神を崇めるものが奪い取ろうとしておる。おまえはどちらにも加担したくない…そうだな？」

ぼくは魔法にかかったようにうなずいた。

「なぜだ？」
「わからない…」
「いや…」老人はゆっくりと首をふった。「カテドラルをどちらの手に委ねても人間を支配する道具となろう。勝利は法の神のものか、混沌の神のものか——。どちらにせよ、それが人間に幸福はもたらさぬとおまえは考えておる」
ぼくには答えようがなかった。だが、ふとなにかがほぐれたような気がした。心のなかにずっとわだかまっていたものはそれだったのか、と。
「カテドラルへ行け」
老人はふたたび言った。
「行ってどうすれば…？」
ぼくは不安を隠さなかった。
「おまえはすでに知っておる。どうすればよいのか、なにをなすべきか…」
たぶん、それはおぼろげに見えていたのだと思う。だが真っ向から見据える覚悟がまだなかったのだ。ぼくはためらっていた。
「ここまでおまえはわしの願ったとおりの道をたどってきた。おまえを選んだ甲斐があったというものじゃ…」
老人はふっと笑った。
「あなたは…」
いったい何者——という言葉をのみこんだ。老人の姿は幻のように消えていた。そして背後の壁もまた。
ぼくたちは通路を前にしていた。

NEUTRAL DATA FILE:22▶THIS WAY

# 進むべき道

## 攻略手順

【銀座B3Fで謎の老人にカテドラルへの道を開いてもらう】

ここまでデータファイル通りに来た人は、すでに属性がニュートラルに決定されているはずなので、銀座の老人のところからしかカテドラルに侵入することは出来ない。老人からはカテドラルに入り神、悪魔とのけりを付けるようにと諭される。カテドラル内で属性が変化することはないので、エンディングまで道はひとつ。

# 【第23章】――カテドラル

東京湾上の巨大な人工島にそびえ立つ荘厳な建物は、まさしく神を迎える場にふさわしかった。仰々しく、圧倒的で、多くの人々に新しい世界の到来という期待を抱かせるに充分だった。だがぼくは欺かれはしなかった。その威容を目にしたのがある大きな試練のあとだったからだ。打ちのめされたぼくの目にカテドラルは人間の無力さを象徴しているにすぎないものと映り、絶望的な怒りだけがわきあがってきた。そう、あれはたしかに試練だったのだ。なぜなら、そのときはじめてぼくは自分のなすべきことを知った。というより、どうしてもそれをなし遂げてやる、と決意したのだ――。

カテドラルにいまだ神は降臨していない。メシア教徒たちの努力にもかかわらず、そこにはカオス教徒たちが入り込んでいた。さらにはそれぞれの守護者たちも。カテドラル内を二分し、互いに牽制しあっていた。法の神と混沌の神との対決がそこに凝縮されていたのだ。

まず出くわしたのは姿なき争いだった。

老人が開いてくれた通路をしばらく進むと、あたりのようすが変わり、カテドラルの内部に入ったのだと直感した。

しんとした通路が伸びていた。先のほうで三方に分かれている。正面には扉が見える。左右は行き止まりだった。そのまんなかに立ったときだ。両側から声が聞こえてきた。

「考えなおしてください」トシキの声だった。右のほうから聞こえてくる。

「あなたと戦うようなことはしたくない。千年王国はまもなく現実のものとなるのです。そうすれば法の神のもとに――」

「偽善者め！」左側からはテツオの声。「神や天使たちの言うことを鵜呑みにしているだけじゃないか。自分で考えることをやめた人間はそうなっちまうんだ」

どちらの声にも刺々しさが含まれていた。ぼくに向けられているのではなく、互いを罵りあっているらしい。だが二人の姿はどこにもない。声は続く――。

「きみは悪魔に魂まで売りわたしてしまったのですね」

「力がなければなにもできないってことはさんざん見てきただろう？　ここにはもうたくさんの悪魔が入りこんでいる。こんな状態のところへ神を呼べるというのか？　あとは神の手先どもを片付けるだけだ。そうすればここはカオスの城――」

「その前に神の怒りがくだるでしょう」

「四天王がいるかぎりそっちは最後の手が打てないだろう？」

「あの鬼神たちは封印されています。[※1]そちらにとっても使いようがないはず――」

「東京はもう守る価値がない。解放して――」

「あなたがそうするというのなら、ぼくはこの身をかけて四天王を倒します」

---

※1・封印されて……
平将門公によって、四天王はその力を封印されている。

「狂信者！」
「神に逆らう不届き者——」
二人の言い争いはますますエスカレートし、敵意もあらわに、とどまるようすがなかった。ぼくはいたたまれなくなり、二人の名を呼んだ。
「ショウ！」
「来ているのですね!?」
二人の声が同時に答えた。
「やっぱり来たんだな!?」
「四天王を倒してきてください！」
「いや、解放して仲魔にするんだ！」
てんでにそう叫んだあとは、ふたたび激しい罵りあいがはじまり、それ以上の呼びかけはむだだった。正面の扉を調べたが開かない。
別の声が聞こえた。
「四天王に会うがよい」
あの老人の声だった。

# カテドラル

NEUTRAL DATA FILE:23▶CATEDORAL

## 攻略手順

【銀座B3Fからカテドラル内部に入る】⬇【カテドラル内でロウヒーロー、カオスヒーローと出会う】⬇【東京の四つの方角に居る、鬼神四天王の話を聞く】

銀座B3Fからカテドラル内に入り1本道をまっすぐ進むと、ロウヒーロー、カオスヒーローが道を隔てて対峙している場所に出る。ゲーム中では四天王のうち2人以上倒していない場合に限ってその存在を彼らが話してくれる。後述するアイテムを入手するために必要になってくるので、4人全てを倒しにいく方が良い。

# 【第24章】東京守りし者

東京の四方に鬼がいる、という噂はどこかで聞いた。それが四天王のことだった。開かずの扉※1がある赤い屋根の建物は四天王の館と呼ばれていた。代々木※2、品川※3、上野※4、巣鴨※5の四ヶ所にある。なにか強い力がこもっているのを感じていた。その理由がわかった。それぞれに増長天、項目天、持国天、毘沙門天という鬼神が配されていたのだった。

開かずの扉の前に立つと、四門の玉※6が輝きはじめた。ぼくの導き手らしいあの老人が消えたあとに残されていたものだ。輝きが閉ざされた扉を照らした。

扉が開き、鬼神の姿があらわれた。

そこでなにをなすべきか、ぼくは確信がなかった。トシキは倒せと言った。

テツオは仲魔にしろと言った。

はじめに対面した代々木の増長天はこう言った——。

「さる宿命によりわれら四天王はこの地の四方に配された。われらの力をもってこの地を守護するために。だがいまやわれらの力を越えて厄災はふりかかった。もはや守護の役目は終った。われらを解き放て——」

---

※1・開かずの扉
ゲーム中では、品川でしもんのぎょくを手に入れた後であれば、あかずの扉を開けることが出来る。

※2・代々木
新宿から渋谷に下るルートの西方に位置している建物が増長天の館。

※3・品川
品川の街から見て南西に位置する建物が項目天の館。

※4・上野
上野の街から見て南東に位置している赤い屋根の建物。ディスティニーランドに行く際に通ったこの建物が持国天の館。

※5・巣鴨
池袋から上野に抜ける際に通る赤い屋根の建物が毘沙門天の館。

※6・四門の玉
ゲーム中では品川の2Fで手に入れることが出来る。

それがなにを意味するのかよくのみこめず、ぼくはためらっていた。
「その玉を持つものはわれらと力を競う定め。覚悟がなければ去るがよい――」
鬼神はいきなり雷電の力を放った。
「力を試されているのよ」アオイが言った。
逃げるわけにはいかない――とっさにそう感じた。
ぼくたちは挑戦を受け入れた。東京を守護するという鬼神は力があった。だがぼくたちは防戦からしだいに攻撃に転じ、一歩も退かずに戦いを続けた。
鬼神の攻撃がふと止んだ。
「ようやくわが力を凌ぐものがあらわれた――」
鬼神は言い、そして消えた。
残る鬼神たちとも同じようなやり取りがあった。
品川の項目天――。
上野の持国天――。
巣鴨の毘沙門天――。
いずれも楽な戦いではなかったが、結局、ぼくたちは凌ぎきった。このことがいったいなにを意味するのか――。
「将門公よ、ついにわれらの務めは終った。いまやこの地に守護者なし――」
毘沙門天がそう言いながら消えたとき、ぼくはにわかに不安をおぼえた。

四天王は東京の四辺にあって守護していた。だがその力をもってしても守りきれない混乱に見舞われた。この地上を舞台にした神々の争いが激化し、事態は最後の決着に向けて真の姿をあらわしてきた。だがここに至り、カテドラルに持ち込まれた法の神側と混沌の神側との対決は膠着状態に入っていた。いわば、どちらも最後の決め手を欠いていた。衰えたとはいえ、四天王の力がまだはたらいていたからだ。だがぼくたちはそれを取り除いてしまった――。

はっきりとそう気がついたわけではない。なにか釈然としない部分をもてあましていたがゆえに、ふくれあがる不安と戦いながら、ぼくたちはふたたびカテドラルへ向かっていた。

NEUTRAL DATA FILE:24▼GUARDIANS OF TOKYO

# 東京守りし者

## 攻略手順

〔代々木、品川、上野、巣鴨の四天王を倒す〕

前述の通り四天王は倒しておいた方が良い。洪水の後、四天王の館のあった場所で、ニュートラルの主人公が身に着けることが出来る最強の防具〝マサカドの防具〟が、手に入る。

# 【第25章】大洪水

トシキとテツオの言い争う声が聞こえた場所へ行くと、今度はそこに二人の姿があった。

両側が行き止まりになった通路の右側にトシキが、左側にテツオがリエというパートナーとともに立っていた。両者のあいだにきわめて険悪な空気が張りつめていた。

「ショウ――」

二人はわれ先になにか言おうとした。そのとき足もとが大きくぐらりと揺れた。二人ははっとして口をつぐんだ。一瞬のち、轟音とともに激しい揺れがはじまった。

「地震だ――」

ぼくは叫んだ。立っていられないほどの揺れだった。

「ああ!」よろめきながらも、トシキはむしろ高揚した声で叫んでいた。「ついに神の怒りが地上にくだされました――」

「なんだって!?」テツオがわめいた。「ちくしょう――」

揺れがどのくらい続いたのかわからない。そのあいだずっと二人は声をはりあげていた。

「邪悪な力に満ちあふれた東京は完全に姿を消すでしょう――」

「むだなことだ！　どうせ――」

やがて揺れはおさまった。

「神の家であるこのカテドラルからガイア教徒は一掃されます――」
「もう半分はこっちのものだ――」
二人はまだ言い争いを続けていた。
「外のようすを――」
アオイがぼくの腕をつかんだ。老人がひらいてくれた通路はふさがっていた。ぼくとアオイは入り組んだ通路を走りまわり、ようやく上へ向かう階段を見つけてかけあがった。
カテドラルの一階だ。そこはガイア教徒たちとメシア教徒たちが混在していた。
「見よ！　メシア教徒どもの言う神は地上にいる生き物すべてを抹殺しようとしたのだぞ！」
「われらが生きのびるためにもこのカテドラルを手にいれるのだ。メシア教徒どもをやっつけろ！」
「この暴虐を前にしてわれらの守護者たちもおいでになった」
ガイア教徒の乗っ取った区域※1ではそんなことが叫ばれていた。メシア教徒側※2では――。
「神よ、次の捧げものはなんにいたしましょう？」
「神がお怒りになられたのだ。汚れた世界を神が洗い流された！」
「大天使さまがたがおいでになったとか。ああ、神のお姿を目にできるのもも

※1・ガイア教徒の……カテドラルの1Fにあるカテドラルカオス街のこと。
※2・メシア教徒側……カテドラル1Fにあるカテドラルロウ街のこと。

う間近……」
彼らをほとんど突き飛ばさんばかりに押し退けながら、ぼくたちはかけまわった。
外への出口を前にしたとき、ぼくは恐ろしい予感のために思わず立ちすくんだ。アオイが黙って先に出た。
ぼくはあえぎあえぎ、あとに続いた。
アオイの長いため息を感じながら、なにが起きたのかすぐには理解できなかった。
カテドラルは東京湾上に浮かぶ巨大な人工島だ。周囲は海――だが東京湾からの眺めはこんなふうだったろうか？　街は？　北西方向にふたつばかり建物らしいものが見えるだけ。いや、もっと近くの水面からひとつぽつんと突き出した赤い尖塔――。
それが東京タワーの上部だということを、ぼくの心はしばらく認めるのを拒んでいた。だが事実は容赦なくしみこんでいく。
気がつくと、その場に座りこんでいた。東京は（ほとんど完全にといってよかった）水没していたのだ。
ぼくはのろのろとふりかえり、カテドラルを仰いだ。大洪水の後に唯一そびえ立っている巨大な建物。選ばれた者のみがたどりついた場所。壮麗さにうたれるはずもない。海の底に沈むのを逃れた身の幸運を喜べるわけもない。神の怒りがくだされた？　汚れた世界を洗い流した？　気にくわぬものを排除するために？　思いだすべきだった。かつて大破壊をもたらしたゴトウとトールマンとの対決のことを。あらたな世界を築きあげるために、神はまたしても力をふるったのだ。
怒りと同時に無力感がこみあげてきた。
ふと手に触れたものに目を落したとき、絶望的な疑惑のためにぼくは大声で叫びだしていた。四天王の力が神の横暴を辛うじて食い止めていたのではないか？　ところがぼくがそれを取り除いた。つまり、ぼくはまた

## 「水没したトーキョウ」

周囲は海――だが東京湾からの眺めはこんなふうだったろうか？　街は？　北西方向にふたつばかり建物らしいものが見えるだけ。いや、もっと近くの水面からひとつぽつんと突き出した赤い尖塔――。

もや神に利用されたのではないか——。
ぼくはさけびながら、水面に向かって思いきり四門の玉を投げつけた。
それは水面に届くか届かないかのうちに輝きを放ち、周囲が陽炎のように
ゆらめいた。そのため水面にほど近い空中に歪んだ穴があいたように見えた。
なにかがあらわれていた。はじめはさざ波立つ水面に映る影のようにとらえどころがなかったが、しだいに甲冑をつけた人のかたちをととのえていった。
「われは一千年の長きにわたりこの地を守り務めし平将門※3…」
毘沙門天がその名を呼んだ。鬼神の四面守護の宿命は将門の呪縛によるものだったのだ。
「わが務めも終わりに近づいた。この地は異形のものの争う舞台となり、もはや守るに値せぬ。なによりもそなたのような人の子があらわれた…。四方の守りを委ねた鬼神をも凌ぐ力を備えしそなたの出現こそ、この果てしなき争いを終らせ、新しき時代をひらくのであろう。おのれを責めることは無用…。これほどの厄災をもたらしてなお両者の争いに決着はついておらぬ。そなたの選りしほうが勝利を得るであろう…」
疲れたような深いため息をついたかに見えた。
「わが務めは終った」
将門の霊はふたたびそう言った。空中に浮かぶ大きな甲冑姿がゆらめくモザイクとなり、しだいにとらえどころのない陽炎にもどっていった。

※3・平将門
ゲーム中では、カテドラルから見て北西に位置する皇居のB5Fで会うことが出来る。主人公たちに将門の刀を託した後、消え去ってしまう。

「よってわが使命と力をそなたに譲ろう」
陽炎のようなゆらめきが一瞬ぼくをつつみこんだ。
あるいは幻だったとしても、ぼくは落胆しなかっただろう。怒りも絶望も決して癒されはしなかったが、それらを越えて、なにかこれまでに感じたこともないものがひろがっていた。
「ショウ」
背中でアオイの声がした。その落ち着いた響きで、彼女がすべてを理解していることを感じた。ぼくの決意、ぼくが悟ったあらゆること…。アオイは励ますようにうなずいた。
ぼくはもういちど変わり果てた世界を眺めわたし、それからカテドラルをふり仰いで言った。
「行こう」

地下一階の閉ざされた扉のある場所へ戻った。
そこにトシキとテツオの姿はなく、ふたたび声だけがぼくを両側からこづきまわした。
「見たか？　やつらのやりくちを！」
「この新たな世界は神を迎えるのです！」
「ショウ！　こんな勝手なことを許していいのか？　上でふんぞりかえっている天使どもをやっつけるんだ。力を貸してくれ！」
「道をあやまってはいけません！　いっしょに戦ってください、地下を占領した悪魔たちを倒すのです！」
ぼくはどちらにも答えないまま、閉ざされた扉の前に立った。
「行くがよい」

あの老人の声が聞こえた。
「おまえの選んだ道は正しい――」
扉が開いた。

■追加戦闘データ

## 天魔ラーヴァナ【都庁最上階で遭遇】

LV69・HP2160・MP256・使用魔法　ザンマ／ディアラマ

【パーティー】

●ショウ　LV65・装備　ヒノカグツチの剣／くにとものじゅう／せんこうだん／まさかどのかぶと／まさかどのよろい／まさかどのこて／まさかどのぐそく

●アオイ　LV65・装備　クチナワの剣／レールガン／せんこうだん／シュツルムヘルム／アーガマスーツ／シュツルムグラブ／シュツルムレッグ

【仲魔】

●天魔ヤマ
●魔人オーディン

●龍神ヴリトラ
●鬼神タケミカヅチ　〔ヒノカグツチ＋ウンディーネ※特殊精霊合体を利用。ウンディーネは鬼女＋鬼女、または龍王＋龍王の同種合体で出来る。あるいは夜魔＋龍王＋女神〈三種の中でもっともLVが高いことが条件〉＝鬼神を利用しても良い

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／マハジオンガまたはジオンガ・ヤマ／通常攻撃・オーディン／通常攻撃・ヴリトラ／通常攻撃・タケミカヅチ／マハジオンガまたは攻撃

【ワンポイントアドバイス】

1回に主人公達に与えるダメージが80ポイント程度で、また攻撃回数も3～6回と手ごわい。魔法もメキドやマハンマ等を使ってくるのでとてもやっかい。魔法もあまり効かないので全員が地道に攻撃するしかないだろう。

## 天魔インドラジット 〔ラーヴァナに続いて出現〕

LV81・HP2060・MP240・使用魔法　ジオンガ／マハジオンガ

／マカラカーン

【パーティー】

●ショウ　LV65　●アオイ　LV65

※装備はどちらも天魔ラーヴァナ戦闘時同データ。214ページ参照

【仲魔】

●天魔ヤマ

●魔人オーディン

●龍神ヴリトラ

●鬼神タケミカヅチ

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ジオンガ・ヤマ／通常攻撃・オーディン／通常攻撃・ヴリトラ／通常攻撃・タケミカヅチ／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】

ラーヴァナの息子インドラジットとの戦闘。父親の次に即連戦となる。ガンでの攻撃がいっさい効かず、魔法もたいして効力がない。父親よりもさらに手ごわい。電撃系の魔法が少しは効くので、ヒロインにジオンガをかけさせながら、地道に闘って行くしか方法はないだろう。

## 魔神ヴィシュヌ 【都庁最上階で遭遇】

LV92・HP2420・MP310・使用魔法　メギド／マハンマ／ディアラマ

**【パーティー】**

●ショウ　LV67　●アオイ　LV67

※装備はどちらも天魔ラーヴァナ戦闘時同データ。214ページ参照。

**【仲魔】**

●天魔ヤマ　●魔人オーディン　●龍神ヴリトラ　●鬼神タケミカヅチ

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・ヤマ／通常攻撃・オーディン／通常攻撃・ヴリトラ／通常攻撃・タケミカヅチ／通常攻撃

**【ワンポイントアドバイス】**

1回の攻撃で150～160のダメージを与えてくるうえに、万能系以外の魔法はいっさい受け付けない。またガンでの攻撃もあまり期待した成果は得られない。魔法もマハンマやディアラマを使ったりとかなりの強敵。地道にHPを気にしながら攻撃していくのが無難だ。

NEUTRAL DATA FILE:25▶THE BIG DISASTER

# 大洪水

## 攻略手順

［カテドラルに戻って再びロウヒーロー、カオスヒーローと会う］➡［大洪水が起こる］➡［カテドラル、ロウ街でタコを助けるか、カテドラル、カオス街でカメを助けると、水上移動が可能になる］➡［外の様子を見に行く（一度水上に出る）］➡［ロウヒーロー、カオスヒーローに都庁に居るラーヴァナとヴィシュヌの対立の話を聞く］➡［都庁左の塔48Fでヴィシュヌと戦闘］➡［都庁右の塔48Fでラーヴァナと戦闘］➡［カテドラルに戻り、ロウヒーロー、カオスヒーローと会う。決別する］➡［ロウヒーロー、カオスヒーローが対峙していた場所近くの開かずの扉から中に入り、謎の老人にミカエルとアスラ王を倒せと言われる］

カテドラル、カオス街かカテドラル、メシア街のどちらかでタコかカメを助けよう。どちらか一匹しか助けることは出来ない。助けてやったタコかカメは水上移動手段となる。水上に出て外の様子を見た後でカオスヒーロー、ロウヒーローに再び会うと、都庁での神と悪魔の対立の話を聞かされる。都庁に向かう前に、まずは皇居に立ち寄って将門に会っておこう。貰える将門の刀は、ヒノカグツチには劣るものの、このイベント自体がニュートラルの立場について触れているので、ゲームをより深く理解出来る。四天王の館のあった場所にいって〝将門の防具〟を入手しておくことも重要。ニュートラルでの主人公の最強防具なので必ず手に入れておきたい。忘れずにそれらを装備した上で都庁に向かおう。先陣をきって地上に降りてこようとするヴィシュヌと、それを防ごうとするラーヴァナとが、都庁の左の塔、右の塔にそれぞれ陣取っている。戦闘を終えてカオスヒーロー、ロウヒーローと再び会うと、ここで完全に3人は決別してしまう。それまでは開かなかった前方の扉に入り、謎の老人からミカエル、アスラ王を倒せと言い渡されることになる。

# 【第26章】——悪魔

炎の壁が立ちはだかる。

「人間よ…神に創られし出来損ないの人形よ…しょせんおまえたちは滅びゆく定め」

もうためらいはない。これまでにない力が宿っているのを覚えながら、ぼくは剣をふりあげる。と、炎の壁がよじれ、無数の小さな炎を噴きあげる。それが巨人の姿に再生された。

行く手を阻むのは魔王スルト※1——。

**魔王スルト出現！**

LV100・HP2110・MP360・使用魔法　マハラギオン／ほのおのかべ／ファイアブレス

【パーティー】

---

※1・魔王スルト
北欧神話における炎の巨人魔王スルト。彼はカテドラルのB2Fで待ちかまえている。

●ショウ　LV75・装備　ヒノカグツチの剣／レールガン／せんこうだん／まさかどのかぶと／まさかどのよろい／まさかどのこて／まさかどのぐそく
●アオイ　LV75・装備　クチナワの剣／レールガン／せんこうだん／シュツルムヘルム／アーガマスーツ／シュツルムグラブ／シュツルムレッグ

**【仲魔】**

●魔王ダゴン　（インドラ＋キクリヒメ＋ヴァンパイア※ヴァンパイアはカテドラル内に出現。キクリヒメ＝ユルング＋ダーキニー）
●魔神インドラ　（ラクシュミ＋スキュラ＋フドウミョウオウ※神族＋鬼神族＋神族＝魔神、その他に神族＋魔族＋魔族でも可能）
●天魔セイテンタイセイ　（ラクシュミ＋ランダ＋インドラジット※神族＋鬼神族＋鬼神族＝天魔）
●鬼神ビシャモンテン　LV75（ニオウ＋ウンディーネ※特殊精霊合体を利用。鬼女＋堕天使＝闘鬼、闘鬼＋龍王＝鬼神でも可能）

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃・ダゴン／通常攻撃・インドラ／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／

通常攻撃

**【ワンポイントアドバイス】**

攻撃力が高く、一回で130ポイント程度のダメージを食らう。ヒロインのジオンガを攻撃の中心に据えよう。

スルトの剣は炎を生みだす。ひとなぎごとに壁となり、激流となり、鞭となってぼくたちに襲いかかる。

アオイが力を放つ。たて続けに放つ。それが相手をとらえたとき、ぼくは踏みこむ。仲魔たちの影も踊る。ぼくは動きを止めたスルトの剣に狙いを定めた。

一撃ごとに炎がはじける。

スルトの逆襲。炎の輪がぼくたちを追いつめる。それをアオイがかろうじて押えこむ。勢いの弱まった炎を飛び越え、ぼくは全力で力を叩きこむ。

ぼくの剣はスルトの剣を打ちおった。

炎が噴出する。だがそれはいったんふくれあがってスルトを包むと、今度は逆にうずまきながら縮んでいった。

スルトは闇に引きもどされた。

竜にまたがった魔王アスタロト※2——。

---

**※2・魔王アスタロト**
バビロニアの女神イシュタルが魔界に落ち変身したのが魔王アスタロト。B3Fで待ちかまえている。

「神に従うのみのあわれな仔羊よ、かつては美と豊穣の女神であったこの身を魔界に落されたうらみ、代わりに受けるがよい！」

## 魔王アスタロト出現！

LV98・HP1920・MP450・使用魔法　マリンカリン／マカジオンガ／ラクカジャ

**【パーティー】**

●ショウ　LV78
●アオイ　LV78

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

**【仲魔】**

●魔王ダゴン
●魔神インドラ
●天魔セイテンタイセイ
●鬼神ビシャモンテン

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃・ダゴン／通常攻撃・イ

ンドラ／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／通常攻撃

**【ワンポイントアドバイス】**

スルトに比べれば弱く、攻撃も１００前後のダメージしか与えてこない。しかし魔法攻撃はいっさい受け付けない。ヒロインのガン攻撃の追加効果に期待しよう。

邪龍が咆哮した。あたりに衝撃の波がうねる。

すぐにアオイが立ちなおり、力を放つ。だがふたたび邪龍の咆哮。いっそう大きな衝撃がぼくたちを打ち倒す。そこへアスタロトの矛の洗礼。ぼくはかなり大きなダメージを受けた。転がり逃れながら、アオイの力が封じられているのに気づいた。アオイが力を放つたびにアスタロトの姿は輝きを帯びていくのだ。

仲間たちの魔法も効かない。アオイも気づき、剣を手にした。醜いアスタロトの邪龍はアオイを見つめる。アオイは魅入られたように、剣をふりあげた腕をゆっくりとおろした。アスタロトが矛をかまえている――。

ぼくは力をふりしぼって起きあがり、アオイを突きとばしてから邪龍の頭に一撃を加えた。

長い咆哮が悲鳴に変わる。

「なぜイシュタルの姿を取り戻させてはくれぬ――」

アスタロトもまた闇へ追い返した。

「神は永きにわたって使えたわが身にこのような報いをもって魔界に追い落とした」

奇怪な姿の魔王アリオク※3は巨大な腹部の襞をふるわせた。
「愚かなる神の手先よ、わが復讐の牙を受けるがよい――」

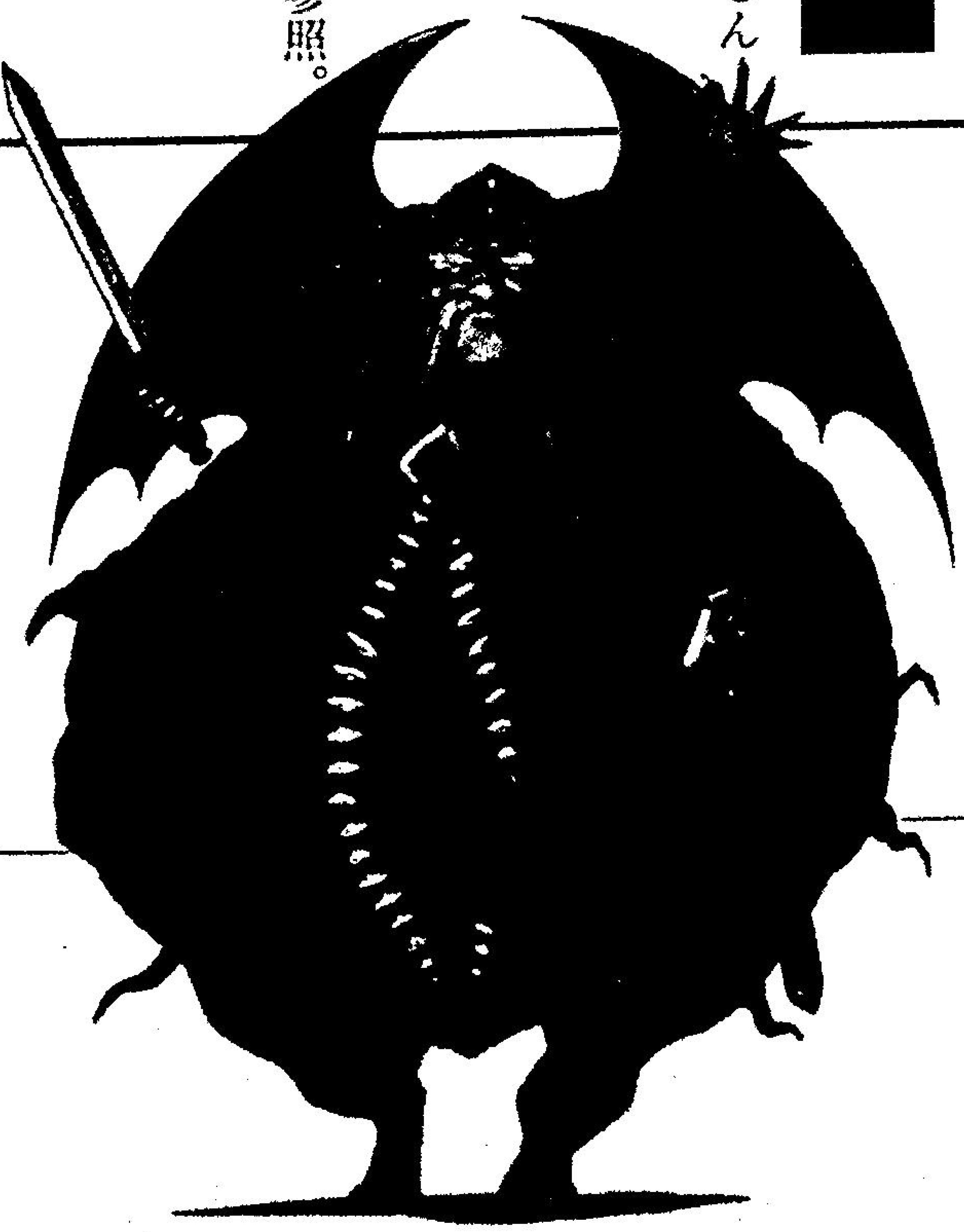
## 魔王アリオク出現！

LV85・HP1820・MP180・使用魔法　プリンパ／かいしん／テトラカーン

【パーティー】
●ショウ　LV79
●アオイ　LV79
※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】
●魔王ダゴン
●魔神インドラ
●天魔セイテンタイセイ
●鬼神ビシャモンテン

【攻略法】



※3・魔王アリオク　混沌を司り、剣の騎士ともよばれる。カテドラルのB4Fで戦闘になる。

ショウ／防御・アオイ／リムドーラ・ダゴン／ジオンガ・インドラ／ジオンガ・セイテンタイセイ／防御・ビシャモンテン／マハブフーラ

**【ワンポイントアドバイス】**

アリオクは剣とガンの攻撃をいっさい受け付けない。魔法が攻撃の中心となる。ヒロインのリムドーラを攻撃の要としよう。従ってＭＰに気を配ることが大切。まほうびんのアイテムを用意しておくと良い。

アリオクは剣の騎士とも呼ばれる復讐の堕天使だ。醜い手のなかにある剣はまさしく長大な牙のように素早く、鋭くひらめいた。それが触れなくてもぼくを切り裂くのに充分なほどに。そして醜悪な巨体はこちらの剣を受けつけない。ぼくはこの相手の前にほとんど無力だった。

仲魔たちはそれぞれの力を放った。

アリオクはなにか得体の知れない響きを発してそれに応えた。ぼくとアオイはなにかぞっとするような感じ以上のものを受けなかったが、仲魔たちは混乱をきたし、攻撃はてんでばらばらな方向に乱れ飛んだ。ぼくたちは狂ったようにうずまく味方の力をかわさなければならなかった。

ぼくは仲魔たちを戻しかけた。アオイが押しとどめた。力を集中しているのがわかった。見えないうねりが生じ、アオイ自身が危険なほどに高まっているのが感じとれた。

ぼくが叫ぶより先に、アオイは持てる力のすべてを放った。

アリオクがわずかにたじろいだ。仲魔たちはふたたび攻撃に転じた。アオイはさらに力を注ぎこんだ。

叫び声も歪んでしまうような衝撃がかけぬけた。ぼくは体をよじりながら、はじけたアリオクの体がぐちゃぐちゃにうずまいて闇の一点に吸いこまれていくのをようやく見届けた。
アオイはぐったりと崩れ落ちた。

ぼくたちの前にゆっくりとふたつの人影があらわれた。ぼくもアオイもひどく消耗していた。だがそのせいではない。これほど重い気持ちになったのは。
双方ともしばらく黙ってたたずんでいた。リエというパートナーがなにか言いたげにぼくのほうを見ていたが、口をきったのはテツオだった。
「やっぱり神の側についたのか。見損なったぜ。やつらの——」
言いたいことはよくわかっていた。
「わかってる」ぼくはテツオをさえぎった。「うんざりだ」
テツオはほうというように眉をあげたが、そのまま口をつぐんでぼくを見まもった。そんなふうにきっぱりとした態度を見せたぼくになにかを感じとったからだろう。
「ぼくは二度も神の無慈悲さを見せつけられた。ミサイルによる大破壊と大洪水と——」
有無を言わせぬその独善。うんざりだ、とぼくはもう一度言った。
「だから神の降臨に加担する気なんかこれっぽっちもない」
「なら——」
「ぼくはどちらの側にもつかない」
じゃあなぜ、と言いかけたテツオを今度もさえぎった。

「どちらにもこの世界に干渉するのをやめさせたい」
　テツオがなにか言いかけたとき、背後に大きな影が浮かびあがった。
「神の降臨を望んでいないというのはまことか？」
　複数の腕がゆらめいた。
「アスラ王！」テツオがふり仰いだ。
　ぼくは異形の影をまっすぐに見あげてこう答えた。
「だれの支配も望んでいない」
　影はしばらく沈黙を続けた。テツオが目をぎらつかせながらぼくをふりかえった。
「アスラ王※4をも倒すつもりか？」
　大きな影は動じたようすもなかった。
「われらは唯一神によっておとしめられたもの。かつてわれらこそ神であった。長い熾烈な争いの末、姿を変えられ、おとしめられ、神々の座から追い落とされた。そして悪魔と呼ばれるようになった。これはわれらの復讐だ」
「なぜぼくたちが巻き込まれなくてはならない？」
「神は故意に隠している。人間の崇拝と信仰がなければ神は力を失うということを。かつて神は絶大な力をふるった時があった。だがしだいに増長した人間どもは神への崇敬を忘れていった。神は力を失っていった。それで人間どもは満ち足りたか？　いや、混乱すら兆してきたではないか。神にとってもわれら

---

※4・アスラ王
カテドラルB8Fで待ちかまえる天魔アスラ王。カオス側の最高指揮官。彼の上にはルイ・サイファーこと天使長ルシファーがいる。

にとっても、これは失地回復の機会だった。闇の底に押しこめられていたわれらの力はよみがえり、ふたたびこの世界に足がかりを得た。神もまた気がついたのだ、失われたこの地上の支配を取り戻すときだ、と。われらは原初の混沌の力をここにもたらす。ありとあらゆる力の混在した世界をよみがえらせよう。だが唯一神のもとにもたらされるのは法の一元支配。人間は唯一無比なる神の道具――」

「道がそのふたつだけのはずがない――」

ぼくは叫んだ。体がふるえた。

「なるほど。ただ…」異形の影は声にあざ笑いの響きを含ませた。「われわれは同じ問題を抱えていることを忘れるな。わたしがバランスの一方の重石だということを。もしわたしが退けばたちまち大天使ミカエル※5が神を招くだろう。ここにわたしの力があるからこそ、やつもそれができないでいる」

ぼくは言外の含みを受け入れた。いまさらいったいどういう罠があるという？　失うべきものはなにもないはずだ…。まず倒すべきは大天使ミカエル※6。そうすればとりあえずは神の降臨を阻止できる。そして――。

「ショウ」背を向けたぼくにテツオが呼びかけた。「おれはおまえと戦いたくない」

彼がどのくらい本心からそう言ったのかはわからない。だがこのときぼくはほとんどなにもかも投げだしそうになった。失うものはないだって!?　そのこ

---

※5・大天使ミカエル
神側の最高指揮官。カテドラルの8Fで主人公たちを待ち受けている。彼の上にもさらに絶対的な神が控えている。

※6・まず倒すべきは……
ゲーム中では、アスラ王と会って、倒さずにミカエルと戦闘になることはない。

とを考えるのを拒んでいたのだ。トシキ、そしてテツオ。ぼくは異なる道を選んだ。二人と戦わねばならない——。

■追加戦闘データー

## 魔王ベルゼブブ
【カテドラル西の島で遭遇】

LV108・HP2710・MP433・使用魔法　テンタラフー／どくガスブレス／しへのみち

【パーティー】

●ショウ　LV82

●アオイ　LV82

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

●魔神ヴィシュヌ　（ラクシュミ＋ハリティ＋インドラ）

●魔王バエル　（インドラ＋ラクシュミ＋ダゴン）

●天魔セイテンタイセイ　（ラクシュミ＋ランダ＋インドラシット※
神族＋鬼神族＋鬼神族＝天魔）

●鬼神ビシャモンテン　（ニオウ＋ウンディーネ※特殊精霊合体を利用。鬼女＋堕天使＝闘鬼、闘鬼＋龍王＝鬼神でも可能）

**【攻略法】**

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・ヴィシュヌ／通常攻撃・バエル／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／通常攻撃

**【ワンポイントアドバイス】**

攻撃力が高く1回の通常攻撃で150～160のダメージを与えてくる。攻撃回数も5～8回と多いのでパーティー全員に攻撃してくる。万能のメギド以外の魔法はいっさい受け付けない。逆に魔法攻撃するとHPが回復してしまう。地道な攻撃が無難(ぶなん)だ。

# 悪魔

## 攻略手順

【B2Fスルトと戦闘】↓【B3Fアスタロトと戦闘】↓【B4Fアリオクと戦闘】↓【B6Fルイ・サイファーと会う】↓【B7Fカオスヒーローと戦闘。夜魔リリスと戦闘。ベリアルの壺入手】↓【アスラ王への部屋への扉を謎の老人に開けてもらう】↓【アスラ王と戦闘】

B6Fでルイ・サイファーに出会う。彼は品川の西方に浮かぶ西の島のことについて語り、去って行く。この島にいる魔王ベルゼブブのことは、ニュートラルでは無視しても構わない。またリリスとの戦闘で手に入れるベリアルの壺は、六本木でベリアルを封じ込めたわきみのつぼのこと。この壺は、れんきの剣と合体させることで、ヒロインが装備出来る最強の剣〝かりゅうけん〟を作り出すことが出来る。次にあげたれんきの剣の合体データを参考にして欲しい。

**【れんきの剣合体システム】**

れんきの剣＋テング＝ふうじん剣
れんきの剣＋タケミカヅチ＝らいじん剣
れんきの剣＋ベリアルの壺＝かりゅう剣
※れんきの剣は四天王の館に出現するヤクシャ、ラクサーシャを倒すと入手出来ることがまれにある。

## 【第27章】――神々

カテドラルを上へと向かう。

「悪魔の誘惑に負け、その身を堕落させた罪深きものよ」

ぼくたちの前に輝きが立ちはだかった。大きな翼のある姿が浮かびあがる。

セラフ天使ガブリエル※1――。

### セラフ　ガブリエル出現！

LV96・HP1700・MP370・使用魔法　マハジオンガ／ブフーラ／マカラカーン

【パーティー】

●ショウ　LV71

●アオイ　LV71

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

※1・ガブリエル　水の天使。セラフ3天使のひとりだ。カテドラル2Fで待ちかまえている。

●天魔インドラジット　（サマエル＋トロール＝ソロネ、ソロネ＋ハリティー＝ラクシュミ、ラクシュミ＋サマエル＝インドラジット）
●魔人フドウミョウオウ　（オーディン＋ダーキニー＋ラクシュミ）
●鬼神ニオウ　（タケミカヅチ＋ウンディーネ）
●龍神ペクヨン　（ヴリトラ＋ウンディーネ）

**【攻略法】**

ショウ／防御・アオイ／リムドーラ・インドラジット／ジオンガ・フドウミョウオウ／アギラオ・ニオウ／EXTRA（ファイアブレス）・ペクヨン／EXTRA（ファイアブレス）

**【ワンポイントアドバイス】**

剣、ガンでの攻撃をいっさい受け付けない。有効なのは火炎系、万能系、衝撃系の魔法のみ。ジオ系はダメージこそ与えられないが動きを止められる。長期戦は必至。パーティーのMPに注意しながら闘おう。

翼が広がる。無数の小さな輝きがぼくたちに襲いかかる。ぼくたちは凍りついたようにその場に釘づけ。
「神の千年王国の生贄となれ――」
アオイがはっと立ちなおる。衝撃が走る。天使の輝きがゆらめく。すかさず剣をふりあげて飛びこむ。だがぼくの攻撃は逆効果。大きな輝きに向かって剣をふりおろしたままの姿勢でぼくはおののく。力が抜けて

いく。奪われる――。
ガブリエルは水の天使。仲魔たちは炎で攻める。神の使いを前にたじろぐことのない攻撃。アオイが加わる。全力をこめて衝撃を引き起こす。
炎のなかでセラフ天使の姿が粉砕された。

続いてセラフ天使ウリエル※2、さらにはラファエル※3が行く手を阻んだ。ともにアオイや仲魔たちの魔力をはねつける相手だった。
どちらも熾烈な長い戦いになったが、ぼくたちは乗り越えた。

## セラフ　ウリエル出現!

LV83・HP2310・MP340・使用魔法　シバブー／テトラカーン

【パーティー】

●ショウ　LV67

●アオイ　LV67

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

※2・ウリエル
大地の天使。3Fで戦闘となる。

※3・ラファエル
風の天使。カテドラル4Fで待ち受けている。

●天魔インドラジット
●魔人フドウミョウオウ
●鬼神ニオウ
●龍神ペクヨン

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・インドラジット／マカラカーンまたは攻撃・フドウミョウオウ／通常攻撃・ニオウ／通常攻撃・ペクヨン／EXTRA攻撃または通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】

攻撃魔法は全く効かない。ひたすら攻撃するのが無難。追加効果を期待してヒロインにはガン攻撃をさせるのも有効。攻撃をはね返すテトラカーンを使ってくるので注意が必要だ。

## セラフ　ラファエル出現！

LV91・HP2020・MP380・使用魔法　ブフーラ／マハブフーラ／マハジオンガ

【パーティー】

●ショウＬＶ71
●アオイＬＶ71
※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】
●魔王ダゴン
●魔神インドラ
●天魔セイテンタイセイ
●鬼神ニオウ

【攻略法】
ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃・ダゴン／通常攻撃・インドラ／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ニオウ／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】
攻撃魔法はいっさい効かない。またマハジオンガ、マハブフーラで動きを止めてくる。地道な攻撃が一番有効だ。

三人のセラフ天使たちとの戦いに迷いはなかった。

トシキの姿を見たとき、かすかな望みが消え失せたのを感じた。恐れていたのはこれだった。
「とうとう悪魔に魂を売ったのですね。きみがともに同じ道を歩んでくれることを願っていましたが…」
硬い声でトシキは言った。
「神も悪魔も関係ない」
ぼくはテツオのところで言ったのと同じことを繰り返した。どちらの側にもつく気はない、人間はどちらの支配も受けるべきではない。それがぼくの選んだ道だ、と。
「人間だけの道？」トシキは憐れみさえ浮かべてみせた。「人間は弱く、悩み迷うものです。正しい道に導くものが必要です。ぼくはそのために神に選ばれたのです。きみが神の降臨を阻止しようというのなら、それが悪魔のためであろうとなかろうと、どちらでも同じこと」
しばらく沈黙が続いた。ぼくたちはもう相容れない。そのことをお互いに確認しあうための沈黙だった。そして次に言うべきことを口にするきっかけを待っていた。だがぼくには言えなかったと思う。
「ショウ…」やがてトシキが言った。「きみが自分の道を進もうとするなら、まずぼくを倒すことです」

**超人ロウヒーロー出現！**

ＬＶ99・ＨＰ2250・ＭＰ300・使用魔法　ハンマ／ディアラマ

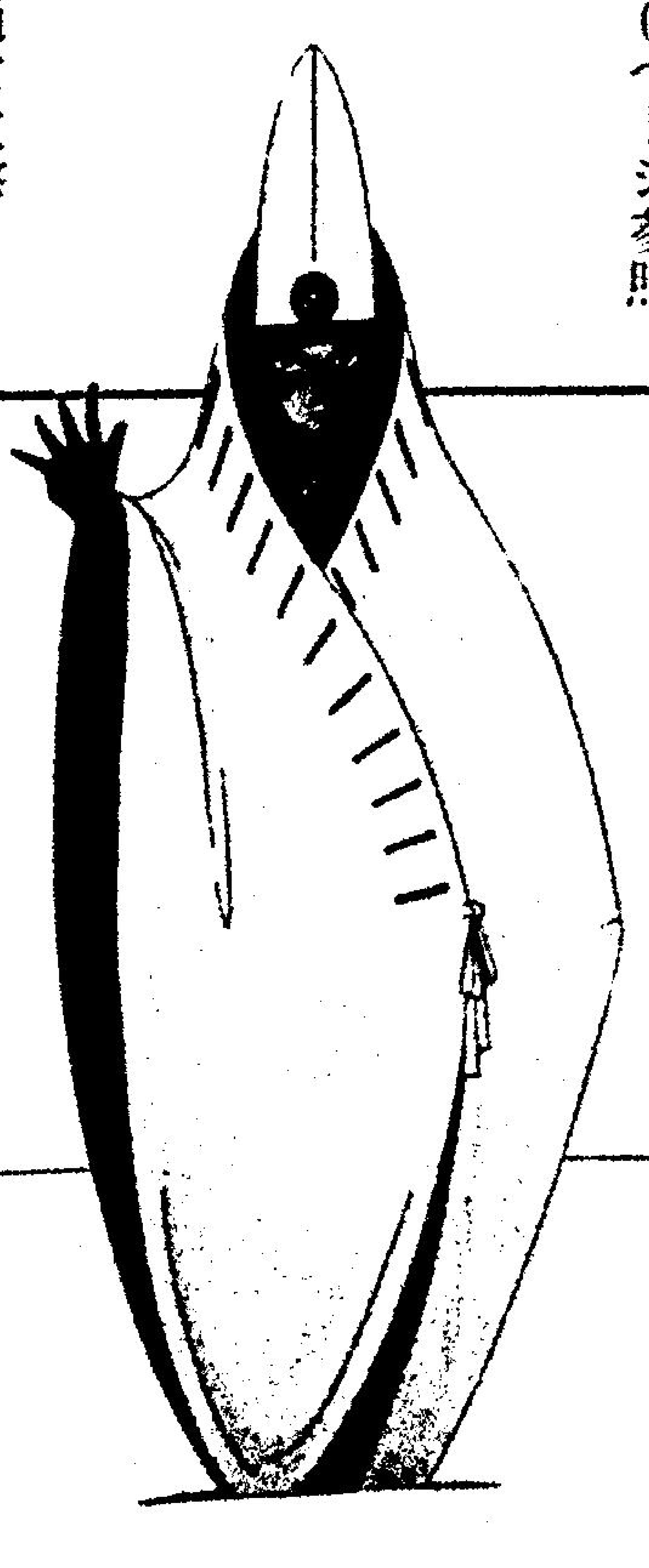
【パーティー】

●ショウ　LV81
●アオイ　LV81
※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】
●魔王ダゴン
●魔神インドラ
●天魔セイテンタイセイ
●鬼神ビシャモンテン

【攻略法】
ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃・ダゴン／通常攻撃・インドラ／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】
弱い。80程度のレベルがあればオートで闘っても勝てる。やっかいなのはディアラマを使うことくらいか。



それしかないのだろうか？　気がつくと、ぼくは心のなかでそう繰り返していた。洪水のあと、無慈悲で身

勝手な神に対してどれほどの怒りをかきたてられたか。それすら忘れていた。

トシキはじっとたたずんだまま、ぼくを見つめていた。ぼくは愚かしいほどに動揺していた。むしろ敵意とか憎悪のような気配を見せてくれれば楽だったのだ——。

「なぜかかってこないのです。自分が正しいと思うならできるでしょう？ きみが神に忠誠を誓うか悪魔の力を捨ててここを去るかしないかぎり、ぼくはここを動きません。これがぼくの道です」

ぼくはあえいでいた。心は乱れ、いろいろな思いがかけめぐった。永遠の時がたったかに思えた。だがようやくひとつの出口を見つけた。ぼくは剣を握りしめた。トシキがそうしたように、ぼくの決意と覚悟をも示さなければ——。

本当にそれをトシキに向かってふりおろすつもりだったかどうか——わからない——ぼくは剣をふりあげた。

そのときだった。白い光がトシキの体をつつんだ。ぼくもまたなにか激しい衝撃を受けた。

続いて起きたことをすぐに理解することができなかった。

白い光のなかに十字架にかけられたトシキの姿が浮かびあがっていた。

「これでよい」

どこからか声が響いた。

「正しき神なき力は真の悪魔を生みだす。それがおまえだ。人間のために、だと？ 偽救世主よ。呪われた人の子よ。おのれの道のために友を倒そうとした…」

十字架はゆっくりと浮かびあがり、その背後に大きな輝きがあらわれた。大天使ミカエル——。

「だがこれでよい」大天使はもういちど言った。「これを待っていたのだ。神の降臨のためにその身を犠牲にしてこそ真の救世主。呪われた人の子にその身を挺した救世主の昇天はまさに神の御心にかなうであろう——」

ぼくは呆然としたままだった。おのれの道のために友を倒そうとした——大天使の言葉のままに、激しい後悔に身をまかせかけた。

アオイがはっと息をのんだ。そしてぼくの腕をぎゅっとつかんだ。

「もしかしてトシキはあのときから——」

突然、ぼくはこの一幕の意味を悟った。

六本木でネビロスに魂を奪われた。ぼくたちはそれを取り戻し、神の使いに託した。その後トシキはメシアとして復活した。そしてふたたび——いや、トシキの復活は幻だったのだ。だれにとっての幻か？　ぼくたちにとって？　トシキにとって？　彼の魂はずっと夢を見ていた…。

すべてはしかるべき神側の手によって運ばれていたのだ。トシキもまた神の道具だったにすぎない。それでも彼の魂がやすらかだと？　信じられない——。

ぼくは言葉もなく、怒りだけを大天使ミカエルにふりむけた。

「わたしに挑むつもりか？　おまえならあるいはそれもできよう。だがそうすればこのものの魂も昇天できぬのだぞ——」

ぼくは大天使の言葉の終らないうちに剣をかざした。

**セラフ　ミカエル出現！**

V116・HP10000・MP340・使用魔法　マハラギオン／

かいしん／メキドラオン

【パーティー】

●ショウ　LV82

●アオイ　LV82

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

●魔神ヴィシュヌ

●魔王バエル

●鬼神ビシャモンテン

●天魔セイテンタイセイ

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・ヴィシュヌ／通常攻撃・バエル／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】

ロウ側最後の敵だけあって強い。魔法メキドラオンには注意。全員が150ポイント前後のダメージを食らうこともある。攻撃力も高く、通常の攻撃で160～170ポイントのダメージを食らうこともある。

魔法がいっさい効かないことに注意（万能系以外）。補助魔法のタルカジャなどは有効なので、まめにかけてやろう。ヒロインのＭＰにも注意。回復の魔法が使えなくなるとつらい。

なんども叩きつけられ、ねじふせられ、炎に責められた。地を這う虫のようにのたうちながら、それでもなお戦いを挑み続けた。宿命も使命感もありはしない。ただ怒り。激しい憤り。それに突き動かされていなければ、続けることのできない戦いだった。

気がつくとミカエルの輝きは薄れつつあった。大天使はなにか言いかけた。だがもうこの世界にとどまる力はなかった。

大天使ミカエルは消えた。十字架もまた――。

トシキの魂がどうなったのか？　かつてトシキは神のもとに導かれることを望んでいた。このときでもやはりそう願っていただろうか？

ぼくは自分に言いきかせるしかなかった――ぼくたちは神の道具ではない。

「大天使ミカエル」

「わたしに挑むつもりか？　おまえならあるいはそれもできよう。だがそうすればこのものの魂も昇天できぬのだぞ――」ぼくは天使の言葉の終わらないうちに剣をかざした。

## NEUTRAL DATA FILE:27▶GODS

# 神々

### 攻略手順

［2Fガブリエルと戦闘］➡［3Fウリエルと戦闘］➡［4Fラファエルと戦闘］➡［ロウヒーローと戦闘］➡［ミカエルの部屋への扉を謎の老人に開けてもらう。謎の老人が太上老君の正体を表わす］➡［ミカエルと戦闘］

カテドラルの7Fでロウヒーローと対面すると有無を言わさず戦闘となる。彼を倒したうえでさらに奥に進むと、謎の老人すなわち太上老君が現れ、ニュートラルの立場で進んできた主人公の立場を正当化し、さらに最後のミカエルの部屋への扉を開いてくれる。

## 【終章】――ファイナル・エンディング

闇を背にしてテツオとそのパートナーがたたずんでいた。これからはじまることを思い、ぼくは大きく息をついた。

「ミカエルをしりぞけたか…」

テツオの背後で声がした。しばらくなにか思いめぐらせるような沈黙があったのち、闇の声はこう言った。

「これで神の降臨は食い止めた。恐るべき人の子よ…」

ひにくな響きがこもっていた。闇の声は続く。

「ミカエルをも退けたのであれば、わたしをもそうすることはあるいは可能であろう。おまえはそれだけの力を手に入れた――」

テツオが肩をぴくりと震わせた。

「力を求める乾いた魂よ――」闇の声はテツオにそう呼びかけた。「力がほしければ戦うがよい。この者を倒せば神をもおびやかす力はおまえのもの。力が力を支配する混沌のうねりを体現してみせるがよい。天魔アスラ王とともに――」

異形の姿が闇に浮かびあがった。だが一瞬だ。それは霧のようにテツオを包み、たちまちテツオの体に吸いこまれた。

「一対一の勝負にしよう」

テツオは剣を握って歩み出た。

## 超人カオスヒーロー出現！

LV99・HP2250・MP300・使用魔法　マハラギオン／シバブー／マリンカリン

【パーティー】

●ショウ　LV80

●アオイ　LV80

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

●魔王ダゴン

●魔神インドラ

●天魔セイテンタイセイ

●鬼神ビシャモンテン

【攻略法】

ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃またはジオンガ・ダゴン／通常攻撃・インドラ／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビ

シャモンテン／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】

今までの敵とくらべると弱い。アギラオでの攻撃くらいしかしてこない。通常攻撃で楽に倒せる。

## 天魔アスラ出現！

LV110・HP10000・MP400・使用魔法　マハラギオン／ディアラマ／メギドラオン

【パーティー】

●ショウ　LV82

●アオイ　LV82

※装備はどちらも魔王スルト戦闘時と同じデータ。220ページ参照。

【仲魔】

●魔神ヴィシュヌ

●魔王バエル

●鬼神ビシャモンテン

●天魔セイテンタイセイ

【攻略法】
ショウ／剣での攻撃・アオイ／ガンでの攻撃、または回復魔法・ヴィシュヌ／通常攻撃またはメギド・バエル／通常攻撃・セイテンタイセイ／通常攻撃・ビシャモンテン／通常攻撃

【ワンポイントアドバイス】
カオス側最後の敵だけあってミカエルと同じくらい強い。ミカエルと異なる点はかいしんの攻撃がなく、ディアラマが使えるところ。アスラの攻撃はメギドラオンで160〜170、マハラギオンで40前後、通常攻撃で160〜170程度のダメージを与えてくる。回復魔法を有効に使って全力で闘うしかない。魔法攻撃が効かない点にも注意。

ぼくは思わず身をひいた。
「なぜ逃げる？」テツオは満身に力をみなぎらせて剣をかまえた。「おれと戦えないのか？　力を失うのがこわいのだろう？」
「なぜ——なぜそんなにも力がほしいんだ？」
ぼくはさらに退きながら言った。
「力はさらなる欲望を生みだし、果てることがない。それこそ混沌のエネルギー。いったん浸れば逃れられな

い——」
声はテツオのものだった。だがぼくは別のものをかいま見た。
次の瞬間、テツオは身を躍らせた。ぼくはたちまち素早い剣さばきにまきこまれた。アスラは戦いの化身。テツオはその力を帯びていた。うなりをあげて繰り出される一撃一撃は受け止めるのがせいいっぱい。
ぼくはたちまち追い詰められた。
「ショウ——」
アオイが力を使おうとしているのがわかった。だがはっと息をのみ、体をこわばらせた。このとき彼女は力を封じられていたのだ。
「遠慮してんだろう？　おまえらしいな——」
容赦のないテツオの攻撃でぼくはよろめき、剣をはじき飛ばされた。床に片手をついたところでテツオの剣が頭上にひらめいた。
「残念だな、ショウ。こんなかたちで終るとはな——」
間にあわない——ぼくは床に転がった剣に目を走らせた。
すべてはアオイの悲鳴が消えないうちに起きて、終った。
テツオの一撃はぼくの予想よりわずかに遅れた。その理由を考えている余裕はなく、ぼくは反射的に自分の剣にとびつき、ふりむきざま、突き出した。
それはテツオのみぞおちのあたりを貫いた。彼は剣をふりあげた姿勢のままだった。
ぼくは意外な結果に心の痛みさえ忘れていた。
テツオは奇妙な表情を浮かべていた。なにかつぶやきながら、彼はゆっくりと崩れ落ちた。

「彼女が――」
アオイがかけよってきてテツオのパートナーを目で示した。その娘はぼくと目が合うと顔を歪めた。それがなぜか苦笑いのように見えた。
彼女がなにか力を使った？　テツオに？　だからぼくはテツオの一撃を逃れた？　なぜ？
驚くべきことはそれだけではなかった。
「これはまたとんだ番狂わせ――」
ぼくたちはぎょっとしてふりむいた。どこからあらわれたのか、上野で出会ったルイ・サイファーと名乗った謎の男がぼくたちの後ろに立っていた。
「どうしても…」テツオのパートナーが大きくあえいだ。「どうしてもできなかったわ」
「そういうことのようだな」
男の目がリエを捉えた。なにかぞっとするものが流れた。次の瞬間、彼女は青い炎に包まれた。
身をよじる女の姿が一瞬ユリコの姿に見えた。アオイにもそう映ったのだ。あっと声をあげた。女はこちらへ向かって腕をのばした。だがその姿はもう夜魔リリスのものだった。
ぼくは呆然とそれを眺めていた。なにが起きたのか？　ぼくがいま目にしていることはなにを意味するのか？
「約束なのだ。もう彼女は永遠に地獄から出られない」
その男はまるでぼくがあらゆる事情を知っているかのような調子で言って、うなずいてみせた。
そしてふっとぼくたちに背を向けた。男が奥の闇に向かって歩いているというより、闇のほうが迫ってくるように見えた。

ぼくは不意にテツオが最初につぶやいた言葉に思い当たった——これはやはり夢だったのか？
闇がその姿をのみこむ前に、男は一度だけふりむいてこう言った。
「あなたは勝った。選ばれたもののなかでただひとり役目を果たし終えた。たしかにそういうことですよ——」

すべてが終ったとき、ぼくは最初に見た夢を思いだしていた。トシキを十字架から解放した。テツオを悪魔から解放した。そのほんとうの意味をはじめて理解したように思った。人間はだれの道具でもない。法の奴隷でもなければ混沌の囚人でもない。それに気づくまで、どれだけ迷い悩んだか。テツオもトシキも、じつはぼく自身の姿だったのかもしれない。
悪夢の名残となり果てたカテドラルを出ると、不思議な光景が広がっていた。ぼくたちはどこか高い場所に突き出したテラスのようなところに立っていた。高い場所だと思ったのは、もやもやした霧か雲のようなものがゆっくりと流れていたからだ。
テラスの端にあの不思議な老人が座っていた。ぼくたちを見るとぎこちなく体をゆらした。老人がすっかり立ちあがるあいだに、浮浪者めいた姿は別の姿にすりかわっていた。
その背後で雲のようなものがふと途切れた。隙間はじれったいほどゆっくりと広がっていた。
「よくやった——」
老人はなにか言いかけていた。
ぼくはかなたの空間を凝視した。星がある——。

NEUTRAL DATA FILE:28▶FINAL ENDING

# ファイナル・エンディング

## 終章解説

このノベルズでは第26章以降の展開は、実際のゲームの進行とはかなり変えてある。データファイルのコーナーでそのフォローアップはしてあるので、プレイに行き詰まったひとはもう一度データを読み直すこと。いったんカテドラルまで入ったら、もうそれ以降属性は変わらない。で、ニュートラルのエンディングでは、太上老君がメッセージをプレイヤーに贈ってくれる。
そして遥かなる宇宙空間から地球を望む、ショウとアオイ……。

真・女神転生ファイナル・ストーリー
—ATLUS公式リプレイ攻略ノベル—

著者：井上尚美＆メガテン解析隊
制作協力：レッカ社
発行者：井上功夫
発行所：株式会社双葉社
〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL 03(5261)4818(営業)
03(5261)4837(編集)
振替 東京8−117299
印刷所：慶昌堂印刷株式会社
製本所：株式会社ダイワビーツー

落丁・乱丁は本社にてお取り替えいたします
定価・発行日はカバーに表示しております
©西谷史／シップス／ATLUS
©1993 Naomi Inoue
©1993 FUTABASHA
ISBN4-575-23149-5 C0093

【双葉社】